
星のカービィ ～はるかぜ物語～

はるかぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ〜はるかぜ物語〜

【Nコード】

N3444G

【作者名】

はるかぜ

【あらすじ】

あきれかえるほど平和な星「ポップスター」の楽園「ププランド」に妖精の女の子「リボン」が迷い込んできた。カービィは、困っているリボンに協力する事に…。「星のカービィ64」をベースにしています。

第1話 星空の夜に（前書き）

一度消しましたが、再び復活しました（＾―＾；）読んでくれとい
た方にはご迷惑をお掛けしました…。尚、この物語のタイトルと作
者の名前は関係ありません。

第1話 星空の夜に

広い広い宇宙に【リップルスター】という【妖精たちだけが住む星】がありました…。

それはそれは穏やかで平和な星でした。

…そう。あんな事が起こるまでは…

ある日、何処からか【真っ黒な雲】がリップルスターにかかり始めました。

不思議な事にその雲はリップルスター全体にかかっていきました…。

怪しく思った妖精の【リボン】は急いで女王様の所に行きました。

リボン

「女王様！外の様子が変です！」

女王様

「これを持って逃げなさい」

女王様はリボンに大きな宝石を渡した。

それは【クリスタル】と呼ばれるリップルスターの宝物でした。

女王様

「あの雲はきつとこれを狙ってるに違いありません。このクリスタ

ルは世界が変わるほどの強い力があるのです。だから決して渡すわけにはいきません！さあ、早くこの星から脱出しなさい！！」

リボン

「は、はい…！」

リボンがクリスタルに触れるとリボンの体にクリスタルが入っていった。

女王様

「今、あなたにはクリスタルの力が宿りました。これで宇宙空間にでも大丈夫です。さあ、早く！」

リボンはリップルスターを出て宇宙を飛び始めた…。

それからリボンは何日も飛び続け、疲れがたまってきた。

リボン

「っ、疲れたよ…。でも、もっと遠くに逃げなくちゃ…」

しかし、リボンは疲労のせいか、つい気をゆるめてしまった…。気がつくとき、前には大きな隕石が…！

リボン

「きゃっ…！」

リボンは、ぶつかりとバランスを崩し、黄色い星形の星に落ちて行ってしまった…。

さてさて、ここはあきれほど平和な星　【ポップスター】の楽園【ププランド】。

ププランドはすっかり暗くなり、誰もが家にいる時間になっていた…。

しかし、高い丘の上でのんびり座りながら星空を見ている人の姿があった。

ピンク色の体で身長は20cmほどの小柄な体。そう、誰もが知っている【カービィ】である。

こう見えてもカービィは何度もププランドの危機を救うために数々の敵と戦ってきた戦士だ。

カービィ

「わぁーッ！きれいな星だな…」

つついっ綺麗な星空に夢中になってしまうカービィ…。

それもそのはず。今日は雲が一つもなく、星たちが透き通る様に見えるからだ。

しばらく空を見上げていると、一筋の流れ星が見えた。

それを見たカービィは立ち上がった

カービィ

「あつ！流れ星だ！えつとー…僕が戦わなくてもずっと平和な星たちが見られますように…」

カービィは心を込めて流れ星に祈った。

カービィが祈っていると後ろの空から何かが落ちてきた。そう、さっき隕石にぶつかって落下したリボンである。

リボンは、そのままカービィの後頭部に直撃した！

カービィ

「いたっ！！」

カービィは、バタツとつぶせに倒れた。

カービィ

「いたたた…！い、一体何が当たったんだろ…？」

頭を押さえながら振り向くと、リボンが倒れていた。

カービィ

「え！？人ーッ！？」

カービィはすぐに駆け寄った。

カービィ

「（偶然僕に当たってクッションになってよかったけど、他の人とかだったら助からなかったよね…）」

カービィは、少しゾツとしたので考えるのを止めた。

カービィは、何回か体を揺すってみたが、気を失ったまま動かないので家に連れて帰り、自分のベッドに寝かせてあげた…。

カービィ

「傷はたいしたことはないし、よかった…」

寝ているリボンを見てみると、カービィもうつうつと眠くなってしまい、ベッドに寄り掛かって寝てしまった…。

そして、次の日になった。

リボンが寝ているベッドには窓から朝日が入ってきていた…。

リボン

「うーん…」

リボンは、目を覚ました。

よく分からないが、ベッドに寝かされていたため【誰かに助けられた】という事はなんとなく分かっていた…。

リボン

「ここは…？私、確か隕石とぶつかって落ちたんだよね…」

リボンは、体を起こして周りを見てみたが誰もいなかった…。

リボン

「誰もいない…？一体誰が助けてくれたんだろ…」

すると、ベッドの下の方から寝息が聞こえて来た。

カービィ

「スウ…スウ……ムニャ…」

リボンは、ベッドから下りてカービィに近づいた…。

リボン

「この人が助けてくれたのかな…？」

リボンは、グッスリ眠っているカービィをじっと見めた…。

すると、カービィは目を覚ました。

カービィ

「ふわぁあ…！…え！？」

カービィが目を覚ますと目の前にリボンがいた。

カービィ

「うわぁっ！…び、びっくりしたぁ…」

カービィは、驚いて思わず声を上げてしまった。

リボン

「ゴ、ゴメンなさい…。驚かせちゃって…」

カービィ

「あ…！いいいいよ。僕、カービィ！君の名前は？」

リボン

「私はリボンです。助けてくれてありがとうございます」

カービィ

「敬語なんか使わなくていいよ！それに呼び捨てでいいからね。それよりどうして空から落ちてきたの？見た感じポップスターの人じ

やないよね？」

リボン

「私、リップルスターから逃げてきたの…」

カービィは、リボンの言葉に驚き、思わず聞き返した。

カービィ

「に、逃げてきた！？」

リボン

「うん…。突然、宇宙から黒い雲みたいな物がやってきて、リップルスターを飲み込むように覆いつくしたの…。私、女王様にクリスタルを持つて逃げるように言われて逃げてきたんだけど…隕石とぶつかっちゃって…」

カービィ

「クリスタル…？」

カービィは、首を傾げた。

そして、リボンからクリスタルの事を詳しく聞いた。

そして、それが今はリボンの体に宿してある事も知った…。

カービィ

「じゃあ、クリスタルを守りながらリップルスターを元に戻す必要があるって事か…」

リボン

「早くしないと女王様たちが…」

リボンは目に涙を浮べた……。

カービィ

「（クリスタルが狙われてるって事は、リボンちゃんも狙われてるって事だよね…）」

カービィは、リボンの顔をじっと見つめた…。

涙を浮かべながら困っているリボンを見るのがカービィにはとても辛かった…。

しばらく考えると、カービィはリボンの肩をポンっとたたいた。

カービィ

「僕、協力するよ！」

リボン

「えッ！？で、でも…」

カービィ

「大丈夫！！こうみえても結構強いんだから！」

カービィは笑って答えた。これにリボンも安心したのかニッコリ笑った。

カービィ

「そーいえば朝ご飯まだだね！食べたらずぷぷランドを案内してあげるよ！！」

リボン

「うん！」

カービィは、笑いながらも今回は大変な戦いになりそうな事は薄々
感じているようだ。

困ったりボンを助けるためにカービィの新しい戦いはこうして始ま
った！！

第1話

【星空の夜に】おわり

第2話 三つ子の黒い雲

やあ、みんな！！

僕、カービィだよ！

リボンちゃんがリップルスターに帰れるように協力することになったんだ！

それで、村を案内することになったんだけど、なんだかこの星にも敵が迫ってるみたい…。

カービィとリボンは朝食を済せると家の外に出た。
外は太陽がとても眩しい。

リボン

「きゃあ〜！眩しい〜！！」

リボンは、背伸びをして背中についている羽で飛び始めた。

カービィ

「リボンちゃん！村に行こー！！」

リボン

「はい！」

カービィとリボンは、村に向かって歩いて行った…。

リボン

「プププランドってのどこで素敵な所だね！まるでリップルスターみたい！」

カービィ

「じゃあやっぱリップルスターも素敵な所なんだ！」

リボン

「うん！」

すると、カービィとリボンが村に向かっていているのをまるで観察するかのように、三つの黒い雲のようなものが空から見ていた…。

????

「見つけたぞ…！」

????2

「誰かと一緒のようだな…！」

????3

「どうせこの星の住人だろう…。邪魔をする奴は排除してもいいとボスも言ってたしな」

カービィ

「村に着いたよ！」

リボン

「うわぁー……！結構にぎわってるんだ！」

カービィ

「この村の人たちは本当にいい人ばっかなんだよ！」

ププブランドの村は、村と言うより町に近い感じの活気あふれる村だ。

すると、村人が1人話しかけてきた。

髪の毛は赤くて長く、いかにも燃えているような感じの人だ。

バーニンレオ

「おう！カービィ」

カービィ

「やつほ♪バーニンレオ。相変わらず燃えてるね〜」

バーニンレオ

「へへ。まあな！それより今日はデートか？」

カービィ

「違うよ！この子はこの星に来たばかりなんだ。だから案内してるんだよ」

バーニンレオ

「そうか。お嬢ちゃん。最近はこの辺も変な事が起きてるから気をつけな」

そう言うのと、バーニンレオは歩いて行ってしまった…。

リボン

「…そうなの？カービィ」

リボンは、心配そうな顔をしながら言った…。

カービィ

「うん…。優しい人がいきなり暴れ出したりしてるらしいんだ」

すると、カービィは何だか不安になり、村を出た。

しかし、それは単なる思い過ごしではなかった…。

カービィとリボンが家に向かってしていると後ろから声が聞こえてきた。

振り向くと黒い雲のような物が浮いていた。

ダーク・リムロ

「リボンちゃん？クリスタルは何処かな？」

リボン

「カ、カービィ…！」

カービィとリボンは逃げようとしたが、すでに黒い雲が二つカービィたちを囲んでいた。

カービィ

「お前たち、リップルスターから来たんでしょ！？」

リボンは、カービィにしがみついた。

ダーク・リムロ

「よく分かったな。オレたちはボスの体から生まれた三つ子さ！」

ダーク・リムル

「さあ、大人しくリボンを渡してもらおうか？」

ダーク・リムラ

「まだ死にたくはないだろ…？」

カービィは、リボンを抱き抱えると、ジャンプして囲まれてる状態から外に出た。

そしてニコツと笑った。

カービィ

「僕がそう簡単にリボンちゃんを渡すと思うの？」

ダーク・リムラ

「こ、こいつ…！オレが思い知らせてやる…！」

ダーク・リムラは物凄いスピードで突進してきた。

カービィ

「リボンちゃん。危ないから下がって…！」

カービィは、リボンに離れるように言うと、ジャンプをした。

そして、カービィはあっさりとダーク・リムラの突進をかわしてしまった！

ダーク・リムラ

「こ、こいつめ…！」

ダーク・リムラは自分の体から小さな黒い雲を生み出した。

ダーク・リムラ

「行け！あいつを倒せ！！」

小さい黒い雲はカービィ向かって飛んで来た！

すると、カービィは口を開けて吸い込み始めた！

カービィは黒い雲を吸い込み終わると、ダーク・リムラに向かって吐き出した！

カービィ

「えいつ！」

カービィが吐き出すと星型の弾になっていた。

星型弾は、ダーク・リムラの大きな目に命中した！
すると、ダーク・リムラは苦しみ始めた。

ダーク・リムラ

「ぐ…！なぜ弱点を…？」

カービィ

「だってパツと見大きな目がそうかな～と思って…」

カービィは、苦笑いしながら答えた。

ダーク・リムラ

「こいつ…！ただの村人じゃ…ねえ…」

ダーク・リムラは煙のように消えていった…。

ダーク・リムロ

「リムラがやられただと!？」

ダーク・リムル

「どうすんだ!?!オレたち双子になっちまったぜ!」

ダーク・リムロ

「そ、そういう問題じゃないだろ!!!」

全くその通りである。カービィは、まだまだ余裕の表情を見せていた。

カービィ

「次はどっちが相手なの?それとも同時?」

ダーク・リムロ

「ぐ…!」

ダーク・リムロたちはカービィの予想外の強さに驚き、焦り始めていた…。

すると、村の方から人が二人やってきた。

大きな目をもつ【ワドルドウ】と、いつものんきな【ワドルディ】である。

ワドルドウ

「おーい!カービィー!!」

ワドルディ

「何かあったんっすか!？」

すると、カービィは二人がこっちに来ないように大きな声を出した。

カービィ

「ダメー!こっちに来ちゃダメだよー!!」

ワドルディ& amp・ワドルドウ

「え…?」

ダーク・リムロ

「(しめたぞ!乗り移れる!)」

ダーク・リムロとダーク・リムルはワドルディたちに向かって飛んで行った!

ワドルディ& amp・ワドルドウ

「うわああゝ!!」

ダーク・リムロたちはワドルディたちにぶつかると、ワドルディたちに移った!

ダーク・リムロはワドルディに。

ダーク・リムルはワドルドウに移った。

ダーク・リムル

「この星の住人は不思議な力を持つ奴らが多いらしいな」

リボン

「どうなってるの？」

カービィ

「乗り移ったって事かな…？もしかしたら、最近事件を起こしたのはこいつらかも…」

ワドルドゥに乗り移ったダーク・リムルはビームで攻撃をしてきた。

カービィ

「うわっ！」

ダーク・リムル

「こいつはビームが得意技か！ちょうどいい！」

ダーク・リムルは、カービィに向かってビームを連続で放ってきている。

カービィ

「わぁっ！うわっ！」

カービィは、何とかかわしているが危ない状態だ。

カービィ

「（黙って帰れば許そうと思ったけど、もう我慢できない！コピー能力使っちゃうもん！ー）」

カービィは、ダーク・リムルがビームを発射した瞬間に吸い込みを始めた！

カービィがビームを飲み込むと、体が黄色になって頭に魔法使いのような帽子が付いた。

リボン

「カービィが…変身した!？」

ダーク・リムル

「変身だと!？」

ダーク・リムルたちは、カービィが変身した事に驚いた。

カービィ

「僕は相手の攻撃とかを飲み込む事によってその得意技をコピーできるんだよ!」

カービィは、手に持っている小さなステッキからムチのようなビームを出した。

ダーク・リムル

「ギャッ!」

カービィの攻撃に当たると、ダーク・リムルはワドルドウの体から離れた…。

すると、カービィエネルギーを溜めていた…。

カービィ

「波動ビーム!」

カービィから発射されたビームはダーク・リムルに当たった！
すると、ダーク・リムルは消えていった。

ダーク・リムル

「結局一人っ子かよ！…ってそんなのんきな事を言ってる場合じゃない！こいつの能力は……。ない…？」

ダーク・リムルは、固まって動かなくなってしまった…。

リボン

「何考えてるのかな？さつきから動かないよ」

カービィ

「多分攻撃出来ないんだよ。ワドルディはパラソルを持ってなくちや能力がないスカキャラだし…」

ダーク・リムル

「ええい！こんな体はいらねえ！逃げるぜ！！」

ダーク・リムルは、ワドルディの体から抜けると空に飛んで行った。

ワドルディ

「（ヒドい…。それはあんまりっス…）」

ワドルディは心の中で泣いていた…。

カービィ

「あっ！待て〜！ワープスターツ！！」

カービィは空に向かって叫んだ。

すると、空から星が降りて来た。カービィは、ワープスターに乗るとダーク・リムルを追いかけて行った。

そして、追いつくとビームを放った！

カービィ

「くらえ〜！ビームッ！！」

ダーク・リムル

「ギャアア〜！！！」

ダーク・リムルは消滅した…。

安心したカービィはすぐにリボンの所に行った。

リボン

「カービィすごい！！！」

カービィ

「アハハ…！ちょっと危なかったけどね。（それよりワドルディ…ちよっとかわいそうだったなー…）」

カービィは、苦笑いした…。

ワドルディ

「あんまりっスう〜…！！！」

ワドルディは、まだ泣いていた…。

今回、黒い雲の手下たちはカービィがあっさりと倒してしまった。
しかし、次はどんな敵が来るのかは、まだ分からない…。

第2話

【三つ子の黒い雲】

おわり

ワドルディ

「あんまりっスうゝ!!!!!!」

→（まだ言ってる）

第3話 登場！怪しい魔法使い

こんにちは♪

リボンです！

カービィに村を案内してもらったんだけど、とっても素敵村で気に入っちゃった！！

でも、黒い雲の手下たちに襲われて怖かったけどカービィがやっつけてくれたんだ！

でも、私の居場所が黒い雲たちに分かっちゃったみたい…。

リップルスター…

リップルスターでは、黒い雲が完全に空を覆いつくしてしまっている……

元々妖精たちが住んでいたお城では、黒い雲のボスたちが何やら話をしていた。

黒い雲のボス

「リム口たちがやられたか…」

????

「一体どーなってるのサ!？」

黒い雲のボス

「分かんが、カービィという奴が予想以上に手強いらしい…」

???

「それならこの僕にお任せくださいなのサ！必ずクリスタルを奪ってくるのサー！」

黒い雲のボス

「ほう…。では行つて来い」

???

「この最強の魔法使いに不可能なんてないのサ！」

「自称」最強の魔法使いはポップスターに向かって飛んで行った。

???

「自称じゃないのサー！」

そのころ、ポップスターではカービィとリボンの所に友達が二人来ていた。

その友達とは、ハムスターの「リック」とフクロウの「クー」であった。

リボン

「は、はじめまして。リボンです」

リック

「おう。オレはリック！よろしくな」

クー

「オレはクー。オレたちは普段は森にいるからいつでも遊びにおいてよ」

リボン

「うん！ありがとう」

するとクーは、カービィを誰もいない所に連れて行った。

クー

「カービィ。あの子が狙われてるってホントなのか…？」

クーは、心配そうにカービィに聞いた。

カービィ

「うん…。もうすでに一回ポップスターに狙って来たんだ…」

クー

「そうか…。でもあの子が来る前からププランドにおかしな事が起きてたし……」

カービィ

「リボンちゃんを狙ってる人たちと何か関係してるのかな…？」

考えれば考えるほど複雑になり分からなくなっていった…。

クー

「とりあえず今はお前が頼りだからな！守ってあげな…！」

カービィ

「うん。たまにはクーたちも協力してよね〜!!」

クー

「おう。分かった分かった!!」

そう言うのと、リックとクーは森に帰って行った。

リボン

「ポップスターの人たちってホントにいい人ばかりだね!!」

リボンはポップスターに来てから初めての友達が出来て嬉しいようだ。

カービィ

「仲良くなれてよかった!リックとクーもたまに一緒に戦ってくれるんだ!」

カービィも仲良くなれた事に安心したのか、ニコツと笑いながら言った。

リボン

「へえ〜…。心強いね!」

カービィとリボンは家に向かって歩き始めた。辺りは夕焼けで真っ赤に染まっていた……。

するとカービィは買い物をするのを忘れていた事を思い出した。

カービィ

「あーッ!!!買い物するの忘れちゃった!」

リボン

「じゃあ私が行って来るよ！」

カービィ

「ゴメーン！お願いね〜」

リボンは村のスーパーに向かって飛んで行った。
リボンが村に着くと見慣れない建物が増えていた…。

リボン

「……？こんな建物あつたっけ……？」

リボンは不思議に思いつつもスーパーに入って行った。
すると怪しい建物の中からリボンを水晶玉でずっと見ている人がいた

???

「見つけたのサ、体にクリスタルを隠してるつもり見ただけど、
僕にはバレバレなのサ！」

しばらくするとリボンはスーパーから出て来た。
するとリボンは猛スピードで帰って行った。

???

「まさか勘づかれた！？」

しかし実際は氷が溶けたら困るから急いでいただけなのであった。

リボン

「早く帰らなきゃ氷が溶けちゃうよ〜！！」

そして次の日…

リボンの話を聞いて興味を持ったカービィは、二人で建物に入ってみることにした。

カービィ

「へえ…。ホントだ。いつの間に出来たんだろ…？」

リボン

「マルクの占い屋だって……」

カービィ

「フーン……。入ってみよっか！」

リボン

「うん！」

占いと聞いて張り切るリボン。さすがは女の子である。

そしてカービィとリボンは扉を開けて中に入った…。

カービィ & a m p ; リボン

「こんにちはー…」

マルク

「やあ！いらっしやいなサー！」

店の中には小柄で目が大きい人が一人座っていた。

カービィ

「君がマルクさん？」

マルク

「これは可愛いお客さんたちのサ！そうなのサ！僕がマルクなのサ」

リボン

「ここって占いやってるんですか？」

マルク

「そうだよ。何か占ってほしいのかい？」

リボン

「えーっと…この人との相性を占ってほしいの！」

リボンはそういうとカービィの肩をつかんだ。

カービィ

「えー！？ちよっ！！リボンちゃん！？」

リボン

「えへへ…！まあいいじゃん！せっかくだし」

マルク

「リボンちゃんとカービィさんだね！まかせるのサ！」

マルクは水晶玉を使って占いを始めた。

マルク

「見えるのサ！二人はこれからも仲良しでいられるのサ！」

リボン

「よかった！」

カービィ

「（もしダメだったらどうなってたんだろ…？）」

カービィは、目を点にしながらふと考えてしまった…。

マルク

「特に今日はラッキーな日なのサ！今から村の外れにある広場に行ってみるといいのサ！」

それを聞いたリボンはさらに嬉しくなったようだ。

リボン

「ありがとうございます！！カービィ、行ってみよ！」

リボンはカービィの手をつかむとカービィを引きずりながら飛び始めた！

カービィ

「ちょっとー！？リボンちゃん！！（女の子って怖いよー！！）」

「

カービィは引きずりながら外に出て行つた。

マルク

「ククク…気付かれなかったのサ、今からクリスタルを奪ってやるのサ…！」

マルクは不気味に笑い始めた……。

リボンはルンルン気分で飛んでいた。
そうとう占いが気になるようだ。

リボン

「一体何があるんだろ、楽しみだね！」

カービィ

「リボンちゃんはしゃぎすぎだよ…。(でも、占いて本当に女の子を夢中にさせるんだね…。)」

そんな話をしているうちに広場に着いた…。しかし広場は村外れにあるため、いつもと変わらず人は一人もいなかった。

カービィ

「(何だろ……誰かに見られてる…。そんな気が…。)」

カービィは、辺りを見回した…。

リボン

「カービィ。どうする？何にも無いよ……。」

リボンの気分は急降下したのか大人しくなった。

カービィ

「確かに何か変だね……。帰ろう！」

カービィたちは帰ろうと振り返った。
すると突然ビームのようなものがカービィに直撃した！

カービィ

「うわああッ！！」

リボン

「カ、カービィー！！」

リボンは倒れたカービィにすぐに駆け寄った。

マルク

「フッフ！そんなに簡単に逃がす訳には行かないのサ♪」

リボン

「君はもしかしてさっきの……。マルクさん！？」

マルク

「そうだよ。よくわかったのサ！」

リボンはびっくりした。マルクはさっきの可愛らしい小柄な姿から
巨大なコウモリのような姿に変わっていたからである。

マルク

「さっきの姿は正体を隠すための姿なのサ！そしてこれが魔法使い
マルク様の本当の姿なのサー！！」

カービィは頑張つて立ち上がろうとしたが前に倒れてしまった。
なんとマルクの攻撃はカービィの右足に当たっていたのである。

カービィ

「いつっ…！立ち上がれない…！」

マルク

「ククク…。その足のケガじゃもう動くことも出来ないのさ！大人しくリボンちゃんを渡すのサ…！」

リボン

「カ、カービィ…！」

リボンはカービィをかばっている。

カービィ

「リボンちゃん。ぼ、僕を持ち上げられる？」

相当足が痛むのだろう…。

カービィは、顔に汗をにじませながら言った。

リボン

「う、うん」

カービィ

「じゃあ僕の背中を持って森に向かって飛んで…！」

リボンはうなずくとカービィを持ち上げて宙に浮いた。

マルク

「何をたくらんでいるかは知らないけど、逃がさないのサ！」

するとカービィは池の水を吸い込むとマルクに向かって放水した！

マルク

「な、何をするのサ！？」

マルクは水の力で木に勢いよくたたき付けられた。

カービィ

「（チ、チャンス…！）リボンちゃん！森に向かって！」

リボンはカービィを抱えて森に向かって飛んで行った…。

マルク

「思ったよりやるのサ…。でも僕はクリスタルの力を感じとることが
できるのサ！すぐに見つけてあげるのサ」

マルクも森に向かって飛び始めた…。

リボン

「カービィ、大丈夫…？」

リボンは、心配そうにカービィに言った。

カービィ

「な、何とかね…。ズキズキ痛むけど…。」

リボンはカービィをしっかりと抱えて飛んでいた。

カービィ

「あ、あの太い木を左に曲がって…！」

リボン

「分かった！」

左に曲がると森の広場のような所に着いた…
そしてよく見ると、リックがいた。

リック

「カ、カービィ！？その足はどうしたんだよ！？」

さすがのリックも歩けない程のカービィを見て驚いていた。

カービィ

「ち、ちよつと油断しちゃって……。いつつ…！」

リボンはゆっくりとカービィを座らせた。

リック

「それにしたってリボンちゃんに運ばせるなよ。お前にはワープスターがあるだろ」

カービィ

「確かにそうだけど、ワープスターに乗れても立てないから……」

リック

「そ、そつか…。とりあえずここはマズいな…。近くにほらあながあるから移動しよう！」

カービィはまたゆっくりと抱き上げられた。

カービィ

「ゴメンね…リボンちゃん」

リボン

「大丈夫だよ！」

リックたちはほらあなを目指してさらに森の奥に向かって行った。

カービィたちはほらあなに着いた。

中には誰かが使ったと思われるランプが落ちていた。

リック

「おっ！ちょうどいいな。火をつけておこつ」

リックは石を擦り合わせて、薪に火をつけるとランプに入れた。

リック

「でも困ったな…。敵はすぐ近くまで来てるんだろ？見つかるのも時間の問題だし…。カービィは動けないし…」

リックは、不安そうな表情を浮かべながらカービィを見た…。

カービィ

「多分大丈夫だよ。あいつに正確な場所まではさすがに分かんないよ…」

カービィは、時々激痛が走るのか、足を押さえながらそう言った。

しかしほらあなの外からマルクの声が聞こえてきた…。

マルク

「隠れても無駄なのサ！僕はクリスタルの力を感じとれるから近くにいるのはバレバレなのサ！！」

カービィ

「ほらあなでバレたら不利だよ。外に出よう！！」

リボン

「でも今戦っても勝てないよ…！」

リボンは本当にカービィが心配なのだろう。リボンはカービィにしがみついた。

カービィ

「た、確かに勝てないけど…。でも、追い出す事なら出来るかもしれないよ…！」

リボンはカービィを抱き上げた。

リボン

「分かった…。でも無理しないでね！」

カービィはうなずいた。

リック

「よし！行くぜ！！」

リックたちはランプを持って外に出た。

外に出るとほらあなの前にはマルクが待ち構えていた。

カービィ

「お望みどおり出てきてあげたよ！」

マルク

「その足でどうやって戦うの！？笑っちゃうのサ！」

マルクは笑い出した。

カービィ

「リボンちゃん。僕をリックの背中に乗せて！」

リボン

「う、うん」

リボンは不思議に思いながらもカービィをリックの背中に乗せた。

カービィ

「ありがとう！じゃあ下がっててね！」

リック

「合体完了だな！」

リックは戦う気は満々である。

するとマルクは笑い出した。

マルク

「何が合体なのサ！笑わせるのもいい加減にするのサ！！」

するとリックは火の付いたランプを飲み込んだ！

カービィ

「ファイヤーコピー完了だよ！」

リック

「くらええーッ！！」

なんと、リックは炎を吐き出した！

マルク

「あちちッ！！ど、どうなってるのサ！？コピー能力はカービィだけしか出来ないハズなのサ！！」

マルクは一瞬ひるんだ。

リック

「へへっ！オレはカービィと合体することでコピー能力が使えるんだぜ！」

カービィ

「リック、今だよ！僕をマルクに向かって投げて！！！」

リック

「行くぜえー！！！」

リックはカービィをつかむとマルクに向かって思いっきり投げた。

カービィ

「バーニング…アタック!!」

カービィは火の玉になってマルクにぶつかった!

マルク

「……ク…!結構やるのサ…!今日は見逃してやるのサ!!」

【自称】最強の魔法使いは姿を消した…。

マルク

「だーから!自称じゃないのサーツ!!」

マルクは誰かに騒ぎながら消えた。

リボン

「カービィ、大丈夫!?!」

カービィ

「ま、まあ…ね…」

カービィは無理に立ち上がろうとした。

すると、カービィの足に信じられないような激痛が走った!

カービィ

「いつつ……!ダメだ…もう動けないよ…」

リック

「とりあえず急いで医者に連れてこう!」

リボン

「私が連れてくよ!!」

リボンはそういうとカービィを抱き上げた。そして村に向かって飛んで行った…。

カービィのケガは一体どうなってしまっのか!?
それはまた次のお話で…

第3話

【登場! 怪しい魔法使い】

おわり

第4話 狙われるカービィ！

よお！

オレ、リック！

びっくりしちゃったぜなんてたってカービィが足をケガして逃げて来たんだからな。

しかも、敵は「マルク」っていうリボンちゃんのクリスタルの力を感じることが出来るヤツを送り込んで来やがったんだ…。

今回も足の治らないカービィを襲ってるみたいだし、汚いヤツだぜ！

カービィはすぐに村の医者連れて行かれた。

医者

「これは痛いかね？」

医者はカービィの足を少しひねった。

カービィ

「いたッ…！いつッ…！！」

医者

「ほう…。だいぶ重傷じゃな……。普通の人だったら完治するまで2週間位かかるがカービィ君の回復力なら五日もあれば大丈夫じゃろっ」

カービィ

「あ、ありがとうございます……」

医者

「カービィ君。いくら星の戦士だからといって無理をしちゃいかんよ。お前さんがやられてしまったらププランドも危なくなる。それに……その子も悲しむじゃろ？」

そついうと医者はリボンに目をやった。

リボン

「……？」

リボンは、首を傾げた。

カービィ

「はい。分かりました！」

医者

「お大事にな……（カービィ君も今回は大変な事に立ち向かっているようじゃのう……）」

カービィはリボンにしっかりと抱き上げられたまま外に出た。

カービィ

「リボンちゃん、大丈夫だよ！僕ワープスターで……」

リボン

「だーめ……！ケガ人何だから無理しちゃダメだよ！」

カービィ

「はい……」

その頃、カービィに追い返されたマルクはププランドに作った基地に帰っていた…。

マルク

「く〜！この星の住人はホントに不思議なヤツばかりなのサ！こ
うなったらクリスタルを奪う前に邪魔なカービィから消してあげる
のサ！」

そう言うともマルクは水晶玉にカービィとリボンをうつしだした。

マルク

「今のカービィは足をケガしてるから自由に動く事はできないのサ
」

マルクが水晶玉でカービィたちを見ていると、誰かがマルクの後ろ
から水晶玉を覗き込んできた。

???

「ねえねえ。どっちがカービィちゃんなの？」

マルク

「このピンクのボールみたいなヤツがカービィで、こっちの妖精が
クリスタルを持ってるリボンちゃんなのサ」

???

「フーン…」

マルク

「リボンちゃんはクリスタルを体から抜き取らないとダメなのサ！どっちにしろ、僕が簡単な罠で捕まえるからそこをお前にまかせるのサ！」

???

「やった〜。楽しみ！」

マルクの後ろにいるヤツは本当に嬉しそうに言った。

マルク

「カービイもこれで終わりなのサー！」

マルクは不気味に笑い出した。

カービイはベッドに座らされた。

カービイ

「ねえ、リボンちゃん。ゴメンね……なかなかリップルスターに向かえなくて……」

リボン

「いいの！だって助けられてるのは私の方だし……。それに、ポップスターだってしっかり守らなくちゃ！」

カービイ

「そう言ってくれると嬉しいよ！」

するとリボンは夕飯を作り始めた…。

リボン

「カービィ。絶対に動いちゃダメだよ!」

カービィ

「は、はぁい…(リボンちゃんって極端すぎる所もあるけど、優しいよね…)」

カービィはベッドに寝転んで何やら考え始めた。

カービィ

「(ケガが治るまで何にも起こらなきゃいいけど…。マルクってやつ、意外としつこそうだし…)」

リボン

「カービィ。ご飯出来たよ!」

リボンは夕飯をカービィの所まで運んできた。

カービィ

「ありがとう!(まあ…あとで考えよっかな)」

そして次の日になった。

リボン

「痛い…?」

リボンはカービィの足を軽くひねった。

カービィ

「いつつ…！」

リボン

「ゴ、ゴメン…！ひねりすぎた！？」

カービィ

「大丈夫大丈夫！昨日より痛くないし…！」

すると外からワドルディの声が聞こえてきた。

ワドルディ

「カービィ！居るっスか？」

カービィ

「はい！ちよつと待ってー！！」

カービィはリボンに抱えられて外にでた。

ワドルディ

「大丈夫っスか？足の具合は」

カービィ

「まだ歩けないけど痛みはだいぶひいたかな……」

ワドルディ

「よかったっス！これから散歩に行こうと思って誘いにきたんだけど、どうっスか！？」

カービィ

「うーん…。まあ、リボンちゃんの気分転換にもなるし、いいよ！」

ワドルディ

「じゃあさっそく行くっス！」

カービィたちは村に向かって散歩を始めた。今日のププランドは青空がとても綺麗だ。するとワドルディはマルクの話始めた。

ワドルディ

「でもまさかマルクさんがこの前オイラの体に乗っ取ったヤツの仲間なんて信じられないっス……」

カービィ

「まあまあ。でもまさか最強の魔法使いだったなんてね……」

リボン

「カービィ。本当に無茶だけはしないでね……」

リボンは自分のせいでカービィがケガをしたと責任を感じているのだろう。

少し小さな声で言った。

カービィ

「リボンちゃんのせいじゃないって！ね？」

リボン

「でも、私と一緒にじゃなかったらケガだってしなかったかもしれないから……」

カービィ

「それは僕が協力したいって言っただけじゃん！それにマルクが来

たつて負けないよ」

すると後ろから不気味な笑い声が聞こえてきた！

マルク

「カービィ。それはどういう事なのサ？」

ワドルディ

「で、出たあ！！オバケっスうー！怖いっスーッ！！」

ワドルディはよほどマルクの変身した顔が怖かったのだろう。一人で叫びながら走って行ってしまった…。

マルク

「し、失礼な！僕はオバケじゃないのサ！！」

マルクはワドルディに向かって怒っていたが振り返るとカービィとリボンがいない事に気付いた…。

マルク

「クリスタルの力は村と反対方向に向かつてるのサ！作戦成功なのサッ」

リボンはカービィを抱いて村から離れている洞窟に向かつて飛んでいた。

リボン

「ねえ、カービィ。こっちでいいの？」

カービィ

「村から離れないと他の人が危険だからね。ひとまず洞窟に行こう！確か通り抜けられるハズだから」

カービィたちは洞窟の中に入った。

すると大きな音とともに入り口がふさがってしまった！

カービィ & amp・リボン

「え！？」

カービィ

「し、閉まっちゃった…」

この洞窟はとても暗いハズだがいきなり明かりがついたように明るくなった。

そしてよく見ると何かが動いていた…。

???

「えーっと、君がボールちゃんでこっちがいちごちゃんだっけ？」

カービィ

「ちがーう！！僕はボールじゃないもん！」

リボン

「私もいちごじゃないよ！」

???

「そうだ！カービィちゃんとリボンちゃんだ！私はね、マルク様の手下だよ！」

そういうと大きなカメレオンが現れた。
そしてそれと同時にマルクも現れた。

マルク

「この子はガメレオアームなのサ！ガメレオアーム、カービィを倒してリボンちゃんだけ捕まえてくるのサ！」

そう言うともマルクは姿を消した…。

カービィ

「あ…！待てッ…！」

カービィは、マルクに向かって叫んだ。すると、ガメレオアームが立ちはだかった。

ガメレオアーム

「待ちなさい。君達の相手は私だよ！」

ガメレオアームはカービィたちに近づいてきた。

カービィ

「リボンちゃん。僕から離れて！」

リボン

「で、でも足が…」

カービィ

「だ、大丈夫だから！」

カービィは地面に立った…。

カービィ

「……っっ…！」

カービィは少しグラついた。

ガメレオアーム

「スキあり〜！」

ガメレオアームは舌を伸ばしてカービィを捕まえると勢いよく吐き出して壁にたたき付けた！

カービィ

「うっ…！いつつう…！！」

カービィは足を抱えて倒れた。

ガメレオアーム

「ゴメンね！カービィちゃん足をケガしてるんだっけ？」

ガメレオアームはそう言うのと足をゴムのように伸ばして攻撃してきた。

カービィ

「うわっ！」

カービィは蹴り飛ばされて宙に浮いた。
それを見たガメレオアームは口を開けた。

ガメレオアーム

「ラッキー！いただきまーす♪」

するとリボンは飛んでカービィをキャッチした。

リボン

「カービィ、しっかり！」

カービィ

「あ、ありがと、リボンちゃん！」

カービィとリボンはガメレオアームから少し離れた…。

リボン

「カービィ、やっぱり全然動けてないよ…」

カービィ

「で、でも…何とかして戦わないと…！」

ガメレオアームは再びゆっくりとせまって来た。

ガメレオアーム

「リボンちゃん。早くカービィちゃんから離れなさい！あなたはあとで捕まえてあげるから」

カービィ

「（とにかくここから出ないと…！狭い洞窟じゃ相手の方が有利だ…。でもどうやって出ればいいんだろ…）」

ガメレオアーム

「しょーがないな。カービィちゃんと一緒に捕まえてあげるね！」
するとカービィは何かを思い付いた！

カービィ

「そ、そうだ！ワープスター！！」

カービィはワープスターを呼んだ。
すると、ワープスターはガメレオアームの上の天井を突き破って来た。

ガメレオアーム

「な、何よ！？」

ガメレオアームはあっという間に崩れてきた岩の残骸に埋まってしまった。

それを見たリボンとカービィは目が点になっていた…。

リボン

「ねえ、カービィ……」

カービィ

「うん…。まさかここまで上手くいくなんて…」

カービィは苦笑いをした。

カービィとリボンはワープスターに乗って洞窟から出た。
そして、それを追いかけてガメレオアームも飛び出してきた。

カービィ

「何かコピーできる物は…」

カービィはワープスターに乗ったまま、コピーできる物を探し始めた。

すると、ワドルディが川で釣りをしているのを見つけた。

ワドルディ

「カービィは一体何処に行ったんスカねー…。変なオバケも見ろし…。まあ、気をとりなおして釣りっス！」

カービィ

「釣り…。釣針…。針！？」

カービィは、ワドルディの釣りざおを取った！

カービィ

「ゴメーン！ちょっと借りるよー！」

ワドルディ

「カービィ！それはあんまりっスうゝ…」

ワドルディが叫ぶとすぐ近くをガメレオアームが通り過ぎた。

ワドルディ

「ギャアーツ！！今度はカメレオンのオバケっスー！！」

ワドルディは巨大なカメレオンを見て、また走って逃げに行った。

ガメレオアーム

「し、失礼ね！オバケじゃないわ！…！」

リボン

「カービィ…。その釣りざおどつするの…？」

カービィ

「使うのは針だけだよ！」

そういうとカービィは釣針を飲み込んだ。

するとカービィの体は黄色になって頭には針のついた帽子がついた。

カービィ

「ニードルコピー完了！」

カービィは、振り向くとガメレオアームに帽子の針を発射した。

ガメレオアーム

「きゃっ！な、何するのよ！？」

ガメレオアームは舌を伸ばしてきた！

カービィ

「よっ…と…！」

カービィはワープスターを細かく操って交わした！

ガメレオアーム

「さすがはカービィちゃんね！でもこれはどうかしら？フフッ」

するとガメレオアームは急に見えなくなってしまうた！

カービィ & amp ;リボン

「えっ！？」

ガメレオアーム

「こつちよ！」

ガメレオアームはカービィたちの後ろからキックをした！

カービィ

「うわっ！？」

カービィはワープスターから振り落とされた…。

ガメレオアーム

「驚いた？私は景色と全く同じ模様になれるのよ！」

ガメレオアームはカービィに連続キックをした！

カービィ

「うう………！」

ガメレオアーム

「じゃあそろそろ食べちゃおうかな♪あ、その前にカービィちゃんをもっとおいしそうな色に変えてあげましょ！」

するとガメレオアームは、カービィに向かってペイントボールを吐きだした。

カービィ

「（ペ、ペイント？もしかしたら…！）」

カービィは、急に立ち上がってペイントボールを飲み込んだ！
すると、カービィは青い帽子を被り、手にはペンキの缶と筆を持っていた。

カービィ

「コピー完了！ペイントカービィ！！」

カービィはすぐに缶に入っているペンキを前にまいた！

ガメレオアーム

「し、しまった！」

すると、ガメレオアームはペンキまみれになり姿が見えるようになってしまった！

カービィ

「い、今だ！」

カービィは筆で大きなボムを描いてガメレオアームに向かって投げた！

カービィ

「いつけーッ!!」

ガメレオアーム

「きゃあーッ!!」

ガメレオアームは、カービィの投げたボムに当たって消滅した。

リボン

「やったあ!」

カービィ

「フウー…」

カービィはホッと一息をついた。

そしてマルクはその様子を水晶玉で見ていた。

マルク

「あーあ…。やられちゃったのサ…。次こそはカービィをたおすのサ!!カービィめ、覚えているのサ!」

マルクは次の作戦を考え始めた…。

マルクはカービィを倒す事を優先して考えるようになってしまった…。
リップルスターに向かう日はまだまだ遠い……かもしれない…

【狙われるカービィ！】

おわり

第5話 夢の中で

やつほーッ♪

僕、カービィだよ！

足のケガも治って完全復活！！

でも、お城のようすがなんだかおかしいや…。

これはちゃんと見にいかなくちゃね！

ガメレオアームを倒してから無事に5日が過ぎた。

カービィの足もすっかり良くなり、リボンと外で遊んだりできるようになった。

しかしその頃からデデデ城の様子がおかしくなっていた…。

デデデ城には、食いしん坊でわがままな【デデデ大王】が住んでいて【一応】プププランドの政治を勤めている。

カービィ

「勤めてるって言うのかなー…」

リボン

「ねえ、カービィ。見てあれ」

カービィ

「何？」

カービィたちはデデデ城を見た。

すると、デデデ城の上に何やら黒い雲が立ち込めていた。

カービィ

「真っ黒だね…」

リボン

「うん…」

カービィは何を思い付いたのか、外に出るとワープスターを呼んだ。

リボン

「カービィ…？」

カービィ

「見に行ってみよ！リボンちゃん」

リボン

「う、うん…」

リボンは黒い雲がよほど怖いのだろう。

カービィ

「大丈夫！僕がいるじゃない！」

そう言う二人は、ワープスターに乗ってデデデ城に向かった…。

カービィたちはお城に着くと中に入って行った…。

カービィ

「（黒い雲はもしかしてマルクのせいかな…？）」

カービィは、とりあえず慎重にお城の廊下を歩き始めた…。すると、カービィはある部屋の前で止まった。

リボン

「カービィ…？どうかしたの？」

リボンは、首を傾げながら聞いた。

カービィ

「ここには僕の友達と言うか親代わりと言うか……。ま、とりあえず関わり深い人が居るんだ！」

そう言つてカービィは扉を開けた。

カービィ

「メタナイト…、いる…？」

そう言いながら中に入ると、中には剣士が二人いた。どちらもメタナイトのお供をしている【ソードナイト】と【ブレードナイト】だ。

ブレードナイト

「カ、カービィ殿！？一体どうされたんですか？」

カービィ

「このお城に黒い雲が立ち込めてるのが見えたから気になっちゃつて…。それよりメタナイトは？」

カービィは、部屋を見回しながら言った。

ソードナイト

「メタナイト様もその原因を探しに行つたまま帰ってこないのだ」

カービィ

「そうなんだ…。悪いんだけど、この子と一緒にいてくれない？」

ブレードナイト

「さつきから私も気になっていたが…その子は？」

カービィはソードナイトたちに全て話した。

ブレードナイト

「ほう…。なるほど。つまりこの子を狙うヤツとこの現象が同一人物の可能性が高いのだな？」

カービィ

「うん…。一人にするのは危ないし、連れて行くのもかわいそうだからメタナイトを尋ねてきたんだ…」

ソードナイト

「そういう事が…。いいでしょう！預かります。カービィ殿もメタナイト様をよろしくお願いします」

カービィ

「うん。分かった！」

返事をするカービィは部屋から出て行った…。

リボン

「カービィ…」

リボンは、心配そうな表情を浮かべていた…。

ブレードナイト

「大丈夫ですよ。カービィ殿はどんなピンチも乗り越えてきましたから」

ブレードナイトは、リボンを安心させるように言った。

ソードナイト

「それよりここは危険です。城の外に逃げましょう」

こうしてリボンたちは、城の外に避難する事になった。

カービィ

「やっぱり怪しいのは大広間かな…」

カービィは大広間の扉を開けた。

するとメタナイトが気を失って倒れていた。

カービィ

「メ、メタナイト!?!」

カービィがメタナイトに近づくとマルクが現れた！

マルク

「君もおバカさんのサ！ここに来なければ今日の所は見逃そうと

思ったのに……」

カービィ

「マ、マルク……！じゃあメタナイトはお前が……？」

マルク

「その通りなのサ！せっかくコイツの体に乗っ取ってお前を倒そう
と思っただのに……。でも見つかったならしょうがない……。今
消えてもらうのサ……！」

カービィは、すぐにワープスターを呼ぶと、大広間から飛び出した！

マルク

「逃がさないのサ……」

カービィ

「何かコピーしなきゃ……！！」

するとカービィは岩で作った剣のモニュメントを見つけた。

カービィ

「よーし、あれなら……！」

カービィはモニュメントを吸い込みでコピーした！

するとカービィは頭に緑の帽子を被り、手には剣を持っていた。

カービィ

「コピー完了！ソードカービィ参上……！」

カービィは、そのまま外に出るとマルクの方に向かって飛び始めた。

カービィ

「やあああ！」

カービィはマルクに向かって剣を振った。
しかし当たらずにスーッと抜けてしまった。

カービィ

「えッ！？どうなってるの？」

マルク

「ククク…！僕はこっちなのだサ！！」

カービィは力を込めて剣を振った！

カービィ

「ソードビームッ！」

すると、カービィの剣から三日月のビームがマルクに飛んでいった！

しかし、ソードビームはマルクの体をすり抜けてしまった…。

カービィ

「（攻撃が当たらない…？）」

マルク

「この僕が五日間も何もしなideいたと思つたの？君が足を治している間にパワーアップさせてもらったのサー！」

カービィ

「く…！」

カービィは、マルクとの距離を取ろうとワープスターのスピードを上げた。

マルク

「無駄なのサー！」

マルクもスピードを上げてカービィを追い始めた。

すると、マルクはビームを出してきた！

カービィ

「うわあっ！？あ、危ない危ない…！」

マルク

「もう君もおしまいなのサー！」

マルクは笑つと連続でビームを放ってきた！

カービィ

「うわっ！ちょ、ちょっと…！！！」

カービィは反撃しようと後ろを向いた。

すると、マルクの姿が無くなっていた！

カービィ

「ア、アレ！？いない…」

マルク

「こっちなさ！」

すると、マルクはカービィの真上からビームを放った！

カービィ

「うわぁっ！！！」

カービィは、ワープスターから落ちると川に落ち流され始めた…。

マルク

「ククク…！直撃だったのサ！カービィはもう助からないハズなのサ！」

そのころデデデ城では…

ブレードナイト

「こっちです」

リボンはソードナイトとブレードナイトに連れられて城の外に出ようとしていた。

しかし、入り口にはすでにカービィを倒し終わった気にいるマルク

が待ち構えていた。

マルク

「やあ。待っていたのサ！」

リボン

「マ、マルク…！」

ソードナイト

「ほう…。ではコイツがこの子を狙っているというヤツか…」

ソードナイトは、剣を抜くと構えた。

マルク

「君たちじゃ相手にならないのサ！メタナイトとかいうヤツもカービィも倒してあげたのサ」

ブレードナイト

「カービィ殿とメタナイト様を倒しただと！？」

ソードナイト

「よくもお二人を！」

ソードナイトはマルクに剣で斬りかかった！

しかし、ソードナイトの攻撃はマルクの体をすり抜けてしまった。

リボン

「どうなってるの…？まるで影みたい…？」

マルク

「じゃあそろそろリボンちゃんを渡してもらおうのサ！」

マルクは翼から三日月の形をしたカッターを飛ばしてきた。

しかし、カッターはソードナイトたちにぶつかる瞬間に誰かに弾かれた。

マルクの攻撃を弾いたのは、なんと【メタナイト】だった。

マルク

「よく動けるようになったね。ちょっと驚きのサ」

マルクは、ニヤツと笑いながら言った。

メタナイト

「フツ…！私はそう簡単にはやられんぞ」

マルク

「その傷ついた体じゃあまり戦えないハズなのサ！」

よく見ると、メタナイトの体は一回目のマルクの戦いで傷だらけだった…。

メタナイト

「さあ！今のうちに逃げろ！！」

しかし、ソードナイトはメタナイトの体を気にして悩んでいた…。

ソードナイト

「じ、しかし…」

メタナイト

「これは命令だぞ二人とも。その子を守ってやるんだ」

ブレードナイトは、メタナイトの言葉にうなずくとリボンとソードナイトを連れてその場を離れていった…。

リボン

「カ、カービィ…」

リボンはマルクの「カービィを倒した」という言葉が気になってカービィを心配していた…。

さてさて、場所は変わってここは不思議な空間…。

カービィは、その空間にあお向けで浮かんでいた…。

カービィ

「（ここは…何処…？それに体が痛くて動かないよ…。僕、死んじやったのかな…？）」

すると、どこからかカービィを呼ぶ声が聞こえてきた…。

????

「カービィ…。起きてよ！カービィ！」

不思議な声が聞こえるとカービィの体の傷はみるみる内に無くなっていた。

カービィ

「傷が治った…？」

カービィは起き上がって辺りを見回した。

そこはなんと何もない真っ白な世界だった…。

カービィ

「僕、どうなったんだろ…。死んじゃって天国に来ちゃったのかな…？」

すると、カービィの後ろからさっきの声が聞こえてきた。

???

「まだ君は死んでなんかいないよ」

カービィ

「…！君は…」

振り向くとカービィはびっくりした。

なんと黒いカービィ…

つまり、自分そっくりの姿が目の前にあったのである。

???

「僕？僕はシャドウカービィ。君自身だよ！」

カービィ

「ぼ、僕自身！？それにここは何処なの！？」

シャドウカービー

「まだ内緒だよ！君が僕と戦って勝ったら教えてあげるよ」

シャドウカービーは、ニコツと笑った。

カービー

「どうして戦わなくちゃいけないの…？分かりやすく教えてよ！」

カービーは、訳が分からず、複雑な表情を浮かべながら言った。

シャドウカービー

「リボンちゃんを守りたいんでしょう？このままじゃマルクにも勝てないよ！」

カービー

「戦ったら…。マルクにも勝てるの…？」

すると、シャドウカービーはニコツと笑った。

カービー

「…うん！君と戦ってみる…！」

シャドウカービー

「そうこなくっちゃ！」

シャドウカービーは剣を2本用意した。

シャドウカービー

「僕とソード勝負だよ！」

カービー

「う、うん！」

カービーとシャドウカービーはソードをコピーした。

カービー

「やあああ！」

カービーはシャドウカービーに剣を振った！

シャドウカービーも剣を振って受け止めた。

辺りには、剣のぶつかりあう金属音が響いた。

カービー

「やあ！ハア！たあっ！！！」

カービーは連続で剣を振った。

しかし、シャドウカービーは笑いながら全て交わしてしまった。

カービー

「（どうして！？まるで、心を読まれてるみたい…！）」

シャドウカービー

「何を驚いてるの？僕は君自身なんだよ？だから、君の心は全てお見通しさ！」

カービィ

「…！ハア…ハア…」

カービィは息切れをし始めた。かなり動き回ったのだから無理もないのだが…。

シャドウカービィ

「僕は知ってるんだよ？君が足をケガした時に戦うのが少し嫌になったのをね」

カービィはただ呆然としていた。

カービィ

「た、確かにあの時は少し不安になったけど…。今はそんなこと思っ
てなんかいない！！」

カービィは真剣な顔でシャドウカービィに言い放った。

シャドウカービィ

「ホントかな？今はマルクにリボンちゃんよりも自分を狙われて嫌
になってるんじゃないの？」

カービィ

「そんなこと思ってない！！だって…リボンちゃんは誰よりも大切
な友達だから！！」

すると、シャドウカービィは、なぜか「友達」という言葉に反応し
た。

シャドウカービィ

「う…うるさい！何が【友達】だ！」

カービィ

「もしかして君…今まで一人で寂しかったの…？」

シャドウカービィは下を向いて涙を流し始めた…。

カービィ

「さあ立って！」

カービィは、シャドウカービィに手を差し出した。

シャドウカービィ

「カービィ…？」

カービィ

「僕たちはこれからずっと友達だよ！…って自分自身に言うのは変かな…？」

カービィはニツコリ笑いながら言った。

シャドウカービィ

「カービィ…。ありがとう…」

すると、カービィの体がほんのり白くなってきた…。

シャドウカービィ

「そろそろお別れだね…。ここはカービィの夢の中だったんだよ」

シャドウカービィは、少し寂しそうに言った。

カービィ

「そうだったんだ…。せっかく友達になったんだからまたいつでも呼んでね！」

シャドウカービィ

「うん！ありがとう…」

カービィの目の前はしだいに白くなって何も見えなくなってしまった…。

しばらくしてカービィはカモメのさえずりで目が覚めた。

カービィは、川に落ちてから海まで流されていたのである。

カービィ

「戻ってきたんだ…。でも、本当にマルクを倒せるのかな…？」

すると、カービィは手に何か持っている事に気がついた。

カービィ

「これはなんだろう…？虹色だけど……」

カービィが抱えるとシャドウカービィの声が聞こえたような気がした。

シャドウカービィ

【それは【虹のしずく】きつと役に立つと思うよ!】

カービィ

「シャドウカービィ…。よし!行こう!」

カービィは、水に浮かびながらワープスターを呼んで、デデデ城に向かって飛んでいった…。

第5話【夢の中で】おわり

第6話 友情の虹

やつほーッ!!

またまたカービィだよ!

夢の中でもう一人の自分【シャドウカービィ】に出会ったんだ。

そして、シャドウカービィから虹のしずくをもらったんだけど、どうやって使えばいいのかな…?

とにかく、急がなくちゃ!

カービィは、ワープスターに乗ってデデデ城に向かっていた。

カービィ

「(リボンちゃんたちは何処にいるんだろ…? メタナイトも気になるし…)」

カービィは、いろんな事を心配しながらデデデ城についた…。すると、中庭から物凄い音が聞こえてきた。

カービィ

「な、中庭からだ…!!」

中庭では、マルクとメタナイトが激しくぶつかりあっていた。

メタナイト

「ハア…ハア…！（何という奴だ…！コイツは不死身か…？）」

マルク

「そろそろ体力に差がで始めたようだね！」

息切れをし始めたメタナイトに対し、マルクはまだ余裕の表情だ。

メタナイト

「ここまでか…！」

メタナイトが諦めた時にカービィがやってきた。

カービィ

「メタナイト…！」

マルク

「君も生きてたのか。全くしつこいヤツなのサ…」

マルクは、少し呆れながら言った。

カービィ

「今度はっかりはもう許さないもん！」

カービィは、ソードをコピーした。

マルク

「どうせ無理なのサ…」

カービィはマルクに向かって走り出した！

カービィ

「やあああ！！」

カービィは、剣を振ったがやはりすり抜けてしまった…。

マルク

「無駄なのサ！！」

マルクは、カービィにビームを発射した！

カービィ

「うわっ！！」

カービィは、吹き飛ばされると城の壁にたたきつけられた。

カービィ

「いたたた…！おかしいな…。シャドウカービィにもらった虹のしずくがあれば当たったと思うんだけど…」

マルクは、笑い始めた。

マルク

「ケケケ…！だから無駄って言ったのサ」

カービィ

「う、うるさーい！今度こそ！！」

カービィはマルクに近付くと連続で剣を振り始めた！

カービィ

「ソード百列斬り!!」

そして、カービィは高くジャンプすると、剣を地面にたたき付けて波動を出した!

カービィ

「ファイナルソード!!」

波動のビームはマルクにぶつかった!

カービィ

「や、やった...!」

カービィは、確かに手応えを感じていた。
しかし、砂ぼこりの中からマルクが現れた...

マルク

「もう終わりなのかな?全然効かないのサ!」

カービィ

「そ、そんな...!」

すると、頭の中にシャドウカービィの声がひびきわたった...

シャドウカービィ

【カービィ。虹のしずくをコピーするんだ!】

カービィ

「でも、これをコピーしたら【ペイント】の能力になるんじゃない……」

マルク

「一体誰と話をしているのサ……！」

マルクは、カービィにまたビームを当てて壁にたたき付けた！

カービィ

「いつツ……！」

カービィは地面に倒れた……。

メタナイト

「カービィ……！」

メタナイトはカービィの前に剣を持って構えた。

マルク

「大丈夫なのサ！二人同時に消してあげるのサ！」

マルクは、ビームのエネルギーを溜め始めた。

シャドウカービィ

【カービィ、早く！僕を信じて……！】

カービィ

「わ、分かった……！」

カービィは、起き上がると虹のしずくを口の中に入れた…。

すると、カービィの剣が激しく光り出し、虹色の剣に変化した！

カービィ

「…！？剣が…？どうなってるの…？」

カービィは、驚きながら剣を見た。

シャドウカービィ

【それは【虹の剣】。邪悪な力を退けられるらしいよ】

マルク

「何をしたかは知らないけど、僕を倒すなんて無理なのサ！」

マルクは、三日月の形をしたカッターを飛ばしてきた。

カービィは、三日月カッターに向かって剣を振った。

すると、三日月カッターはマルクの方に跳ね返った！

マルク

「ひゃあっ！な、なかなかやるのサ…！」

カービィ

「さっきまで防ぐだけで精一杯だったのに…。よ、よし！」

カービィは、マルクに向かって剣を振った！

カービィ

「やあっ…！」

すると、マルクの翼を少し切りつけた！

マルク

「ギャア！！大事な翼になんて事をするのサ！？もう怒ったのサ！
」

すると、マルクはメタナイトに近づくと、なんとメタナイトに乗り移った！

メタナイト

「グ…！く、くそ…！！」

マルク

「ケケケ…！今からこの体は僕のものなのサ！！」

カービィ

「メ、メタナイト！」

マルクは、メタナイトの体を操って攻撃をしてきた！

カービィ

「の、乗り移るなんてずるいよッ…！」

カービィは、叫びながら走り始めた。

しかし、今いるのはお城の中庭…。

カービィはすぐに壁に追い込まれてしまった！

カービィ

「（マズい…！追い込まれちゃった…）」

マルク

「今度こそ終わりにしてあげるのサ」

マルクは、カービィに近づこうとした。

しかし、メタナイトの足は全く動かなくなっていた…。

マルク

「どーして動けないのサ!？」

メタナイト

「う…!くく…!」

そう、メタナイトはマルクに抵抗をしていたのだ。

マルク

「しつこいやツなのサ!完全に取り付いたハズなのサ!」

カービィ

「(そっか…!メタナイトは元星の戦士…。マルクがやっこの思いで取り付いてるんだ…)」

カービィは、急いで壁ぎわから中庭の中央に移動した。

そして、メタナイトに向かって必死に話しかけた。

カービィ

「メタナイト!!しっかりしてよ!」

しかし、メタナイトからの反応は無くなっていた…。そして、その代わりにマルクの笑い声がひびきわたった。

マルク

「もう完全に取り付いたのサ、それじゃカービィ、君を消してあげるのサ!」

メタナイトに取り付いたマルクは剣を抜いてカービィに向かってきた!

カービィ

「あわわわ…!」

カービィは、メタナイトの剣を虹の剣で受け止めた。

カービィ

「メタナイト!!目を覚ましてよ…!」

カービィは、諦めずにメタナイトに向かって声をかけ続けた。しかし、メタナイトから反応はなかった…。

マルク

「叫んだって無駄なのサ!」

マルクは、カービィを蹴飛ばした!

カービィは、勢いよく壁にぶつかるなんと貫通してお城の外に出てしまった!

カービィ

「いたたた…!」

カービィは、ガレキの中から起き上がった。

マルク

「カービィ、何をやってるのサ？攻撃してこないのかな？」

カービィ

「く…！（中のマルクだけ攻撃するなんて無理だよ…！）」

マルク

「攻撃してこないならこっちからしてあげるのサ！」

マルクは、高くジャンプすると剣にエネルギーを集中させた。

カービィ

「（でも、何とかしなくちゃ…！）」

マルク

「ソードビームなのサ…！」

マルクが剣を振ると三日月のビームがカービィに向かって飛んでいった！

カービィ

「たあぁーッ…！」

カービィも剣を振った！

すると、ソードビームは跳ね返ってお城に当たった…。

カービィ

「あちゃゝ……。またデデデ大王に怒られちゃっよ……」

マルク

「よそ見は危ないのサ！」

マルクは、瞬間的にカービィに近づくと連続で剣を振ってきた。

マルク

「ソード百列斬りなのサ！！」

カービィ

「わわわわ……！」

カービィは、かわしたり剣でガードしたりして攻撃を受け止めた。

カービィ

「メタナイト！お願いだから目を覚まして！！」

カービィは、メタナイトに叫び続けた。

すると、メタナイトの体は再び動かなくなった……。

マルク

「くっ……！しぶといヤツなのサ！！」

メタナイト

「カ、カービィ……！早く！私を斬るんだ！！」

メタナイトは、苦しそうにカービィに言った。

カービィ

「い、嫌だ！メタナイトを斬るなんて…！僕には出来ないよ…」

すると、カービィの目から涙が流れ出した。

カービィ

「だって…！メタナイトは親の様に僕を育ててくれたんだよ…！それなのに…。それなのに…！」

メタナイト

「だ、大丈夫だ。私は死なん…。それに…その剣はどうゆう剣なんだ…？」

カービィは、シャドウカービィの言葉を思い出した…。

（それは【虹の剣】邪悪な力を退けられるらしいよ）

カービィ

「（邪悪な力…？）」

カービィは、ハツとした…。

メタナイト

「は、早く…！マルクが暴れだした…！」

マルク

「いい加減に大人しくするのサ…！」

カービィは、メタナイトを見つめると首を横に振った…。

カービィ

「やっぱり…僕には出来ないよ…。でも…」

カービィは、剣を構えた。

カービィ

「こうすれば、マルクを追い出せるかもしれない…！」

カービィは、目を閉じた。

そして、静かに祈り始めた…。

カービィ

「（お願い！メタナイトからマルクを追い出して…！）」

カービィがそう願うと、虹の剣から虹色の光りが飛び出し、メタナイトを包み込んだ。

すると、そこからマルクの体が少しずつ出て来た！

マルク

「ど、どうなってるのサ！？どうして勝手にメタナイトの体から抜けてしまうのサ！？」

カービィ

「や…やった！」

カービィは、素早く虹の剣を構えた。

カービィ

「やあッー!!」

カービィはマルクを斬り付けた!

マルク

「くぅ……!!マ、マズいのサ……!!」

マルクは、飛んで逃げようと宙に浮いた。

しかし、その上ではカービィがソードビームの構えをしていた!

カービィ

「レインボーソードビームッー!!」

カービィが剣を振ると三日月のビームが飛び出し、その後ろに虹ができた!

マルク

「ギャアアッー!!最強の魔法使いの僕が……!!」

マルクは消え去った……。

カービィ

「やったあー!!」

カービィは、急にワープスターに飛び乗ってププランドを西から東へ飛び始めた。

カービィ

「シャドウカービー…。ありがとう…！」

すると、役目を終えたかのように虹の剣は消えてしまった…。

一方、お城にはリボンたちが帰ってきていた。

リボン

「カービーは…？」

メタナイト

「向こうへはしやぎながら飛んでいったよ…。まだまだ子供だな」

メタナイトはフツと笑った。

その日、ププランドにはカービーが描いた虹が一日中かかっていた。カービーとシャドウカービーの友情の虹は空に美しく輝いていた。

第6話【友情の虹】おわり

第7話 ワープスターの秘密

やっと私の登場か…。
メタナイトだ。

恐ろしい魔法使いのマルクはなんとか倒したが、敵は次々と手下を送り込んでくる…。

しかも、そいつはカービィとワープスターの秘密を知っているやつかいなヤツだったのだ…。

カービィの家に朝日が窓から入り込んできた。

カービィ

「く〜…！朝だー！！」

カービィは、ベッドから起き上がるとリボンを起こさないようにそっと家の外に出た。

カービィ

「よし！朝市にレッツゴー！ワープスター！！」

カービィは、ワープスターに飛び乗って朝市に出かけていった。

リボン

「ふにゃ…？ふわああ…！また寝坊しておいていかれちゃった…」

そのころ、リップルスターでは…

黒い雲のボス

「マルクまでやられたか…。カービィめ、とことん邪魔をするとは…!!」

????

「そろそろ私を行かせて下さい」

黒い雲のボス

「ほう…。たいした自信だな…」

????

「もちろんです。元々カービィは私の…アレでしたからね」

???は、何やら興味深い事を口にした…。それを聞くと、ボスはニヤツと笑った。

黒い雲のボス

「フフ…。そうだな。では行くがいい」

???は不気味に笑い、ワープしていった…。

【カービィは元々アレ】とは一体なんのことなのか…。それはまた次の話で明かされる。

その頃カービィは、朝市から帰ってきてリボンと朝ご飯を食べていた…。

リボン

「どうして起こしてくれないの？ 行きたかったのになー…」

リボンは、顔を膨らませ、さらにガツカリしながらご飯を食べていた。

カービィ

「ゴメンゴメン…！ だって気持ち良さそうに寝てたからさ…」

リボン

「もう…！ 次はちゃんと起こしてよね…！」

カービィ

「はあ…い…。 （このまえは起こしたら怒ったじゃん…）」

カービィは心の中で泣いていた。

リボン

「それより今日はまたお城に行くんだよね？」

カービィ

「そうだよ。このまえの戦いでお城壊しちゃったから…」

リボン

「あれはマルクが壊したのにね…。でもクリスタルの力を感じとれる敵がいなくなってよかった！」

リボンは、マルクがいなくなってからは本当に安心したのか、よく笑うようになっていた。

カービィ

「確かに…。今考えると恐ろしかったね」

カービィたちは、話をしながらあとかたづけをすませて外にでた。

そして、お城に向かって歩き出した。

カービィ

「（……で歩いてるとたいてい次の敵が…）」

????

「そこのお二人さん待ちなさい！」

カービィ

「ほらきたッ!!」

????

「何ッ！？私が来る事が分かっていたのか!？」

カービィ

「え…？あ、いや…。マルクとかこんな感じだったから…つい」

カービィは、苦笑いながら頭をかいた。

リボン

「笑い事じゃないよ…!」

リボンは、カービィにしがみついた。

確かにリボンの言う通りである。
体は、カービィたちの3倍はある…。

カービィ

「…で、やっぱりクリスタルを狙ってるの？」

カービィがそう聞くと、???はニヤリと笑った…。

????

「もちろん。おっと、私の名前は【ナイトメア】だ。どういう意味か分かるかな？」

リボン

「うーん…。確か【悪夢】だったような…」

リボンは、首を傾げながら言った。

カービィ

「悪夢って…夢って事!？」

ナイトメア

「その通り。私はただの悪夢にすぎない…。だが、その代わりに夢は実体が無いから無敵なのだよ!！」

急にナイトメアはカービィに指を向けた。
すると指先から黒い星が飛んできた!

カービィは、一歩下がると口を開けて吸い込み始めた!

カービィは、星を吸い込むと勢いよくナイトメアに吐きだした!

カービィ

「えいつ!!」

しかし、その弾はナイトメアの体をすり抜けてしまった！

カービィ

「えっ!？」

ナイトメアは、驚いたカービィを見て笑いだした。

ナイトメア

「フッフ…！私は実体では無いと言ったはずだが？」

カービィ

「…!!」

リボン

「カービィ…どうしよう…?」

カービィ

「そ、そんなこと言っ たっ て…!!」

カービィは、辺りを見回した…。

しかし、コピーできるような物は周りにはない…。

しかも攻撃がすり抜けてしまうのであればまさに打つ手なしであった…。

カービィ

「（やっぱりメタナイトに聞くしかない！）ワープスターッ！！」

カービィは、ワープスターを呼んだ。

そして、リボンの手を握るとワープスターに飛び乗ってお城に向かって飛び始めた。

ナイトメア

「ククク…！かかったな！」

ナイトメアは、笑いながら黒い星を大量に出し始めた！

ナイトメア

「フフフ！全てかわす事は不可能だな…！」

カービィたちは、黒い星の大群に襲われながら飛んでいた…。

カービィ

「うわっ！！思ったより速い…！」

カービィは、頑張って全部かわしていたが、黒い星の一つがワープスターに直撃した！

カービィ

「うっ…！」

ピシッ！という何かが割れる音と共にカービィは急に胸を押さえ、苦しみ始めた…。

そして、額には汗が出てきていた…。

リボン

「カ、カービィ…?」

カービィたちは何とかデデデ城についた…。そして、メタナイトの部屋には窓を突き破って入った。

カービィは、メタナイトの部屋に入るとワープスターから転げ落ちた…。

リボン

「カ、カービィ!! どうしたの!?!」

リボンがワープスターから降りると、ワープスターは手のひらサイズになって床に落ちた…。

メタナイトは、すぐにワープスターを拾って手に持った…。

すると、その瞬間メタナイトの顔色が変わった。

メタナイト

「こ、これは…!?!」

リボンも手に持ったワープスターを覗き込むように見た。すると、ワープスターの角が一つ無くなっていた…。

なんとワープスターが欠けてしまったのだ!

メタナイト

「大変な事になった…! ひとまずカービィをベッドに…!」

メタナイトは、カービィを寝かせるとリボンを呼び出した…。

リボン

「カービィはどうしたの…？ケガなんかしてないのに…」

リボンは、また自分のせいでカービィがこうなってしまった事に責任を感じたのか、シヨンボリしながら言った…。

メタナイト

「……実はワープスターとカービィには秘密があるのだ」

リボン

「秘密…？」

リボンは、首を傾げた。

メタナイト

「そう…。ワープスターは星の戦士が乗る乗り物だ。しかし、カービィのワープスターのように呼ばれて自ら飛ぶ物他にはない…。つまり、カービィのワープスターはかなり特別な物だ」

メタナイトは、さらに話を進めた。

メタナイト

「そして、このワープスターはかなり重要な役割をしている」

リボン

「役割？」

メタナイト

「そう。このワープスターはカービィの【パワーの源】なんだ」

リボン

「パワーの…源…」

リボンは、一瞬嫌な予感がした…。

メタナイト

「本人は気づいてないが見ただけでもパワーがみなぎってくる。それだけカービィには欠かせない物なんだ。【一心同体】に近いワープスターが壊された訳だ…。カービィの体へのダメージは非常に大きいだろう…」

リボンは、メタナイトの話を最後まで真剣に聞いた…。

カービィは、ベッドの上で苦しそうに呼吸をしている…。

リボン

「カービィを助けるにはやっぱりワープスターを…?」

メタナイトは、うなずいた。

メタナイト

「そうだ。だが、ワープスターを直すには夢の泉のスターロッドが必要だ。私もついて行こう」

その頃、カービィの家にはリックとクーがきていた…。

リック

「おい！カービィー!!」

リックは、大声でカービィを読んだが返事はなかった…。

クー

「やっぱりお城じゃないか？カービィこの前壊しちゃったとか言ってたし…」

リック

「よし！行くか！」

リックとクーは超特急でデデデ城に向かった。

リックとクーはすぐにメタナイトの部屋に向かった。

リック

「いるとしたらまずここだよな」

クー

「ああ…。でも謝るならフツーデデデの所じゃないか…？」

リック

「まあまあ。気にすんなって…！」

クーは、ため息をついた。

そして、ノックをしてから部屋に入った…。

リボン

「あー！リックとクー…！」

リック

「よお、リボンちゃん！カービィはいる？」

リボン

「そ、それが…」

リックとクーは、ベッドで苦しそうにしているカービィを見てびっくりにした。

クー

「一体何があつたんだ!？」

リボンは、二人に詳しく話をした…。そして、これから夢の泉に行くということも…。

クー

「でも夢の泉までは結構あるぞ!」

リボン

「でも、このままじゃカービィが…。カービィはいつも私を守ってくれつるから…。今度は、私がカービィを助けなくちゃ!」

メタナイト

「私も行く」

リックは、リボンの真剣な表情に心を打たれた…。

リック

「へへっ!オレもついて行くよ。それに、カービィのおんぶはオレじゃないと駄目だしな!」

リックはニコツと笑いながら答えた。

クー

「フー…。じゃあオレも行くよ。カービィには助けられっぱなしだしな！！」

クーもニコツと笑った。

こうして全員が一緒に夢の泉に行くことになった。

リボン

「みんな…ありがとう！」

リボンは、みんなにお礼を言った。

リボン

「（でも、何か違う…。【カービィにいつも助けられてるから】だじゃない…。きっと…きっと私、カービィの事…）」

リボンたちはお城を出て森に向かって歩きだした。

リック

「お、おい。メタナイト。そっちじゃないだろ？」

リックは、慌てながらメタナイトに言った。

メタナイト

「実は、この森には夢の泉まで繋がっている不思議な洞窟があるのだ」

クー

「知らなかったな…」

リボンたちが森の洞窟に入って行く所をナイトメアが見ていた…。

ナイトメア

「ほう…。夢の泉に向かっているのか……。フフ…。あそこまでたどり着く事ができるかな？ 仮にたどり着けたとしても…」

ナイトメアは、不気味に笑いながら消えた…。

リボン

「ひろーい…」

リボンたちは洞窟の奥に入って行くとドームのようになっていた所に出た。

リック

「洞窟の中なのにやけに明るいな！」

リックは、驚きながら上を見た。
すると、岩が少し光っていた…。

メタナイト

「この辺りの岩はスターロッドの力と共鳴しているのか光っているんだ」

リボン

「綺麗…！」

リボンは岩を見てうっとりしていた。

リック

「さすが女の子…。光り物に弱いな…」

クー

「まあな」

すると、そんなリボンめがけて手裏剣が飛んできた！

メタナイトは、すぐにリボンの前に立つと剣ではじき返した。

メタナイト

「何者だ！」

メタナイトの声に反応して岩のかけからカービィの身長と同じくらいの人出现在了。

メタナイト

「バイオスパークか…」

バイオスパーク

「……」

バイオスパークは、無言のままクナイを投げてきた！

メタナイト

「ちっ…！お前やはりナイトメアに操られてるな…！」

リック

「なんてきたねえ奴だ！」

メタナイト

「お前たちは早く行け!!」

リボン

「で、でも…」

メタナイト

「早く行け!カービイの事を頼んだぞ!!」

クーは、すぐに自分たちがジャマになると言う事に気づいた。

クー

「分かった!あとで来いよ!」

リボンたちは、出口を目指して走り出した。

メタナイト

「さあ、いい加減に目を覚ましたらどうだ!!」

メタナイトとバイオスパークは激しくぶつかりあった。

リック

「見えたっ!出口だ!!」

リックたちは勢いよく飛び出した!

すると、そこには神秘的な景色が広がっていた…。

無限に水がわいてくる夢の泉…。

そこにカービイとワープスターを置けばカービイは元気になるらしい…。

リボンは、さっそくカービィとワープスターを水の上に浮べた。

すると、それを待っていたかのようにナイトメアが現れた！

ナイトメア

「フフフ…！待っていたよ」

リボン

「ナイトメア…！」

リック

「こ、こいつか…！」

リックは、ナイトメアと向き合おうと構えた。

クー

「待て、リック！オレたちはカービィがいないとコピー能力が使えないぞ」

カービィは、本当に治るのか？そしてナイトメアをどうやって倒せばいいのか…。

リボンたちは、かなり追い詰められている…。

第7話

【ワープスターの秘密】 おわり

第8話 夢と過去

やあ、みんな！

またまたカービィだよ♪

僕は今、戦えなくて夢を見ているんだ。

見た事もない景色が広がる謎の星…。

そして、見覚えのない女の子は僕の事を【ティンクル】って呼ぶんだ。

でも、なんだか懐かしい感じがする…。

それが僕の本当の名前…？

ナイトメア

「フフフ…。お前たちはバカな事をしてしまったね」

ナイトメアは、ニヤリと笑った…。

リック

「それはどういう事だよ！？」

ナイトメア

「【星の戦士カービィ】はもう目覚めることはない…。目覚めた時

には完璧に魔獣になっているからねえ…クク…！」

クー

「カ、カービイが目覚めない！？嘘だろ…？」

ナイトメアは、笑いながらリボンたちに説明をし始めた。

ナイトメア

「今、カービイには前世の夢を見せているのだ…」

リボン

「前世…？カービイになって生まれる前の夢って事…？」

ナイトメア

「その通り。実はカービイは元々私の生み出した魔獣だった…。しかし…悪の心は少なく出来損ないだった。それから私の所から脱走し、星の戦士になって目覚めたというわけさ」

リボン

「カービイが…魔獣の生まれ変わり！？」

ナイトメア

「ククク…！そして今、前世の夢を見せる事により、カービイはより強力な魔獣に生まれ変わるのさ！」

リック

「そ、そんな…！」

リックたちは黙りこんでしまった…。

カービイが元々魔獣だった事は誰一人として知らなかったためにか

なりのショックなだろう。

そのころ、夢の中では…。

カービィ

「う、うーん…！あ、れ？」

カービィが目を覚ますと何と辺り一面は草原だった。
そして、カービィはそこに寝転んで寝ていた…。

カービィ

「ここは…？僕どうなったんだろ…？」

しばらくすると後ろから女の子の声が聞こえてきた…。

女の子

「ティンクル？」

カービィ

「え？」

カービィは、驚いて振り返った…。

女の子

「やっぱりティンクルじゃない！探したのよ！」

女の子は、カービィの事を【ティンクル】と呼び始めた…。

カービィ

「ティンクル…？僕の名前…？」

女の子

「そうよ。まだ寝ぼけてるのね！あなたこの丘の草原が大好きだもんね！」

カービィ

「こ、これは…夢？」

すると、突然女の子は、カービィの手をつかむと走って丘を降り始めた…。

女の子

「ほら、早く行かないとナイトメア様に怒られちゃうよ！」

カービィ

「ナ、ナイトメア！？どうしてあいつの所に行くの！？」

カービィはびっくりして聞き返した。

女の子

「何言ってるの？あなたがナイトメア様の魔獣なんじゃない！」

カービィは自分の耳を疑った…。

カービィ

「ぼ、僕が…魔獣…？」

カービィは、ただただ呆然とするしかなかった…。

カービィは、呆然としたままナイトメアの所に連れて行かれた。

ナイトメア

「ティンクルよ。これからお前に仕事を与える…」

カービィ

「（ティンクル…。聞いた事はないけど…懐かしく感じるのはどうしてなんだろう…？）」

それからカービィは別の星に連れて行かれ、その星の住人たちを追い出したり、たくさん悪い事をした…。

カービィ

「どうしてこんな事をしなくちゃいけないの！？僕は本当に魔獣なの…！？」

魔獣

「さすがティンクルだな！これからもオレたちと一緒に…」

すると、カービィは走り出して宇宙船に乗ると、さっきの星に帰って行った…。

カービィ

「もう嫌だよ…！罪のない人を追い出したりするなんて…！」

カービィは、泣きながら宇宙船を操作して元の星に着いた。宇宙船から降りると変わり果てた景色が広がっていた。

なんと一面が焼け野原だったのだ…。

カービィ

「な、何があっただろう…」

そこは、明らかに誰かに襲われたような後だった…。

カービィは、どんどん歩いて行くとあの女の子が倒れていた…。体を揺すったりしたがもう反応はなかった…。

カービィ

「どうして…!?」

カービィは、女の子を抱えると、泣きながら草原の丘に向かって走り出した。

人が居なかったためか草原だけは襲われずに残っていた…

カービィ

「もう戦いたくない…！もう僕は…戦いたくないよ…！」

すると、現実の世界のカービィの体が黒く点滅し始めた。

リック

「カ、カービィ!?」

リックたちはカービィに近づいた。

ナイトメア

「ククク…。そろそろだ…！いよいよカービィが再び魔獣として目覚める時が来たのだ…！」

リボン

「カービィは絶対に魔獣になんかならないもん…！」

リボンは、泉に浮かぶカービィに抱きついた。

リボン

「カービィ、起きて！！カービィっ！！」

すると、抱きついた瞬間に激しい光が出て来てリボンも気を失ってしまった…。

クー

「リ、リボンちゃん！！」

クーはリボンを抱き上げた。

ナイトメア

「フフ…。自分からカービィの夢に飛び込むとはねえ…。今のうちにその子に宿っているクリスタルを奪ってあげよう」

ナイトメアは、リックたちに近づいてきた。

すると、横からメタナイトの声が聞こえてきた。

メタナイト

「私を忘れてもらっては困るぞ！」

メタナイトは、剣を構えた。

ナイトメア

「無駄だ。私にお前たちの攻撃は通用しないのだ」

メタナイト

「やってみなければ分からない！！（カービィ…頼む！早く起きてくれ…）」

カービィは、さっきまでと変わらず、黒く点滅しながら泉に浮かんでいた…。

カービィの夢の中に入ったりリボンは、荒れ果てた町に立っていた…。

リボン

「ここは…?」

すると、人が何人も倒れている事に気づいた。

リボン

「きゃっ!ど、どうなってるの!?!」

すると、リボンはまだ綺麗な草が生えている丘を見つけた…。

リボン

「あそこだけキレイな丘が残ってる…」

気になったリボンは、丘の頂上に行くとカービィが一人で座っていた…。

その近くには女の子が倒れていた…。

リボン

「あっ!カービィ!!」

リボンはカービィに走って近づいた。

リボン

「よかった！無事だったんだね！！」

しかし、カービィは下を向いたままだった…。

リボンは、いつもと様子の違うカービィにすぐに気がついた…。

リボン

「……カービィ…？」

カービィ

「……リボンちゃん…。僕、とってもひどい事をしてたんだ…！星から人を追い出したり、罪のない人に悪い事をしてたんだ…。僕はもう…戦いたくないよ…」

カービィは泣きながらリボンに言った。

リボン

「…でも、それはずっとずっと前の事じゃない！今は罪のない人を攻撃したりしてないよ…！」

カービィは、リボンの方を向いた。

カービィ

「リ、リボンちゃん…」

リボン

「もう…！カービィらしくないな…。今は魔獣じゃなくて、立派な星の戦士なんだよ！」

カービィは、自分を振り返った。

カービィ

「（そうだ…。今、僕は星の戦士なんだ！昔は魔獣だなんて関係ない！今は他の人のために戦うんだ！）」

カービィは、立ち上がってリボンと手をつないだ。

リボンは、ニッコリ笑いながら手を握った。

リボン

「そうこなくっちゃ！さあ、元の世界に帰ろうよ！！」

カービィ

「うん！行こう！！」

カービィたちはまばゆい光に包まれた…。

そのころ、現実ではメタナイトがナイトメアに必死に抵抗をしていた。

メタナイト

「く…！ソードビーム…！」

メタナイトは、ソードビームを放った。

しかし、ソードビームは、ナイトメアを突き抜けていつてしまった…。

ナイトメア

「フフフ…。無駄だ！そろそろトドメをさしてやろう」

ナイトメアは指から黒い星を出してきた！

リック

「メ、メタナイト！！」

すると、黒い星は横に高速で避けて行つた…。

なんとカービィが起き上がって吸い込んでいたのだ！

メタナイト

「カ、カービィ！」

ナイトメアは、目覚めたカービィを見て驚きを隠せない様子だ。

ナイトメア

「お前、どうして！？完璧に魔獣になつたハズ…！！」

カービィ

「過去に何があつたかなんて関係ないよ！今の僕は星の戦士だ！僕は悪い事が出来ない…。だから、脱走したんだ。今は人のために戦つていかなくちゃ…！」

ナイトメア

「おのれ…！だが、簡単に私を倒す事は出来ないだろう」

カービィ

「（確かに…。でも何かあるハズ…。実体が無いから攻撃が当たらないだけなんだから…！）」

すると、メタナイトはスターロッドを泉から抜くとカービィに投げ渡した。

カービィ

「メ、メタナイト!?!」

メタナイト

「ヤツの実体がないなら夢の中で倒すしかない…。だが夢をつくっているスターロッドの力ならナイトメアを倒せるハズだ!」

リック

「でも、そんなことしたらみんなは夢を見れなくなるんじゃないのか?」

夢の泉はププランドの人たちの夢や希望が集まる所だ。だからスターロッドを抜くとププランドの人たちは夢が見れなくなってしまうのだ。

メタナイト

「大丈夫だ!今は昼だから夢が見れないのはお昼寝をしている奴だけだ!」

クー

「メ、メタナイト…。そういう問題じゃ…」

クーは、突っ込みどころが微妙にズレているメタナイトの言葉に何も言えなくなった…。

見るとカービィとナイトメアはすでに戦っていた…。

ナイトメアは指から黒い星を出してきた。

するとカービィはスターロッドを勢いよく振った!

カービィ

「えいつ！」

スターロッドからは光り輝く星が出てきた。

スターロッドから放たれた星は、ナイトメアの黒い星を貫通してナイトメアに直撃した！

ナイトメア

「な、なんだと！？」

カービィ

「あ、当たった…！」

カービィもナイトメアに攻撃が当たった事に驚いた。

カービィは、ナイトメアに連続で星を放った！

カービィ

「やああッ…！」

ナイトメア

「く…！まさか…こんなことが…！！！」

するとナイトメアの体から青いイナズマのようなものが出てきた…。

メタナイト

「今だ、カービィ！」

カービィは、スターロッドを回しながら振った。

すると、スターロッドから出た星たちはナイトメアの体の周りを包み込むように回り始めた。

ナイトメア

「や…止める…!!く…苦しい…!!」

ナイトメアの体は、下の方からけむりのように消え始め、完璧に消滅した…。

リボン

「倒したの…?」

メタナイト

「ああ。ナイトメアは悪夢に過ぎない…。だからスターロッドの強力な力で消滅してしまったんだ」

カービィは、すぐにスターロッドを夢の泉に戻した。

リック

「これで大丈夫だな!」

カービィ

「うん…」

スターロッドを戻すとカービィはリボンの所に行った。

カービィ

「リボンちゃん、ありがとね!」

リボン

「えっ？何が？」

リボンは、突然のお礼に驚いた。

カービィ

「もし、リボンちゃんが来てくれなかったら僕、魔獣になるところだったよ」

カービィは、苦笑しながら言った。

クー

「リボンちゃん、お前が魔獣になりかけた時に必死に飛びついたんだぜ」

リボン

「だって…本当に必死だったからつい…」

リボンは、顔をほんのり赤くしながら言った。

すると、カービィは手を出した。

カービィ

「これからもよろしくね！！」

リボン

「う…うん！！」

リボンも手をだして握手をした。

カービィとリボンの絆は今までよりも強くなった気がする…。
そして、いよいよリップルスターへ！！

第8話【夢と過去】

おわり

第9話 旅立ちの時

お久しぶりです！

リボンです♪

カービィの過去を知って驚いたけど、今のカービィは立派な星の戦士！

過去の事なんて関係ないよね！

そして、いよいよリップルスターに向かったんだけど…。

メタナイト

「カービィ。今がリップルスターに行く時かもしれん…」

メタナイトは、急にカービィに向かって話し始めた。

カービィ

「どういう事？」

カービィは、首を傾げた…。

メタナイト

「相手は、今まで強力な手下を送り込んで来た。だが、ナイトメアの場合は弱点のスターロッドがあるにもかかわらず送り込んで来た…と言う事は…」

リボン

「もう手下がいなくなってるって事…?」

リボンは首を傾げながら言った…。

メタナイトはうなずいた。

メタナイト

「その通りだ。だが、こっちをおびきよせるための作戦かもしれない…」

カービィ

「…。どっちにしろそろそろこっちから攻めていかないかね!」

リック

「お、おい!そんなことしてやられちゃったらどうするんだよ!」

リックは、カービィを止めようとしているのか、必死になっていた。

クー

「リック…。お前…」

メタナイト

「確かに…。勝てないかもしれない…。でもこのままだとポップスターまでもが危なくなる…。いずれは宇宙全体も危なくなるだろう…」

カービィ

「リック。心配してくれるのは嬉しいよ!でも今はやらなきゃいけない時なんだよ!」

カービィは、リックに言った。

すると、リックもカービィの熱意を感じたのか何も言わなくなった。

カービィ

「でも、どうやって行けばいいんだろ……。かなり遠いんだよね？」

リボン

「うん……。私、必死に逃げてたからどの位か分からないけど……」

すると、メタナイトが口を開いた。

メタナイト

「恐らくスターロッドが連れてってくれるだろう」

カービィ

「スターロッドが!？」

カービィはびっくりして聞き返した。

メタナイト

「クリスタルの力が宿っているリボンが触れて上手く反応すればいけるハズだ」

リボン

「わ、私が!？で、できるかな……」

リボンは、不安になりながらもスターロッドに触った。
すると、スターロッドが激しく輝きだした！

メタナイト

「強く祈るんだ！」

リボン

「（リップルスターに行けるようにして下さい！！）」

するとスターロッドの上に光の玉が出てきた。

メタナイト

「恐らくこれで繋がったハズだ」

カービィ

「じゃあ、僕たち行ってくるよ！」

リック

「カービィ……。絶対帰って来いよな！！」

カービィ

「もちろん！！」

メタナイトはじつとカービィを見つめていた。

カービィ

「メタナイトはポップスターをよろしくね！」

メタナイト

「ああ……。お前も気をつけてな」

カービィはうなずくとリボンと手をつないで光の中に入っていった……。

カービィとリボンはリップルスターに着いた…。すると、ワープしてきた光の玉は消えてしまった。

カービィ

「ここがリップルスター？」

リボン

「うん…」

今、二人がいる場所は黒い雲の影響を受けていないのか、明るい場所だった。しかし、辺りを見ると所々黒い雲に覆われて暗くなっている所があった。

リボン

「本当なら全部が明るくて素敵な場所なのにな…」

リボンは、リップルスターの変わり果てた姿を見て落ち込んでしまった。

カービィ

「リボンちゃん…。……。ん…？誰がいるよ？」

カービィが指を向けた方向には、リボンのような妖精が飛んでいた…。

リボン

「あ、ハルちゃん！」

ハル

「え！？あ、リボンちゃん！！」

ハルは、リボンとカービィに近づいてきた…。

カービィは、ハルをよく見た。

カービィ

「…！（目に輝きがない…！って事は…）」

ハル

「ねえ…リボンちゃん。そろそろクリスタルを渡してくれるかしら？」

リボン

「えッ！？」

カービィ

「やっぱり！！逃げるよ、リボンちゃん！」

カービィは、リボンの手を握ると逃げ出した！

カービィ

「やっぱりみんな操られてるんだよ！」

リボン

「そ、そんな～！」

ハル

「ふふっ♪簡単には逃がさないわ！」

ハルはなんとバクダンを投げてきた！

カービィ

「ええ〜どっから出したのーッ！？」

カービィたちが必死に逃げていると前にも妖精がいた。

リボン

「あれは…ユキちゃんだ！」

ユキ

「見つけちゃった♪」

カービィ

「か、勘弁してよー！！」

ユキとハルはバクダンを同時に投げてきた！

ユキ&ハル

「スペシャルダブルバクダン！！」

カービィ

「どこがスペシャルなんだよー！！普通にダブルで投げてるだけだよーッ！！」

リボン

「カ、カービィ！あそこにお城に繋がる水路があるよー！！」

カービィ

「と、とりあえず入ろう！」

カービィとリボンは井戸のような水路に逃げ込んだ。

ユキ

「待ちなさ〜いつ〜！」

ユキとハルも水路に飛び込んだ。

カービィ

「な、なんとか振り切ったみたいだね…」

リボン

「びつくりしたあ〜…」

休みながらリボンは後ろを見た。すると、普通の妖精よりも少し体が大きい妖精が倒れていた…。

リボン

「女王様！？」

リボンは、びつくりして女王様に近づいた。すると女王様は目を開けた…。

女王様

「リ、リボン…！？どうしてここに…？」

カービィ

「大丈夫ですか？（この人は大丈夫みたい…）」

女王様

「あなたは…？」

リボンは、女王様に全てを話した。

カービィが戦ってくれている事、リップルスターの妖精たちは今操られている事…思い出せる事は全て話した。

女王様

「そうだったのですね…。ありがとうございます。」

カービィ

「いえいえ！それでも僕は星の戦士です…。ところで女王様はどうしたんですか？」

女王様

「私もすぐに体に乗っとられてしまいました…。でも急に必要なくなったからと言われてここに入れられたのです…」

カービィ

「そうですか…」

リボン

「カービィ。ユキちゃんたちが引き返してきたよ！」

リボンは岩の影から覗き込んで見ていた。

カービィ

「そろそろ行かないと…！」

カービィが立ち上がると、女王様は急に止めた。

女王様

「待ちなさい…。リボン…こっちへ…」

女王様はリボンの体に触るとなんとクリスタルが出てきた。

女王様

「ハア…ハア…。これでリボンとクリスタルは離れました…。きつと力を貸してくれるでしょう…。さあ！早く行きなさい…！」

カービィとリボンは、追いかけてきた二人にバレないように水路の奥に進んでいった。

リボンの手にはしっかりとクリスタルが抱えられていた。

カービィ

「それにしてもクリスタルってそんなに大きかったんだね…」

クリスタルの大きさはカービィの身長よりも長く、横はリボンが乗ってもまだ大きいくらいの大きさだ。

カービィたちは奥に進んで行くと岩の割れ目からお城の廊下が見えた…。

リボン

「こつちだよ！ついてきて…！」

リボンに続いてカービィも割れ目から中に入った。

リボン

「中はおんまり変わってないみたい…」

カービィ

「でも、このお城のてっぺんから黒い雲があふれ出してたから何かあるのは間違いないね…」

二人が階段に向かって歩いて行くと妖精たちが飛び回っている事に気がついた。

カービィ

「妖精たちを操って見張りをさせてるのかな…」

リボン

「みんな…。元に戻って…！」

リボンは泣きそうになった。

カービィは、そんなリボンの肩をポンツとたたした。

カービィ

「大丈夫！！今から親玉を追い出せばみんな元に戻るよ！」

リボン

「カービィ…。ありがとう…」

カービィ

「どういたしまして！さ、元気を出して行こっ…！」

二人は階段を走ってのぼり出した。

今までカービィたちはお互いを支え合いながらここまで来た。

カービィがピンチの時はリボンがサポート…。リボンがピンチの時にはカービィがいつも励まして元気づけてきた。

カービィは改めてその事に気がついていていた。そして遂にお城の最上階に着いた…。

カービィ

「行くよ！リボンちゃん」

リボン

「う、うん！！」

カービィとリボンは、最後の部屋の中に入って行つた…。

部屋の中は薄暗い…。よく前を見ると、部屋の真ん中に黒い玉の様な物が浮いていた…。

そして、黒い玉の様な物がいきなりしゃべり始めた。

黒い雲のボス

「ようこそ。私のアジトへ！」

カービィ

「お前が親玉…？」

リアルダークマター

「そうだ。私はリアルダークマターだ。さあ、クリスタルを渡せ！…というところだが、カービィよ…お前は非常に邪魔な存在なのだ。先に始末してやろう」

カービィ

「そう簡単にはやられないもん!!」

リアルダークマター

「クク…！それはどうかな？ここは黒い雲たちが厚く覆っている。だからワープスターも呼べまい」

カービィ

「…！（ワープスターが僕のエネルギー源って事知ってるのか…！）
」

リアルダークマターは姿を少しずつ表した。リアルダークマターは、ダーク・リムロたちのように黒い玉の体で背中にはオレンジ色のヒレの様なものが付いていた。

リボン

「リムロたちにそっくりだね…」

カービィ

「う、うん…」

リアルダークマターはヒレの様な物を飛ばしてきた！

カービィ

「リボンちゃん！下がって！」

オレンジ色の玉はカービィを追いかけて飛んで来た！

カービィは玉を吸い込んで勢いよく吐き出した。

カービィ

「えいつ!!」

カービィの攻撃は、リアルダークマターの目に直撃した。

リアルダークマター

「今、何かしたのか？」

カービィ

「やっぱり強力なコピー能力じゃないとダメだ…」

すると、リアルダークマターが笑った。

カービィ

「…？」

リボン

「カービィー!!後ろだよ!」

カービィ

「えっ!?!」

カービィは、後ろから飛んできた玉に当たった。

カービィ

「うわあっ!!」

リアルダークマター

「どうした?お前の力はそんなものか？」

リアルダークマターは、笑いながらオレンジ色の玉を次々に出してきた！

カービィ

「（なんとかしなくちゃ…！なんとか…）」

すると、カービィの足下に手鏡が落ちているのに気がついた…。

カービィ

「これだ！」

カービィは、手鏡を口に入れてコピーした。

カービィは、手にステッキを持ち、頭には赤と水色の帽子をかぶって魔法使いの様な姿になった。

カービィ

「ミラーカービィ参上！！」

カービィはステッキを素早く前に構えた。

カービィ

「リフレクトガード！」

すると、カービィの体は虹色のバリアで包まれた！

そして、オレンジ色の玉は全て弾かれた。

リアルダークマター

「無駄だ。そいつらはお前を追いかける…！」

しかし、カービィの顔はニッコリと笑顔になっていた。

そして、カービィに向かって玉が飛んでくると、カービィは二人に分身した。

リボン

「カービィが二人になっちゃった!!」

二人に別れたカービィは向き合つとさらに分身し始め、十数人になった!

カービィ

「ミラー分身!!」

リアルダークマター

「な、なんだと!？」

リアルダークマターは、分身したカービィたちに囲まれていた。

リアルダークマター

「こしやくなマネを...!!」

分身したカービィの一人は、ジャンプしてリアルダークマターに切りかかった!

カービィ

「ミラー斬り...!!」

リアルダークマター

「ク...!!」

しかし、ダメージは無く、切りかかったカービィは消えていった。

リアルダークマター

「なに…?」

すると次々にカービィたちが切りかかり始めた!

カービィ

「ミラー斬り〜!!」

カービィ

「ミラー斬りッ!!」

するとリアルダークマターの目を一人のカービィが切りつけた!

リアルダークマター

「ぐあっ!おのれ…!!」

怒ったリアルダークマターはエネルギーを溜め始めた…。

リアルダークマター

「フッフ…!この攻撃は絶対にかわせないぞ!全体攻撃だからな…!」

リボン

「カ、カービィ…!」

カービィ

「リボンちゃん。僕の後ろにいてね!」

リボン

「う…うん…!!」

リボンは、カービィの後ろにしがみついた。

リアルダークマター

「ククク！消えるがいい！！カービィよ！」

リアルダークマターは、巨大なビームを部屋全体に放った！

カービィ

「リフレクトフォース…!!」

カービィは、自分でステッキを振り、鏡の壁を作った！

鏡の壁はビームをそのまま跳ね返した！

リアルダークマター

「な、なにいっ！？ぐおわああ…!!」

リアルダークマターはビームに包まれた…。

リボン

「た、倒したの…?」

カービィ

「わ、分かんない…」

カービィとリボンは、じっとけむりの中を見た。

すると、中から影が浮かんできた。

カービィ

「……!!」

リアルダークマター

「おのれ……!! こうなれば仕方ない。真の姿を見せてやろう! 着いて来るがいい……!」

リアルダークマターは部屋から出ると、さらに高く飛んで行き、リップルスターの外に出て行った。

カービィ

「一体何をする気なんだろ……。とにかく止めなくちゃ……!」

カービィたちはとうとう黒い雲のボス【リアルダークマター】を追い詰めた。しかし、【真の姿】とは一体何なのか?

カービィたちの最終決戦が今始まるうとしている……!

第9話【旅立ちの時】

おわり

第10話 最終決戦！

フフフ…！

私は、リアルダークマターだ。

意外とカービィは手強いな…。

部下たちがかなわないわけだ。

だが私にはとうていかなわないだろう！

カービィがやられる姿を見るがいい！！

カービィたちは急いで外に出た。

すると、急にクリスタルが輝きだした！

カービィ

「クリスタルが！？」

すると空を覆っていた黒い雲は全て無くなり、妖精たちも元に戻った。

ユキ

「…？私何やってたんだろ…？」

ハル

「私も…。全然覚えてないよ…」

リボン

「ユキちゃん！ハルちゃん！元に戻ったんだね！」

ユキ&ハル

「あ、リボンちゃん！」

リボンは二人に抱き付いて泣き始めた。

リボン

「心配したんだよ！もう…！」

ユキ

「何の事？全然分かんないよ…」

リボンは二人に出来るだけ分かりやすく説明し始めた。

ハル

「そうだったんだ…。私、黒い雲がきたと思ったら眠くなっちゃって…」

すると、カービィは女王様の事を思い出した！

カービィ

「あ！女王様がまだ水路の中じゃ…」

ユキ

「え！？大変ハルちゃん、早く行きましょ！」

ハル

「う、うん!!」

二人は水路に入って行った…。

すると、カービイはじつと空を見つめた…。

リボン

「カービイ…。やっぱり行くの?」

カービイ

「もちろん!!あいつを好き勝手にさせるわけにはいかないしね!」

リボン

「お願い!私も連れてって!!」

カービイ

「えッ!?で、でも…」

リボン

「お願い!!どうしてもカービイと行きたいの!」

カービイは、リボンの熱い熱意を感じ取った。

カービイ

「…うん。分かった!!でも、無理だけはしないでね!」

リボン

「うん!」

カービィ

「ワープスター!!」

カービィは、ワープスターを呼んだ。

カービィたちは、ワープスターに飛び乗ると、宇宙に向かって飛び始めた。

カービィたちが宇宙に出ると、黒い星がある事に気がついた。

リボン

「見てカービィ! あんな星見た事ないよ…」

カービィ

「僕も…。行ってみよう!」

カービィは、黒い星にどんどん近づいていった。

よくみると、黒い星は不気味に動いていた…。なんとリップルスターを覆い尽くしていた黒い雲が集まってできた星だったのだ。

カービィ

「あそこにリアルダークマターが…。よし! 行こう!!」

カービィたちは黒い星に入って行った…。

地面に降りると、そこは透明の地面と空は一面が黒い雲で覆われているだけの世界だった…。

カービィ

「何もない星だね……」

リボン

「う…うん…。ちょっと不気味だよ…」

カービィたちは不安になりながらも前へと進み始めた。

すると前に白く丸い体して羽の生えた様な生き物がいることに気づいた。

???

「ようこそカービィ。私がさっきのリアルダークマターさ」

カービィ & amp ;リボン

「えッ!？」

カービィたちは驚いた。さっきの姿とは全く別の姿になっていたからだ。

ゼロツ

「私はゼロツ。リアルダークマターは仮の姿だったのだよ」

そう言うとゼロツは不気味に笑い出した。

ゼロツ

「ククク…!では、そろそろ終わりにしてやろう」

ゼロツがそういうとカービィたちの地面が崩れ始め、カービィは落ちてしまった!

リボン

「カ、カービィ！！」

リボンはすぐにカービィの背中をつかんだ。

リボン

「カービィ！しっかり私も頑張るよ！！」

カービィ

「ありがとう！リボンちゃん」

カービィは宙に舞ったクリスタルをキャッチした。

ゼロツー

「フフフ！もうお前たちには勝ち目はないぞ。何しろここはコピーするものが無いのだからな！！」

確かに辺りにはコピー出来る様な物は一切ない…。

コピー出来るような物はカービィが持っているクリスタルだけ…。

カービィ

「（クリスタルしかコピー出来るような物がないよ…！！でも、コピー出来るのかな…？）」

ゼロツー

「何をボヤボヤしている！！」

ゼロツーは、大きな目から赤い玉を出してきた。すると赤い玉はカービィに近づくと爆発した！

カービィ

「うわああー!!」

リボン

「きゃあー!!」

カービィとリボンは、バランスを崩したがなんとか立て直した。

カービィ

「どうしよう…。このままじゃ…!」

リボン

「カービィ。クリスタルを使わなきゃ!」

カービィ

「で、でもこれは…」

リボン

「女王様はクリスタルが力を貸してくれるって言うってたじゃない!」

カービィ

「リ、リボンちゃん…!」

カービィはクリスタルを抱えると、クリスタルに祈りはじめた。

カービィ

「(クリスタルお願い!!僕たちに力を貸して…!)」

すると、クリスタルは激しく輝き始めた!

ゼロツ

「な、なんだ…？」

クリスタルは形を変えて鉄砲の様な形になった。

カービィ

「クリスタルが…変わった！？」

ゼロツー

「無駄だ…！」

ゼロツーは赤い玉を放った！

カービィ

「リボンちゃん！上に上がって！」

カービィたちは上に上がってかわした！
そしてカービィはクリスタルを構えた。
するとひし形の弾がゼロツーに命中した。

ゼロツー

「ぐあっ…！！」

カービィ

「す、すごい…！」

カービィもクリスタルの力に驚いた。

ゼロツー

「カービィめ…！！」

ゼロツーは、カービィにせまってきた。

カービィ

「えいつー!!」

カービィは、クリスタルの弾をゼロツーの大きな目に放った！
すると、ゼロツーは苦しそうに止まってしまった。

ゼロツー

「く、苦しいい！目にしみるうー!!」

カービィ

「くらええーっ!!」

カービィは、連続でクリスタルの弾を発射した！
クリスタルの弾は全てゼロツーの目に直撃した！

ゼロツー

「ギヤアアー!!ま、まだだあー!!」

ゼロツーも連続で赤い玉を出してきた。そしてカービィたちを囲んで爆発した！

カービィ

「う、うわっ！うわああー!!」

リボン

「きゃっ！きゃあー!!」

ゼロツーもカービィも必死に攻撃を続けた。

カービィもゼロツーも息切れを始めた。

カービィ

「ハア…ハア…！」

ゼロツー

「ハア…ハア…。フ…フフ…！これでケリをつけてやろう…！！」

そういつとゼロツーは、エネルギーを目に溜めはじめた！

カービィ

「それなら、こっちだって…！！」

カービィもクリスタルにエネルギーを溜めはじめた。

ゼロツー

「終わりだーッ…！」

ゼロツーはビームを放った！

カービィ

「だああーッ…！」

カービィもクリスタルからビームを放った！

そして、二人の放ったビームは激しくぶつかりあった！
すると、その近くになんとワープゾーンが現れた。

カービィ

「（激しくぶつかりあったビームで空間がゆがんだのかな…？リップルスターが見える…）」

リップルスターに繋がっていると分かったカービィは、なんとビームを放っているのとは反対の手でリボンをつかむと、ワープゾーンに向かって勢いよく投げた！

リボン

「……え…？カ、カービィ…！？」

カービィ

「リボンちゃん。早く逃げるんだ！」

カービィは、ワープゾーンに飛ばされているリボンにそう言った…。その表情は、実に真剣な目をしていた…。

リボン

「な、何で！？まだあいつを倒してないよ…！」

リボンは、びっくりしながらカービィに言った。

カービィ

「もし、あいつが爆発しちゃったら…この星ごと無くなっちゃうよ…。そしたら、リボンちゃんも助からなくなるよ…。」

すると、リボンは嫌な予感がした…。

リボン

「カービィはどうするの…？嫌だよ…！カービィを一人残して行く

なんて!!」

リボンは、泣きながらカービィに訴え続けた。

リボン

「カービィが残るなら、私も残る!!一緒に戦う!!だから…だから…!!」

カービィ

「お願いだよ…リボンちゃん…」

すると、カービィはリボンに向かってニッコリ笑った。

カービィ

「僕が救ったリップルスターに…リボンちゃんがどうしてもいてほしいんだ…」

カービィがそう言うとリボンはワープゾーンに吸い込まれて行った…。

カービィ

「フルパワーだーッ!!」

カービィのビームはゼロツターのビームを弾き飛ばして、ゼロツターに直撃した。

ゼロツター

「ぐっ…!!クソオーツ!!」

すると、ゼロツの体から光が出てきた！

カービィ

「バイバイ…。リボンちゃん…」

カービィはそう呟くと、ゼロツは黒い星とカービィをまきこんで爆発してしまった…。

リボンは、ワープゾーンを抜けてリップルスターのお城の前に出てきた。

女王様

「リボン…！無事だったんですね！」

しかし、リボンの目には涙がこぼれていた…。

リボン

「女王様…。カ、カービィが…。カービィが…！！」

リボンは、大声で泣き始めてしまった…。

女王様は、何となくどうなったのかを悟った…。

女王様

「リボン…。そんな顔をしていたら、あの人も悲しみますよ？」

女王様は、優しく声をかけた…。

リボン

「だ、だって…！！」

リボンは、カービィとの出会いを思い出していた…。

カービィと出会ってどの位たったんだろう…。リックやクーと出会い、遊んだり…毎日が楽しくてしかたがなかった…。

リボンは、いろんな思いを胸に空を見上げた…。すると、空から光る物がゆっくり降りて来る物に気がついた…。

リボン

「なんだろ…」

ユキ

「リボンちゃん、行ってみよ！」

ユキとリボンは謎の光を追いかけて行った。

ユキ

「ここに降りてきそうね」

リボン

「うん…」

光っていたのはなんと「クリスタル」だった…。

リボン

「クリスタル…？」

クリスタルはリボンの前で止まると光が少し弱くなった…。そしてリボンの手に向かって光りを出した…。

リボン

「…？」

リボンは、不思議に思いながらも両手を前に出した…。

すると、光の中からなんとカービィが出てきた！

リボンは、出てきたカービィをしっかりとキャッチした。

リボン

「カ、カービィ…！」

カービィ

「あ…れ…？ 僕…爆発でやられちゃったんじゃない…」

リボン

「バカー…！ 心配させて…！…！」

リボンは再び泣き出した。

カービィ

「ゴ、ゴメン…。でも…心配してくれてありがとう…」

そう言うときカービィは眠ってしまった…。

リボン

「もう…！…！ おかえり、カービィ…」

ユキ

「早くお城に連れてって寝かせてあげよ！」

リボン

「うん!!」

カービィ

「スウ… スウ…」

カービィは、ぐっすり眠っていた…。

リボンと出会ってどの位時間がたったか分からないけど、カービィの長い長い戦いはいったん幕を閉じようとしている…。

第10話

「最終決戦！」 おわり

第11話 春風に乗って

やあ！

僕、カービィだよ！！

ゼロツも倒して、いよいよ僕も帰る時が来ちゃった…。

でも、リボンちゃんと離れたくないんだよね…。

カービィがゼロツを倒して一日がたった…。

カービィはお城のベッドで眠っていた…。

カービィ

「う…うーん…！アレ…？あ、僕寝ちゃったんだっけ…」

カービィは、ベッドから起き上がった。するとベッドの脇にはリボンが寝ていた…。

カービィ

「リボンちゃん…」

すると、部屋の中に女王様が入ってきた…。

女王様

「おはようございます。気分はどうですか？」

カービィ

「はい！大丈夫です！それよりリボンちゃんは…」

女王様

「リボンはあなたに付きつきりでしたよ。よほど心配だったのでしょうね…」

カービィ

「や、やっぱり…」

カービィは、ベッドから降りるとリボンをベッドに寝かせてあげた。

女王様

「カービィ様…。どうぞこちらへ」

女王様は、カービィと部屋の外に出た。

カービィ

「そんなことより【カービィ様】なんてやめて下さいよ…」

女王様

「でも、リップルスターを救ってくれましたし…。そのくらいのけじめはつけないと…」

カービィ

「は、はあ…」

カービィは、苦笑して釈然としないまま、女王様の部屋に入っていた…。

カービィ

「ところで、どうして僕をここへ連れてきたんですか？」

女王様

「改めてお礼を申し上げます。ありがとうございます！」

カービィ

「そんな…。僕はただほっとけなかつたんですよ…」

カービィは少し照れながら言った。

女王様

「でも、リボンにはかなり辛いおもいをさせてしまいました…。あなたに小さな子にクリスタルを宿して危険な目にあわせてしまって

…」

カービィ

「女王様…。でも、リボンちゃんがクリスタルを持って逃げてなかったら僕はここには来てないし、リボンちゃんにも会えなかったハズです…。僕は、リボンちゃんに会えて本当によかつたんですから！」

カービィは、笑顔で答えた。

すると、暗い顔をしていた女王様も少し笑顔になった…。

女王様

「今夜はここでパーティをするんですが、カービィ様はいつポップスターに帰られますか？」

カービィ

「今日はもう一日リップルスターにいるつもりです。明日の朝帰ろうか迷ってます」

女王様

「そうですか…。もっと居てくださっても良いですよ」

カービィ

「でも、仲間たちが心配しますので…」

カービィは、女王様の誘いを無理に断った。

カービィ

「（確かに…リボンちゃんとはもう少し一緒にいたいけど…）」

カービィは、一人考えながら女王様の部屋を出た。
そして、リボンが寝ている部屋に戻った。

すると、リボンは起きてカービィを待っていた。

リボン

「あ！カービィ！どこに行ってたの？」

カービィ

「女王様に呼ばれてたんだよ」

リボン

「へえ…。それより外に行こ！！良い所に連れてってあげる！」

リボンはカービィの手を取ると、外に向かって猛ダッシュし始めた

！そして、カービィは物凄い勢いで引きずられ始めた。

カービィ

「ちよっ！ー！リボンちゃん！ー！（リボンちゃんが怖いよおー！ー！）

」

しばらくするとカービィはリボンにつかまれて投げられた！

リボン

「えーいつー！ー！」

カービィ

「えーッ！？」

すると、カービィはお花畑に落ちた。

カービィ

「うわあ…！一面がお花畑だ！ー！」

カービィの周りはお花だらけになっていた。

リボン

「驚いた？リップルスターで一番キレイな場所なんだよ！ー！」

リボンは、そう言うときカービィの頭から花をかけた。
そして、クスクスと笑い始めた。

カービィ

「あっ！やったな！ー！までーッ！ー！」

リボンとカービィは一日中お花畑でじゃれ合うように遊んだ…

そして、あっという間に時間は過ぎて夕方になってしまった。

カービィ

「リボンちゃん。そろそろ行こっか？今日はパーティをするって女王様が言ってたしね！」

リボン

「うんッ！！」

カービィとリボンは急いでお城に戻っていった。
お城の大広間ではパーティの準備がすっかり出来ていた…。

カービィ

「うわぁー…！デデデ城のパーティよりもすごい…！」

リボン

「カービィ、早く行こっよ！」

カービィはリボンに手を引かれながらパーティ会場に入った…。

すると、中にはすでにユキやハルたちがいた。

ユキ

「あ、来た来た…！」

ハル

「遅いよ！リボンちゃん！」

リボン

「ゴメンゴメン！カービィと遊んでたら遅くなっちゃって…」

リボンたちが話していると会場の明かりが消えた…。

そしてステージだけが明るくなり、女王様が話を始めた…。

女王様

「皆様お集まりいただき、ありがとうございます。今日はリップルスターの平和を願うためのパーティです」

カービィ

「（そういえば、リップルスターもかなり傷ついちゃってた…。女王様もみんなも辛いんだろうな…）」

カービィは、ボーッと考え込んでいると、女王様に名前を呼ばれた。

女王様

「カービィ様…。どうぞこちらへ」

カービィ

「え！？僕…！？」

驚くカービィの背中をリボンが押した。

リボン

「さ、行かなきゃ！！」

カービィ

「う、うん」

カービィはステージに上がった。

緊張は無いが、大勢の妖精たちがカービィに視線を集中させていた。

女王様

「今回、リップルスターを救ってくださったカービィ様です」

カービィ

「ど、どうも…」

女王様

「カービィ様は小さな体ですが、星の戦士として宇宙を守っているのです！」

ユキ

「へえー！！星の戦士なんだ！」

ハル

「可愛くて星の戦士には見えないよね！」

会場はザワザワし始めた。

女王様は必死に対応し始めた。

女王様

「し、静かに！それではカービィ様、一言…」

女王様は、カービィの方を向いたがカービィはすでにステージには居なかった。

リボンたちも会場中を探したが結局見つからなかった…。

リボン

「（もしかしたらあそこかな…）」

リボンは、急にカービィの行きそうな場所を思いつき、会場から出てお城から出ていった…。

カービィは、少し高い丘の上で座って星を眺めていた…。

カービィ

「やっぱり僕には静かな場所でキレイな星空を見るのが一番だな…」

すると、そこにリボンがやってきた。

リボン

「いたいた！やっぱりここだったんだね！」

リボンは、カービィの隣りに座った。

リボン

「カービィ…。明日帰っちゃうんだよね…？」

カービィ

「リボンちゃん…。知ってたんだね…」

カービィもリボンも悲しい顔をして下を向いてしまった…。そして、今までの出来事を思い出した…。

カービィ

「僕…リボンちゃんと会えなくなるなんて寂しいな…」

カービィは、一人事のようにこぼした…。

リボン

「カービィ…。私も…私も寂しいよ…」

カービィ

「そういえば、リボンちゃんと出会った時も星がキレイだったな…」

カービィがまた一人事のように言った…。

リボン

「ね…ねえ、カービィ。聞きたい事があるんだけど…」

リボンは、恥ずかしそうにモジモジしながら言った…。

カービィ

「え？何…？」

カービィは、首を傾げながら言った…。

リボン

「カービィって…す、好きな女の子っているの…？」

リボンは、顔を赤くしながら恐る恐る聞いた…。

カービィ

「えー！？ちよっ…！いきなりどうしたの！？」

カービィは、びっくりして立ち上がった。

リボン

「お願い！答えて！！」

カービィ

「う、うん…。い、いるよ？」

カービィも顔を赤くしてモジモジし始めた…。

カービィ

「そ、その…！僕、リボンちゃんの事…」

すると、リボンはカービィのほっぺたにキスをした…。

カービィ

「……えっ…？」

そして、リボンはそのままカービィに抱き付いた！

リボン

「私も…大好き！カービィの事が大好きだよっ！！」

リボンは、そう言うとき涙を流し始めた…。

カービィ

「リ、リボンちゃん…！！」

カービィの目からも涙が流れた…。

いつもずっと一緒だった二人…。

一番近い存在だった二人が、これからは離れて暮らさなくてはいけない…。

二人にはそれが耐えられなかったのだ…。

その後、二人は落ち着くまで星を見ていた…。

そして、次の日の朝になった…。

お城の広場にはたくさんの人たちが集まってきた。

女王様

「カービィ様。これから先も頑張ってください」

女王様はカービィの体に小さなクリスタルが付いたペンダントをつけた…。

カービィ

「こ、これは…?」

女王様

「それはクリスタルのカケラです。これから先、きっと役にたつでしょう」

カービィ

「ありがとうございます！」

すると、さっそくクリスタルが光ってワープゾーンが出来た…。中にはポップスターが映っていた。

しかし、カービィはすぐにワープゾーンに入らずにリボンの所に行った…。

リボン

「カービィ…」

カービィ

「リボンちゃん…」

リボン

「また…また逢えるよね？」

カービィ

「…もちろん！！」

そう言うと、カービィとリボンはがっちりと握手をした。

握手が終わると、カービィはゆっくりとワープゾーンに入って行った…。

カービィ

「（またいつかきつと逢おうね…。バイバイ、リボンちゃん）」

こうしてカービィの戦いは幕を閉じたのである…。

リボンとまた会える日を信じて、カービィの戦いは続いていくのでしょう。

これからもずっと……

星のカービィ

くはるかぜ物語く

おし
まい

第2シリーズにつづく…

タイトルが同じなので、次ページから第2シリーズの執筆になります。

第12話 心の奥の自分（前書き）

ここからは、第2シリーズの始まりです m (|) m

第12話 心の奥の自分

青く晴れわたっている空…。

透き通るようにキレイな水が流れている川…。

緑がたくさんの森や草原…。

そんな平和な星【ポップスター】の楽園【ププランド】にこの物語の主人公は住んでいます。

朝…。

ドーム形の家から、ピンク色の体で、丸い形をした人が出てきた。そう、誰もが知っている【カービィ】。

カービィは、これまでもププランドや宇宙を守るために戦ってきている【星の戦士】だ。

カービィ

「ふわあぁ…！さて、朝市にレッツゴー…！」

カービィは、ププランドにある小さな村に向かった。村に着くと、カービィは魚を見にいった。

カービィ

「Mr・フロスティ！おはよ…！」

カービィは、顔がアザラシのような人に話しかけた。しかし、Mr・フロスティは浮かない顔をしていた…。

Mr・フロスティ

「カービィ悪いね。今日は魚が無いんだ…」

カービィ

「ええ〜！？いつもはたくさん釣れるのに？」

Mr・フロスティ

「おかしいだろ？最近誰かが海を荒らすらしいんだ……」

カービィ

「フーン…。そうなんだ……」

カービィは、がっかりしながら果物だけをもらって家に帰った…。

カービィ

「魚が釣れないなんて…。ププランドに何か変な事でも起きなきゃいいけど……」

カービィは、心配そうな顔をして窓の外を見た…。

すると、誰かが家のドアを激しくノックし始めた！

カービィ

「はい！」

カービィは返事をしてドアを開けた。ドアを開けると、ワドルディが息を切らせながら立っていた…。

ワドルディは、カービィと体格がそっくりで体が【茶色いカービィ】と言ったところである。

ワドルディ

「ハアハア…！た、大変っス〜！！」

カービィ

「一体どうしたの？」

ワドルディ

「メ、メタナイトが行方不明らしいっス!!」

カービィ

「えッ!? メタナイトが!？」

メタナイトは、ププランドで一番強い剣士であり、カービィの親代わりと言ってもいい人物だろう。

カービィとワドルディは、すぐに家を飛び出してメタナイトを捜し始めた。

カービィはまだ気づいていなかった…。

再びププランドに危険がせまってきた事…。

メタナイトを捜す人たちは増え続けて、村全体での騒ぎになった。

カービィは森や海岸など、色々見てまわったがメタナイトは見つからず、手掛かりになるようなものはなかった…。

カービィ

「メタナイト…。一体どうしちゃったんだろ…」

カービィは捜すのを諦めて、村の中心に行った。すると、そこには村人たちが集まっていた…。

頭が燃えているようなオレンジで長い髪を持つ【バーニンレオ】
雪だるまの【チリー】

コンドルのような姿をしている【バードン】
いつも元気に走り回っているタイヤの姿をした【ウィリー】
などなど…。村人が一斉に集まる事は珍しかった…。

カービィ

「みんな〜!!」

カービィは走ってみんなのところに来た。

バーニンレオ

「おう！カービィ。どうだったよ？」

バーニンレオの質問にカービィは首を横に振った。

カービィ

「ダメだよ…。見つからない。みんなは？」

バードン

「ダメよ…。私も飛び回って捜したけど…」

ウィリー

「旅にでも出たんじゃねえのか？」

チリー

「でも、メタナイトに仕える【ソードナイト】と【ブレードナイト】
は知らないんだよ」

村人たちはさらに深く悩み始めた。

カービィ

「とにかく、出来るだけ早く手掛かりを見つけなくちゃ！何かの事件だったら大変だよ！！」

村人たちはカービィの言葉にうなずき、また辺りを捜し始めた。

カービィは、ひとりで草原に向かった…。

カービィ

「メタナイトって一人が好きそうだけど…」

カービィは草原を見渡した…。しかし、そこには誰もいなかった。

カービィ

「いるわけないか…」

カービィは草原に寝転んだ…。

カービィ

「はぁ…。なんだか疲れちゃった…」

カービィは目を閉じた。

カービィ

「（リボンちゃん元気かな…。ここで初めて出会ったんだよね）」

しばらくするとカービィは起き上がった。

すると、すぐ近くにメタナイトが立っていた…。

カービィ

「あ…！メ、メタナイト…！」

カービィは、走ってメタナイトに近づいた。

メタナイト

「フフ…。カービィか」

カービィ

「う、うん」

メタナイト

「一体どうした？」

カービィ

「どうしたって…村のみんなでメタナイトを捜してたんだよ！」

メタナイト

「フフフ…。そうか…」

メタナイトは、少し笑って答えた…。

カービィは、メタナイトの様子がおかしい事に気づいた…。

カービィ

「（いつものメタナイトじゃない…。何かがおかしい…）」

メタナイト

「カービィよ。一緒に来てくれないか」

カービィ

「ど、何処に…？」

メタナイト

「それはお楽しみさ」

そう言うとメタナイトは背中のマントに隠れているコウモリのような羽で空に舞い上がって行った…。

カービィ

「ま、待つてよー！ワープスターッ！！」

カービィはワープスターを呼ぶとすぐに飛び乗ってメタナイトを追いかけ始めた。

カービィ

「（メタナイトの様子がおかしい…！とにかく早く追わないと！）」

ププランドのはるか上空に來ると、鏡が浮いていた…。

そして、メタナイトはその鏡の中に入って行った…。

カービィ

「え！？こ、これに入るの！？」

カービィは恐る恐る鏡に触れた。

すると、カービィの体は吸い込まれるように中に入ってしまった…。

カービィは鏡の中に入ると、そこには別の世界が広がっていた…。

カービィ

「こ、ここは…?」

カービィの前に広がるのは、光あふれる神殿のようだ。

そして、入り口と同じ鏡があった…。しかし、色が少し黒い。

カービィ

「入り口と同じ鏡だ…。なんたる…」

カービィは、その鏡に近づこうとした…。

しかし、後ろから止める声が聞こえてきた。

????

「行くな、カービィ!!」

カービィは振り返った。

カービィ

「えッ!? メ、メタナイト!?」

カービィは驚いた。メタナイトは傷だらけだ。

メタナイト

「お前…。どうしてここへ…?」

カービィ

「な、何言ってるの? メタナイトがついてこいって言って連れて来

「ただよ！」

メタナイト

「……ま、まさか。あいつか……！」

メタナイトは、さっきの色の変わった鏡を見た。
すると、鏡の前にはもう一人のメタナイトの姿があった……。

カービィ

「メ、メタナイトが……二人！？双子だったの！？」

メタナイト

「そ、そんな訳あるまいっ！あいつは、私の心の奥に眠っていた邪悪な心だ……！！」

変なメタナイト

「フフ……。その通りだ」

カービィ

「ぼ、僕をこんな所に連れて来てどうするつもりなの！？」

変なメタナイト

「言っただろう。お楽しみ……とな。……というか【変なメタナイト】
という名前は止めい……！」

春風（作者）

「あ、バレた？」

変なメタナイトは剣を構えた。

変なメタナイト

「カービィより先に斬られたいか…?」

春風（作者）

「それは無理！だって僕が作者だから、今お前を倒しちゃう事だつて出来るんだぜ?↑」

変なメタナイト

「で、では仕方がない…。このまま物語に戻るか…」

変なメタナイトは、とりあえず物語に戻った。

カービィ

「メタナイト！剣を貸して!!」

メタナイト

「あ、ああ…。気をつけるんだぞ…!」

カービィはメタナイトの剣を飲み込んだ。

すると、カービィは頭には緑の帽子、手には剣を持った姿に変身した。

カービィ

「ソードカービィ参上!!」

カービィは、剣を構えた。

すると、変なメタナイトの体の青い部分は灰色に、足は赤色に変わった！

ダークメタナイト

「私はダークメタナイト。メタナイトの心の片隅にあった悪の心さ」

ダークメタナイトは、カービィに向かって走ってきた！

カービィ

「速い…！！」

カービィは、ダークメタナイトの剣をカービィも剣ではじき返した。

カービィ

「やあぁっ！」

カービィはダークメタナイトに剣を振った。

しかし、何とダークメタナイトは素手で受け止めてしまった！

カービィ

「…！」

ダークメタナイト

「フッフ…。そんなものなのか」

カービィはダークメタナイトにそのまま投げ飛ばされた。

カービィ

「いたぁ…！！」

カービィは、起き上がってダークメタナイトの方を見た。

ダークメタナイト

「さて…と。お遊びもここまでにするか」

ダークメタナイトはまた走ってきた！

すると、なんと姿が消えてしまった！

カービィ

「えっ！？き、消えた！？」

カービィは辺りを見るが、ダークメタナイトの姿は見えない…。

ダークメタナイト

「お前では私の姿を見ることはできん！！」

すると、カービィの体に傷がつき始めた…。

カービィ

「く、くう…！高速で斬りつけてるんだ…！」

カービィがフラフラになるとダークメタナイトは勢いよく斬りつけた！

カービィ

「うわぁっ！！」

カービィはその場に倒れた…。そして、コピー能力も無くなってしまった。

メタナイト

「カ、カービィー!!」

ダークメタナイトは、カービィを掴みあげると色が変わった鏡の前に持っていった…。

ダークメタナイト

「フフフ…！さあ、カービィの悪の心よ！目覚めるがいい!!」

鏡はカービィを写し始めた…。

カービィ

「（胸の中が…。モヤモヤする…！この感覚は…）」

すると鏡には、黒いカービィが写し出された。

カービィ

「（あ、あれは…僕…?）」

ダークメタナイト

「フフフ！この作戦はあるお方の作戦なのだ。カービィの闇の心を奪えれば宇宙征服もたやすいと…ね」

そう言う、とダークメタナイトは、カービィをメタナイトに向かって投げた！

メタナイトは傷ついて動けないカービィを受け止めた。

メタナイト

「カービィ！しっかりしろ!!一度ププランドに戻るぞ…!!」

メタナイトもフラフラになりながら、入り口の鏡に入っていた。

ダークメタナイト

「さあ、目覚めるがいい。ダークカービィよ！」

ダークカービィは目を開けて鏡から出てきた。

ダークカービィ

「ダークメタナイト、ありがとね！やっとカービィの体から出れたよ」

ダークカービィは、カービィの体から出られて本当に嬉しそうだ。

ダークカービィ

「じゃあ入り口の鏡を割っておこう。これからの作戦であのお方を狙われたら大変だからね！」

ダークカービィは笑いながら言った。

そのころ、ププランドではメタナイトとカービィを捜していた。

ワドルディ

「カービィ！どこにいるっスか？はあ…メタナイトに続いてカービィまでいなくなっちゃうなんて絶対おかしいっスー！」

ワドルディは、草原を捜しまわっていた。

すると、草原の真ん中にピンクの丸いものが見えた…。

ワドルディ

「カービィッスか…？」

ワドルディは、恐る恐る近づいた…。

すると、傷だらけのカービィとメタナイトが倒れていた！

ワドルディ

「カービィもメタナイトも傷だらけっス！！は、早く助けを呼ぶっスーッ！！」

ワドルディは、超特急で村人を呼んでくると、二人を村の医者に運んで行った…。

医者

「ふう…。こりやまたヒドいケガをしたのう…」

医者は、少し呆れながら言った。

ワドルディ

「カービィ…。まだ目を覚まさないっス…」

ワドルディは、親友ともいえるカービィをかなり心配していた…。

医者

「カービィ君は、かなりのダメージを受けたらしいのう…。無理をし過ぎじゃ」

メタナイト

「しかし…。カービィが来ていなかったら私は…」

メタナイトは、本当にカービィに感謝をしているようだ。

カービィ

「うう…うん…！」

ワドルディ

「カービィが目を覚ましたっス！！」

カービィは、ゆっくり目を開けた。

カービィ

「こ、ここはどこ…？」

カービィは、辺りを見回した…。

ワドルディ

「ここは村の診療所っス！カービィが無事でよかったっスーッ！！」

ワドルディは、カービィに飛び付いた。

カービィ

「心配かけてゴメン…。もう大丈夫だよ！！」

医者

「全く…。大丈夫なわけがあるまい。しばらくじっとしておれ」

医者は、部屋から出ていった…。

まるで、メタナイトとカービィに話をさせるかのように…。

カービィ

「……。ねえ、メタナイト。あの世界って一体なんなの…？」

メタナイト

「あれは、【鏡の国】だ」

カービィとワドルディは同時に首をかしげた。

カービィ

「鏡の国？」

ワドルディ

「聞いたことないっす…」

メタナイトは、話を続ける…。

メタナイト

「鏡の国は、元々は鏡に写った願いを叶えてくれる所だった。しかし、邪悪な者が入り込み、鏡は【ダークメタナイト】や【ダークカービィ】のような悪い事しか写さなくなってしまったのだ…」

カービィ

「悪い事を写す鏡ってあの色が変わった鏡の事？」

メタナイト

「そうだ。私はいち早く鏡の異変に気がついたのだが、うかつにも自分の姿が写ってしまい、やられたというわけだ」

カービィ

「そうだったんだ…」

ワドルディ

「カービィは、その鏡に写ったんスか？」

カービィ

「うん…。やられて、もう一人のメタナイトつかまれて…ね」

メタナイトは急に顔色を変えながら話し始めた…。

メタナイト

「それにしても、カービィの悪の力を狙っていたとは…。相手はかなりの戦力を持っているハズだ…」

カービィは、自分の行動に責任を感じたのか、下を向いて黙り込んでしまった…。

ワドルディ

「カービィ…。カービィのせいじゃないっスよ…」

カービィ

「でも、僕がやられちゃったから…」

メタナイト

「あのバトルは仕方がない。相手は闇の力を持っている…。今、思えばカービィがよくあれだけのバトルができたと思う」

カービィ

「メタナイト…」

メタナイト

「カービィ…。お前の強さには限界がない。これから成長していけば大丈夫のハズだ」

メタナイトはカービィの背中をポンツとたたいた。

ワドルディ

「そっす！それに、カービィはひとりじゃないっすよ！！」

ワドルディは、ニツコリ笑いながら言った。

カービィ

「ワドルディ…。うん…。そうだね！（そうだ。僕は決してひとりじゃないんだ！）」

カービィは改めて仲間の大切さに気がついたのだった。

「どんなことがあっても諦めない…」

カービィはそう胸に誓うのだった…。

第12話【心の奥の自分】

おわり

第13話 カービイの弟子！？

カービイの体の傷は驚異のスピードで治り、二日後には退院した。

カービイ

「はあ……。やっと家に帰れるよ」

カービイは、走って家に向かった…。

家に着くと、ドアの間に手紙がはさまっているのに気がついた。

カービイ

「…手紙？誰からだろ…」

カービイは手紙をひろげて読み始めた。

「カービイさんへ。僕をカービイさんの弟子にしてください！返事を待ってます」

カービイ

「返事を待ってますっていわれても、宛先書いてないよ…これ…」

カービイは、手紙を持ったまましばらく固まった…。

カービイ

「うーん…。それにしても誰からなんだろ…。ハンコが無いから直接来たって事だね…。何日か待ってればまた来るかな…？」

カービイは、とりあえず手紙を大切にたなの中にしまった。

カービィ

「フウ…。それにしても…。【ダークカービィ】…か…」

カービィは、自分の心にも悪が存在していた事にかなりのショックを受けたのだろう。

この二日間はずっと鏡の国の事で頭がいっぱいだった…。

カービィ

「僕…悪の心があるのに、星の戦士になつてて良いのかな…」

カービィは、また、ぼんやりと考え始めた。

すると、誰かがドアを開けて、入って来た。

リック

「よっ！！元気か！？」

クー

「入院したって聞いたたら今度は退院だって言うからびっくりしたぜ！」

カービィ

「リックにクーー！！」

リックとクーはププランドの森に住んでいるカービィの親友たちだ。

リックはハムスターで背中にカービィをおんぶすることでコピー能力が使えるようになる。

クーは、フクロウで意外と村のみんなからモテている。クーは、カービィを足でつかむことで、色々なコピー能力を使うことができる。

クー

「カービィどうした？あんまり元気がないんじゃないのか？」

カービィ

「うん…。ちょっと悩み事だよ…」

リック

「一体どうしたんだ？何でも聞いてやるぜ！」

カービィ

「うん…」

カービィは、全てを話した。

ダークカービィの事、鏡の国の事、そして自分の心に悪が存在したのに星の戦士を続けていいのか…。

とにかくカービィは、不安なことを全て相談した。

クー

「なるほどな。正義感の強いお前が悩むのも無理ないな…」

カービィ

「やっぱり僕には自信ないよ…」

クー

「でもな、カービィ。星の戦士だから悪の心がないわけじゃないんだ。生き物は必ず【良い心】も【悪い心】も持っている…。これが当たり前なんだよ」

カービィ

「クー……」

カービィは、クーの言葉で強く胸を打たれた。
生きているものは必ず【良い心】も【悪い心】も持っている。
カービィもやっと納得した。

クー

「カービィは、立派な星の戦士さ。だから自信を持てよ!!」

カービィ

「うん……ありがとう!!」

少し元気になったカービィを見て安心したのか、リックとクーは森に帰っていった…。

カービィ

「……。ちよつと鏡の国を見てこようかな……」

カービィは、家から飛び出して、ワープスターを呼んだ。

カービィ

「ワープスターッ!」

カービィは、降りてきたワープスターに飛び乗って、プププランドのはるか上空に向かった…。

しかし、入り口の鏡を見て驚いた。

なんと鏡が割られていたのだ!

カービィ

「わ、割られてる…！きつとダークカービィたちの仕業だ…！！ど
うしょ…。これじゃ入れないよ…」

カービィは、しばらく悩んでいたが何もできないのでププランド
に戻った。

そして、カービィが家に着くとドアの前に誰かが立っていた…。

カービィ

「…？誰だろ？」

ドアの前にいるのは、まだ体の小さな小鳥だ。

小鳥

「すいませーん！…今日もカービィさん居ないのかな…」

カービィ

「君は…？」

カービィは、後ろから話しかけた。

小鳥

「わあっ！び、びつくりしたあ…。あ、カービィさんだ…！」

カービィ

「カ、【カービィさん】って…。ところで、僕に何か用事？」

ピッチ

「僕、ピッチっています！お願いします、僕を弟子にしてください
…！」

カービィは、さっきの手紙を思い出した。

カービィ

「じゃあ手紙をくれたのは君なの？」

ピッチ

「はい！そうです！」

カービィ

「そ、そんなに丁寧にしやべらなくてもいいよ！それに、僕は弟子なんてとらないよ……」

ピッチ

「ええ〜！？そうなんですかー……」

カービィ

「だから敬語じゃなくて良いって……。それに呼び捨てで良いからね！」

カービィ

「ピッチはどこから来たの？」

ピッチ

「僕？僕は大体ここから反対側の所から来たんだ」

カービィ

「ええッ！？反対側から僕の弟子になりに来たの！？」

カービィはびっくりして聞き返した。

ピッチ

「うん。僕の住んでる所は、あんまり強い人は居なくて…。魔獣に襲われたりすると大変なんだ…。だから強くなって平和を守りたいの！」

カービィ

「へえ〜！偉いんだね！ピッチは」

ピッチ

「そ、そうかな…？でも、カービィは弟子をとらないんでしょ…？」

ピッチは照れながらカービィにもう一度聞いた。

カービィ

「うん…。ゴメンね。僕もまだ未熟だからさ…。それより、もう帰っちゃうの？」

ピッチ

「実は困ってるの…。しばらく帰らないつもりだったから…」

ピッチは心配そうに答えた。

カービィ

「じゃあ、僕の友達の所に連れてってあげるよ！」

カービィは、ピッチを連れて森に向かって歩き出した。

ピッチ

「プププランドって素敵な所だね〜」

カービィ

「うん！ところでさ、ピッチはさっき強くなりたいてって言ったよね？」

ピッチ

「うん！！」

ピッチは元気よく返事をした。

すると、カービィはピッチに簡単な質問をし始めた。

カービィ

「じゃあピッチは【強い】ってどんなことだと思う？」

ピッチ

「え…？ど、どんなことって言われても…。力が強いとかじゃないのかな？」

ピッチは少し混乱しながら答えた。

カービィ

「確かに【力が強い】のも大事だけど、一番大切なのは【勇気】じゃないかな」

ピッチ

「勇気…？」

カービィ

「そう！何かする時に全力で立ち向かう事ができる勇気だよ！！僕

はそう思っただー！」

ピッチ

「…。そうだね！さすが星の戦士だね！」

ピッチはカービイの言葉に本気で感動してしまったようだ。

しかし、その様子をダークカービイが木の影から見ていた…。

ダークカービイ

「勇氣…か。そんなちっぽけな物は闇の力にはかなわない事を教えてあげなくちゃ！」

そういうとダークカービイはクスツと笑って消えていった…。

そして、カービイはピッチをクーの所に連れて行った。

そして事情を話した。

クー

「なるほど。それだったらこの辺りの木に巣を作るといい。オレもここだしなー！」

ピッチ

「ありがとうございます！」

クー

「おいおい…。敬語なんて使わなくていいって！これから仲良くしていこうー！」

ピッチ

「うん!」

ピッチはまるで自分に兄ができたように喜んだ。

カービィ

「よかった!じゃあ僕はそろそろ帰るね!」

そういうとカービィは薄暗い道を帰っていった。

そして次の日…。

カービィは、村でチリーやバードンたちと話をしていた。

バードン

「へえ!カービィに弟子入りにね!」

チリー

「珍しい事もあるんだね!」

カービィ

「何その言い方…。全く…」

カービィは、少しふくれて怒った…。

それを見たバードンは、笑いだした。

バードン

「アハハッ!嘘だつて!!!カービィはすぐに本気にするんだから」

そんなことを話していると、クーとピッチが村にやってきた。

カービィ

「ピッチだ！おはよー！」

ピッチ

「おはようー！」

ピッチはカービィに向かって飛んできた。

バードン

「へえー…。この子がピッチか。私はバードン！よろしくねー！」

ピッチ

「は、初めまして…」

ピッチは少しびっくりしているようだ。

カービィ

「ピッチはまず村に慣れないとね！ププランドの人たちはみんないい人ばっかなんだよー！」

クー

「それじゃ村を案内するよ！おいで」

クーたちは、ピッチを連れて村を案内しようとした。しかし、クーたちの前にダークカービィが現れた！

ダークカービィ

「村を案内したってムダだよ！今からこの村は僕の物になるんだから」

カービィ

「ダ、ダークカービィ…!!」

カービィは、みんなの前に飛びだした。

ピッチ

「カービィが…二人!？」

ピッチは、ダークカービィを見て驚きを隠せない様子だ。

ダークカービィ

「昨日、カービィは力より勇気が大切って言ってたけど、戦いは力が全てなんだよ!それを今から教えてあげるね!!」

そういつとダークカービィは、闇の空間に消えていった…。

カービィ

「ま、待て〜!!」

カービィは走って追いかけようとしたが、クーに止められた。

クー

「待て、カービィ!何かが出てくるぞ…!」

カービィ

「え…?」

カービィたちは、闇の空間をじっと見つめた。すると、そこから巨大な金色のエビのような姿をした物が出てきた!

チリー

「ま、魔獣だー!!」

ヘビーロブスター

「オレはヘビーロブスター。この村はダークカービイ様の物にするため邪魔者を追い出してやる…!」

カービイ

「ロブスターってエビだよね?」

バードン

「…。カービイ、エビって言うてもあいつは半分機械だから食べれないわよ…」

バードンは何かを察したのか、カービイに言った。

カービイ

「わ、分かってるって!」

カービイは慌てて答えた。

クー

「そ、そんなことを言い合ってる暇はないぞ!とにかくあいつを倒さないと!」

カービイ

「クー!合体しよ!」

クー

「よし！」

クーはうなずくとカービィの頭を足でつかんだ。

ヘビーロブスター

「ハハハ！なにが合体だ！笑わせやがって！！」

ヘビーロブスターは、笑いながら手から炎を出してきた！

チリィはすぐに氷の冷氣で対抗した。

チリィ

「ブリザード！！」

バードン

「このまま攻撃をよけたら、村が焼けてしまうわ！」

するとバードンは、宙に浮かぶとヘビーロブスターに体当たりをした！

バードン

「コンドルずつき！！」

ヘビーロブスターは、ずつきをくらつとあお向けに倒れた。

ヘビーロブスター

「お、おのれ……！」

カービィ

「僕たちも行こう!!」

クー

「おう!」

カービィたちもヘビロープスターに向かって飛んで行こうとしたときに、ピッチに止められた。

ピッチ

「カ、カービィ…!行かないで!絶対やられちゃうよ…!」

カービィ

「…でも、仲間と戦えば勝てるかもしれないよ。だから昨日言っただじゃない!勇気が大切だって!!」

そういうとカービィとクーは飛んで行った。

ピッチは、黙ったままカービィを見つめていた。

ピッチ

「(カービィ…)」

カービィは、ヘビロープスターの目の前に構えた。

ヘビロープスター

「真正面に来るとはバカめ…!!」

ヘビロープスターは、手から炎を出してきた!すると、カービィは口を開けて炎を吸い込んだ。

カービィ

「ファイアコピー完了!!」

クーは、カービィをつかんだまま飛び上がった。

クー&カービィ

「バーニングアタック!!」

クーとカービィは火の玉になってヘビローブスターに体当たりをした!

ヘビローブスター

「グ...!!」

ヘビローブスターは、頭に体当たりをされてフラフラになっていた...。

クー

「よし!カービィとどめだ!!」

カービィ

「うん!!」

そういうと、クーはカービィをヘビローブスターに向かって投げた!

カービィ

「ファイアッ!!」

カービィは口から勢いよく炎をふきつけた!

ヘビーロブスター

「ぐ、ぐあああ…！！ダ、ダークカービイ様…！！」

ヘビーロブスターは、爆発して完璧に消滅してしまった。

チリー

「やったあ！」

バードン

「フウ…。久しぶりにヒヤヒヤしたわ…」

ピッチ

「すごい…。勝ったんだ…」

ピッチは、呆然として戦いを見ていた…。
そんなピッチの所にカービイがやってきた。

カービイ

「分かってもらえたかな…？戦いは力だけが全てじゃないってこと…」

ピッチ

「うん…。カービイの言ってた事がよく分かったよ」

ピッチはうなずいた。

カービイ

「よかった！安心したよ」

カービィはニツコリ笑った。

こうして突然やってきたピッチはププランドの新しい仲間になった…。

第13話

【カービィの弟子!？】

おわり

第14話 友情の力

こんにちはっスー!!

タイトルでは初登場のワドルディっス♪

前は、カービィの闇の心【ダークカービィ】が村で暴れて大変だったっスー!!

オイラもカービィに協力したいけど、何の力も無いオイラには無理っスよね…。

鏡の国ではダークメタナイトが誰かと話をしていた。

ダークメタナイト

「ダークカービィの作戦は失敗したようです」

ボス

「そのようだな。だが、カービィのようにダークカービィにもコピー能力を使わせてみると面白いかもしれんな。フフ…」

敵のボスは不気味に笑った…。

ダークメタナイト

「確かに面白いかもしれませんが…」

ダークメタナイトも不気味に笑いはじめた…。

そのころカービィは、ワドルディと一緒にピクニックに出かけていた。

ワドルディ

「へえ…。そんなことがあったんスか…。知らなかったッス」

カービィ

「うん。村を支配するなんて言ってたけど、村に何かあるのかな…？」

ワドルディ

「考えすぎッスよ！そんなことよりせっかくのピクニックッス！！
楽しまなくちゃ損するッスよ！」

ワドルディは笑いながらカービィに言った。

カービィ

「…うん。そうだね…！」

カービィとワドルディは草原に座ってサンドイッチを食べはじめた。

カービィ

「あっ！おいしい！！ワドルディって料理上手いんだね…！」

ワドルディ

「喜んでもらって嬉しいッス…！」

カービィはまだ知らなかった…。

まさかワドルディとピクニックに来るのがこれで最後になるとは…。

ワドルディ

「カービィ…。やっぱり今回もププランドのために戦うっス？」

カービィ

「もちろん！！ププランドはホントにいい所だもん！それに…ダークカービィは僕が倒さなくちゃいけないんだ…！」

ワドルディ

「カービィ…。カービィはすごいっスね。オイラにはそんなこと出来ないっス…」

ワドルディは、下を向きながらそう言った。

すると、カービィは笑いながらワドルディに言った。

カービィ

「そんなことないよ。ワドルディはいつも僕を支えてくれてるもん…！」

しかし、ワドルディは下を向いたままだ…。

ワドルディ

「でも…。オイラは戦えないっス…」

カービィ

「ワ、ワドルディ…」

ワドルディ

「あ、自分がこんな話は止めて言ったのにダメっスね…！」

カービィはワドルディがその後も無理をして笑っているように見えてしかたがなかった…。

そして、夜になってからもカービィはワドルディの事を心配していた…。

カービィ

「ワドルディ…。無理してたけど大丈夫かな…」

次の日…。

カービィは、朝早くからメタナイトに呼ばれた。

カービィ

「どうしたの？こんな朝早くから…」

メタナイト

「お前、鏡の国の入り口が割れてしまっている事は知っているな？」

カービィ

「うん…」

メタナイト

「実はあの鏡の割られた破片はダークカービィたちが持っているらしい」

カービィ

「えっ！？じゃあ破片を集めれば中に入れるようになるって事！？」

カービィはびっくりして答えた。

メタナイト

「その通りだ。しかし、ダークカービィたちは邪魔される可能性のあるカービィやププランドの住人を狙っているらしい…。今私たちが戦っても勝てる相手じゃない…。決して戦うんじゃないぞ…！」

そう言うと、メタナイトは姿を消した…。

カービィ

「…でも、僕が戦わなくちゃププランドは危なくなるよね…。どうすればいいんだろ…」

カービィは、考えながらゆっくりと村に向かって歩き始めた…。

しばらくすると、村から黒いけむりが上がりはじめた…。

カービィ

「けむり…？ま、まさか…！」

カービィは、走って村に向かった。

そのころ、村ではダークカービィが暴れまわっていた！

ダークカービィ

「フフツ！さ、早くカービィを呼んで来てもらおうかな」

ダークカービィは、村人たちに笑いながら言った。

バードン

「だ、誰が呼んでくるもんですか！」

バーニンレオ

「そうだ！オレたちはお前がカービィを狙ってる事を知ってるんだぜ！―！」

ダークカービィ

「じゃあ仕方ないか…。村を無くしてあげるよ！」

ダークカービィがこう叫んだ瞬間に後ろからカービィの声が聞こえてきた！

カービィ

「待てッ！！―！」

それを見たダークカービィはクスツと笑った。

ダークカービィ

「やっと来たね。待ってたよ」

カービィは、ダークカービィの姿を見て驚いた…。

何とダークカービィの姿が頭から炎が吹き出している姿に変わっていたからだ！

カービィ

「コ、コピー能力…！」

ダークカービィ

「驚いた？僕は君の心なんだよ。君に出来て僕に出来ないものなんてないんだよ！」

ダークカービィは、口から勢いよく炎を出してきた！

カービィ

「く…！」

カービィは、口をあけて何とか炎を吸い込んだ。

カービィ

「ファイアコピー完了…！（でも強烈な炎だ…！）」

ダークカービィ

「まだまだ行くよ！」

ダークカービィは続けて炎を出してきた！

カービィ

「ま、負けるもんか…！ファイアーツ…！」

二人の炎は激しくぶつかりあった！

しかし、カービィは全力で炎をだしているが、ダークカービィはまだ余裕の表情で炎を出していた…。

ダークカービィ

「カービィ、かかったね♪」

カービィ

「えっ！？」

すると、カービィの炎はゆっくりと押され始めた…。

そして、その様子をワドルディが心配そうに見ていた…。

ワドルディ

「カ、カービィ…!!」

しかし、ワドルディの心配もむなしくダークカービィの攻撃がカービィに当たってしまった!

カービィ

「う、うわああっ!!」

カービィは壁に勢いよくたたきつけられた…。そして、なんとコピー能力も抜けてしまった!

カービィ

「いたた…! か、かすり傷だけど…足に当たっちゃった…!」

ダークカービィ

「さて! もう終わりにしてあげるよ!」

カービィは、立ち上がろうとしたが傷が痛んで無理だった…。

バードン

「カービィー!!」

バードンはカービィをかばいに入った。

ダークカービィ

「邪魔するのはやめてくれないかな?」

ダークカービィは、炎を出してバードンを壁にたたきつけた…。
バードンは気を失って倒れてしまった…。

カービィ

「バ、バードン…！」

ダークカービィ

「大丈夫！カービィを倒した後にみんなもカービィと同じ所に連れてってあげるからね！」

ダークカービィは、村人たちに叫んだ…。

ダークカービィ

「じゃあね、カービィ。ファイア〜！！」

ダークカービィは、カービィに勢いよく炎を出してきた！

カービィは、思わず目を瞑った。
すると、その時だった…。

ワドルディ

「カ、カービィーッ…！」

ワドルディは、叫びながらカービィの前に飛込んで来た！

カービィ

「ワ、ワドルディ…！」

ワドルディは、自作で頑丈なパラソルを使って炎をガードした！

ダークカービィ

「そんなパラソルで防ぎきれると思うの？」

ダークカービィは、炎をさらに強く出してきた！

ワドルディ

「ま、まだまだっス…！」

カービィ

「ワ、ワドルディ！やめて…！これ以上無理したら…！」

しかし、ワドルディはカービィの前からどこうとはしなかった…。

ワドルディ

「絶対にどかないっス！戦えない分は、カービィを出来るだけサポートするって決めたっス…！さ、さあ！早く逃げるっス！」

カービィ

「そんな…！そんなこと出来ないよ…！」

炎のダメージは、少しずつワドルディに襲いかかってきていた…。

ワドルディ

「は、早く…！行くっス…！…！」

カービィ

「い、嫌だーッ…！」

カービィは、ワドルディに飛び付いた！

カービィ

「親友を置いて行けないよ！」

ワドルディ

「カ、カービィ…」

すると、カービィとワドルディの体は激しい光に包まれ、ダークカービィの攻撃は弾き飛ばされた！

ダークカービィ

「一体何を…」

しばらくすると、カービィは、パラソルを持った状態で光の中から現れた。

カービィ

「こ、これは…？」

カービィも驚いているようだ。

すると、ワドルディの声がカービィの頭の中に聞こえてきた…。

ワドルディ

「（安心するっス…。これからもオイラはカービィといつでも一緒にいるっスー！）」

カービィ

「ワ、ワドルディ…？どういう事なの？」

ワドルディ

「（細かい説明は後っス！今はあいつを追いつス！）」

カービィ

「う、うん！」

カービィは、うなずいて構えた…。

ダークカービィ

「一体何をしたの！？」

カービィ

「（自分でも分からない…。でも…。確かにワドルディの力が僕の中にある…）」

ダークカービィ

「とにかく、わるあがきは無駄だよ！！」

そう言うと、ダークカービィは勢いよく炎攻撃をくりだしてきた！

ダークカービィ

「足をやけどしているカービィはよけられないハズだよ！」

カービィは、向かってくる炎に向かってパラソルを構えた…。

カービィ

「パラソルシールド！！」

パラソルは、炎を弾き飛ばした！

ダークカービィ

「ど、どうして…？パラソル能力はあんなに強力じゃないハズなのに…！」

カービィ

「す、すごい…！」

ワドルディ

「（カービィ、今っス…！）」

カービィ

「うん…！」

カービィは、片足でダークカービィに向かってジャンプをした。

カービィ

「パラソルスイングーッ…！」

ダークカービィは、カービィのスイング攻撃をくらって飛ばされた。

ダークカービィ

「う、うわぁー…！…く…！一旦ひかせてもらっよう！ダークスター…！」

ダークカービィは、黒いワープスター【ダークスター】に乗って逃げに行った…。

カービィ

「か、勝った…？」

カービィは、ガクツとひざをついて倒れてしまった…。

バーニンレオ

「カ、カービィ！」

バーニンレオは、すぐにカービィに近づいた…。

カービィ

「ハア…ハア…！」

カービィは、苦しそうに呼吸をしていた…。

バーニンレオ

「一体どうしちゃったんだ…！？…ん？」

バーニンレオは、カービィの体からパラソルのコピー能力が抜けているのに気がついた…。そして、カービィの近くにワドルディがパラソルを持ったフィギュアのような物が落ちていた…。

バーニンレオ

「なんだこれ…？…とにかく、今は病院が先だな！みんな！手伝ってくれ！」

バーニンレオは、他の村人たちに呼びかけて、カービィを病院へ運んだ…。

カービィの体に何が起こったのか？
そして、消えたワドルディの行方は？

それはまた次のお話で…。

第14話

【友情の力】おわり

第15話 カービィとコピー精霊

フフ…！

僕、ダークカービィだよ！

カービィは、妙な能力を身につけてまた強くなっちゃった。
でも、カービィの体ごともらっちゃえばその能力は僕の物だよ…。

カービィを少し苦しめてあげなくっちゃね♪

カービィが気を失ってから一日が過ぎた…。

カービィ

「……ん…！う、ん…！」

カービィは、起き上がった…。すると、そこは病院のベッドの上だった…。

カービィ

「あ、そっか…。僕、ダークカービィにパラソルスイングをしたら急に疲れきっちゃって倒れたんだっけ…？それより……何でパラソルのコピー能力が使えたんだろ…？」

カービィは、考え込んでいると、部屋にリックが入ってきた…。

リック

「カービィ、大丈夫か？」

カービィ

「リック…。どうしてここに？」

リック

「え？どうしてって…お前昨日は一日中寝てたんだぜ！」

カービィ

「ええッ！？僕が！？」

それを聞いたカービィはびっくりしてしまった。

カービィ

「そ、そんなに寝てたんだ…！一体どうしちゃったんだろ…」

すると、そこに医者とメタナイトが入ってきた…。

カービィ

「メタナイト…」

医者

「カービィ君。具合はどうかね？」

カービィ

「はい！もう大丈夫です！！」

カービィは、元気よく答えた。

メタナイト

「カービィ…。【コピー精霊】を使ったのだな？」

カービィ

「コピー精霊…？」

カービィは、首をかしげながら答えた…。

すると、メタナイトはワドルディのフィギュアのような物を持ってきた…。

カービィ

「ワドルディの形をしたフィギュアだ…。何これ…？」

メタナイト

「これはワドルディだ」

カービィたちは言葉を失った…。それは、メタナイトの頭がおかしくなっているのかと思うほどだった…。

カービィ

「ウ、ウソでしょ…？じゃあ…ワドルディは死んじゃったの…？」

カービィは、心配な顔をしてメタナイトに言った…。

メタナイト

「いや…死んではない。触ってみろ…」

カービィは、メタナイトに言われた通りにワドルディのフィギュアに触った…。

すると、フィギュアが急に光だして半透明のワドルディが現れた…。

ワドルディ

「フウ……。やっと出られたっス!!」

カービィは呆然とワドルディを見つめていた。

カービィ

「ワドルディ…?」

ワドルディ

「カービィ大丈夫そうっスね!よかったっス!!」

カービィ

「一体どうなってるのーッ!? 誰か教えてえー!」

ワドルディ

「分かったっス! オイラから説明するっス!!」

ワドルディ

「オイラはカービィの力でコピー精霊になったっス!」

カービィ

「コピー精霊…?」

ワドルディ

「そっス! 昔、コピー能力を使うことのできる星の戦士と一緒に居たと言われているっス。そして、コピー精霊になった人は、【コピーの素】っていうフィギュアのような物になるっス」

詳しく説明するワドルディを見て、カービィは不思議になって聞かえた。

カービィ

「ワドルディ…。何でそんなによく知ってるの…？」

ワドルディ

「コピー精霊として目覚めたせいかわろんな知識が流れ込んできたみたいっスね」

カービィ

「そうなんだ…。でも、僕には使いこなせないんじゃないかな…？ 気絶しちゃったし…」

カービィは、心配そうに言った。

それを見たメタナイトは口をひらいた…。

メタナイト

「初めてコピー精霊の力を使ったんだ。疲れて気絶するのは仕方ないことだ」

カービィ

「で、でも…」

ワドルディ

「オイラもカービィと一緒に戦えるようになったっス！ 元気出してほしっスー！」

カービィ

「ワドルディ…。うん…！ そうだね！ これからもよろしくね…！」

ワドルディ

「もちろんっスー!!」

カービィたちは、病院から外に出た。

リック

「とりあえず、そのフィギュアを置いてこいよ」

カービィ

「そうだね…。じゃあちよつと待っててね!!」

カービィは、リックを残して家にフィギュアを置きに行った…。

カービィ

「急がなくちゃ…!」

カービィは、家にフィギュアを置くとすぐに家を飛び出した。すると、外にメタナイトが立っていた…。

カービィ

「メ、メタナイト!?!」

メタナイト

「さっき言い忘れたことがある…」

カービィ

「言い忘れたこと…?」

メタナイト

「ああ…。実はププランドの人の半分以上が昔コピー精霊だった人なんだ」

カービィ

「ええッ!？」

カービィは、思わず驚いてびっくりしてしまった。

メタナイト

「ププランドの人たちに協力してもらうのがいいと思うのだが…」

カービィ

「…いや。村のみんなまで巻き込むわけにはいかないよ…。じゃあリックが待つてゐるから!！」

カービィは、後ろを向くと村に向かって走って行ってしまった…。

メタナイト

「カービィ…」

メタナイトは、厳しい目をしながらカービィを見つめていた…。

カービィは村に着いた。

カービィ

「あれ…?リックがいない…」

カービィは、辺りを見まわした…。

しかし、村に人の姿は無くなっていた…。

カービィ

「なんか…嫌な予感がする…。リック！いるの！？」

しかし、村からは声は聞こえてこない…。

カービィは、村の奥まで進んで行ったが人は一人も居なかった。

カービィ

「ど、どうなってんだろ…。とりあえず引きかえそう！」

カービィは、振り返って戻ろうとした…。

すると、道をふさぐようにチリーとバーニンレオ、そしてバードンが立っていた…。

カービィ

「みんな！なんで返事もしてくれなかったの！？」

しかし、3人は黙ったままカービィを見つめていた…。

カービィ

「みんな…？一体どうしたの！？」

すると、半透明のワドルディが現れた。

ワドルディ

「カービィ。気をつけるっス！今チリーたちは闇の力によってあやつられてるっスー！」

カービィ

「あ、あやつられてる！？まさか、またダークカービィたちが…」

バードン

「あら。バレちゃったみたいね！でも大丈夫！捕まえてダークカービィ様の所に連れてってあげるわ！！」

カービィ

「く…！に、逃げなくちゃ…！」

カービィは、村の奥へと走って逃げ出した。

バーニンレオ

「逃げたってムダだぜ！」

あやつられているバーニンレオたちはすぐに追いかけてきた。

カービィ

「（なんとか振り切らなきゃ！）」

カービィは、家と家の間の狭い道に入って行った…。

バードン

「そんな所に入ってもムダよ！」

バードンは空を飛んで上からカービィをさがし始めた。

カービィ

「ここならどの道に入ったか分かりにくくなるハズだけど…」

カービィは、後ろを向いた…。

すると、後ろには誰も来ていなかった。

カービィ

「やった！このまま逃げ切ろつと！！」

しかし、カービィは前を向いた瞬間に急ブレーキをしてしまった。
なんとバードンがカービィの目の前にいたのだ！

バードン

「空からの追跡には逃げられないわ！」

カービィ

「そ、そんなあゝ！！」

カービィが振り返るとすでにチリーとバーニンレオが来ていた…。

カービィ

「は、挟まれちゃった…！（ど、ど、どうしょ…！！）」

チリー

「もう逃げられないよ、カービィ」

カービィ

「ど、どうして僕を捕まえるの…？」

バードン

「フフ！そんなこと知らないわ！捕まった後に聞きなさい」

カービィ

「（なんとかしなくちゃ…！！）」

すると、カービィは足下に電球が転がっているのに気がついた。

カービィ

「あ…！（よし！これなら…！）」

カービィは、電球を飲み込んだ！

バーニンレオ

「へっ！スパーク能力になったってムダだぜ…！」

しかし、いつもなら変身するハズのカービィは変身しない…。

チリー

「まさかその能力は…！」

カービィ

「ライト…！」

するとカービィは、手から光の玉を出した！光の玉は、バードンたちの目の前で激しく光出し、目をくらませた！

チリー

「うわ…！」

バードン

「きゃっ…！」

バーニンレオ

「く、くそっ！」

カービィ

「今だーッ!!」

カービィは、ジャンプをしてバードンたちを飛び越えると超特急で逃げ出した！

カービィ

「で、でもどうやってバードンたちを元に戻せばいいんだろ…？」

カービィは、とりあえずフタ付きのゴミ箱に隠れて村の様子を見ていた…。

すると、村人の全員がカービィを捕まえるために探しまわっていた…。

カービィ

「まいったなあ…。これじゃまるで指名手配だよ…」

カービィは、深くため息をついた。

カービィは、そのまま見ているとダークカービィが現れた！

カービィ

「ダ、ダークカービィ…!!」

ダークカービィ

「さて…。そろそろ村を壊しちゃおっかな！」

ダークカービィは、ニヤツと笑った。

カービィ

「……やめろーッ……！」

カービィは、思わず飛び出してしまった……。すると、ダークカービィはクスツと笑った。

ダークカービィ

「かかったね♪」

カービィ

「えっ！？」

すると、カービィの右足に冷たい冷気が当たった！

カービィ

「うわぁっ……！」

カービィは、倒れてしまった……。

カービィ

「右足が固まっちゃって動けない……！」

チリィ

「僕の氷がなかなか溶けないのは知ってるよね？」

動けないカービィを見ていたバーニンレオとバードンはカービィの両腕をしっかりと捕まえた。

バードン

「つーかまえた♪」

カービィ

「は、離してよー!」

ダークカービィ

「もう身動きがとれないね!」

ダークカービィは、ゆっくりとカービィに近づいてきた。

カービィ

「ど、どうして僕を捕まえるの…?」

ダークカービィ

「君の体をもらうんだよ!ワドルディは君の力でコピー精霊になったのに、僕がコイツらに触ってもコピー精霊にはならなかったんだ。だから君の体の中に入ってダーク化して、コピー精霊を手に入れさせてもらうよ!」

すると、カービィはうつむきながら呟いた…。

カービィ

「君には…無理だと思っよ…」

ダークカービィ

「デタラメ言ってもムダだよ!君に出来て僕に出来ないものは無いんだよ」

カービィ

「デタラメなんかじゃない！」

すると、ダークカービィは笑った。

ダークカービィ

「うるさいな…。じゃあそろそろ君の体をもらっからね！」

ダークカービィは、ゆっくりと近づいてきた…。

あやつられているバードンたちも不気味に笑いながらカービィを捕まえていた…。

カービィ

「（バードン…チリー…バーニンレオ…！お願い、元に戻ってよ…！…）」

カービィは、目を閉じてただただ願った…。

すると、カービィの体の周りが白い光に包まれた。

ダークカービィ

「うわっ！？」

ダークカービィは、あまりの眩しさに目を閉じた…。

しばらくしてカービィが目を開けると、そこにはコピー精霊になった3人の姿があった…。

カービィ

「み、みんな…?」

バードン

「ゴメンね、カービィ」

バーニンレオ

「オレとしたことが簡単にあやつられちゃったぜ…」

チリー

「もう、これから先はカービィと同じように暮らす事は無理になっただけど、僕たちはしっかりカービィをサポートしていくよ!!」

カービィ

「みんな…。ありがとう!!」

カービィは、立ち上がってダークカービィの方を向いた。

ダークカービィ

「カービィ…! また僕のジャマを…」

ダークカービィは、カービィの足を凍らせていた氷のカケラをコピーした。

ダークカービィ

「凍りつけてあげるよ!!」

カービィ

「やれるもんならやってみなよ!! 僕にはたくさんの仲間がついて

るんだ！」

バードン

「私が力を貸してあげるわ！」

すると、カービイの体は光だして【ウィング】のコピー能力を身につけた。

カービイ

「バードンの能力だ……！」

カービイは、自分の体の中にバードンの力があふれてくるのが分かった。

バードン

「さ、行くよ！カービイ……！」

カービイ

「うん……！」

ダークカービイ

「そんな能力で僕を倒そうなんて無理だよ！」

そう言うとき、ダークカービイは、冷気を出してきた！

しかし、カービイはすぐにジャンプしてかわした！
そして、空を高速で飛びまわり始めた。

ダークカービイ

「あんなに動かれたら攻撃を当てられない……！」

カービィ

「今だ！フェザーガンツ！！」

カービィは、翼から羽根を飛ばした！

鋭い羽根は、ダークカービィの体をかすった。

ダークカービィ

「く…！！」

カービィ

「今だ！」

カービィは、ダークカービィの真後ろにまわった。

カービィ

「コンドルずつきーッ！！」

カービィのずつきは、ダークカービィの背中に命中した！

ダークカービィ

「うわぁっ！」

ダークカービィは、勢いよく飛ばされて倒れた。

ダークカービィ

「く…くそっ…！！」

ダークカービィは立ち上がって攻撃をしようとした！
しかし突然ダークカービィは、黒いマントではばまれた。
なんとダークメタナイトがいたのだ！

ダークメタナイト

「ダークカービィ。今日のところは引き上げるぞ」

ダークカービィ

「う…うん…」

ダークカービィとダークメタナイトは、影のように消えていった…。

ダークメタナイト

「フッフ…。いい気になれるのも今のうちだ。カービィ…」

カービィ

「ど、どという事なんだろ…」

カービィは、最後のダークメタナイトの言った事が気になって仕方がなかった。

そして、カービィの体が光りだすとウィングの能力が抜けて普通の状態に戻った。

カービィ

「バードン…チリー…バーニンレオ…。ありがとう…！」

カービィは、空を見上げながらそう言った…。

すると、すぐ近くに鏡の破片が落ちているのに気がついた。

カービィ

「これって…鏡の国のヤツかな…」

カービィは、破片を拾いあげた…。

鏡は、美しい輝きを放っていた…。

カービィ

「一応拾っていいのかな…」

カービィは、拾った鏡を持って家に帰って行った…。

その頃、ダークカービィたちは鏡の国の奥にいた…。

ダークメタナイト

「しかし、またダークカービィが追い詰められるとはな…」

ボス

「さすがは星の戦士だな…。しばらくダークカービィは休ませよう。パワーアップするためにな…」

すると、すぐ後ろから笑い声が聞こえてきた。

???

「フフ…！いよいよ私の出番ですね…」

ボス

「ほづ…。では、しばらくお前にまかせるとしよう…」

???

「フッフ…！楽しみですね…！」

鏡の国には不気味な声が響きわたった…。

カービィ

「ところで、リックは…？」

リックは見事にあやつられていた村人たちに捕まっていたのだった…。

リック

「オレを忘れるなァーッ…！」

第15話

【カービィとコピー精霊】おわり

第16話 カービィを狙う魔女

やつほー！

僕、カービィだよ！！

僕の友達たちがコピー精霊になって僕に力を貸してくれるようになったんだ！

でも、敵はその能力をどうしてもダークカービィに与えたいみたい…。

今度は、僕を捕まえるために怪しげな魔女を送り込んで来たんだ！

カービィ

「うわぁー！！」

????

「フッフ！逃がしませんよ」

カービィは、謎の魔女に追いかけていた…。

????

「じゃあそろそろ終わりにしてあげますよ」

謎の魔女は、カービィに向かってビームを放った。

カービィ

「う…うわぁぁーッ!!」

カービィは、目の前が真っ白になった…。
そして、それと同時に大きな音がした。

カービィ

「あ…れ…?」

カービィは、ベッドから落ちていた…。

カービィ

「ゆ、夢かあ…。びつくりしたあ…」

カービィが起き上がると、心配したのかコピー精霊になったバードンたちが話しかけてきた。

バードン

「カービィ、大丈夫?」

ワドルディ

「ずいぶんうなされてたっスよ」

カービィ

「うん。大丈夫!ありがとう」

カービィは、笑顔で答えた。

しかし、心の中では不安だらけになっていた。

カービィ

「（嫌な夢だったなあ…。何も起こらなきやいいけど…）」

カービィは、不安になりながらそう思った。

しかし、カービィの予感当たっていた…。

鏡の国の奥では、水晶玉を使ってカービィの動きを見ている敵がいたのだ…。

???

「フフ…！では、そろそろ行きましようか。カービィ、楽しみにしていなさい…。フフフッ…！」

カービィは、朝食を食べると家の外に出た。

カービィ

「くう…！いい天気…！」

カービィは、背伸びをするいつものように草原に向かった…。毎日草原に行くのはカービィの日課になっていた。

カービィ

「…特に変わった事はないか…」

カービィは、村に戻ろうとした。

すると、何処からか懐かしい声が聞こえてきた。

???

「カービィ…！」

カービィ

「えっ…？その声は…！」

カービィが振り返ると身長がカービィと同じくらいの女の子が立っていた。

それは、前回の戦いで知り合い、カービィに助けてもらった【リボン】であった。

カービィ

「リ、リボンちゃん！？どうしてポップスターに…？」

リボン

「えへへ！女王様たちと一緒に遊びに来ちゃったんだ…！」

カービィ

「へえ～！そうなんだ！で、女王様は？（でも、ダークカービィたちがいる時に来るなんて…タイミングが悪すぎる気が…）」

リボン

「さっき偶然メタナイトさんに会ったからお城に連れてってもらってるよ。しばらくポップスターに居るんだよ…！」

カービィ

「じゃあ、リボンちゃんもお城に泊めてもらうの？」

リボン

「私はカービィと一緒にいるよ！前みたいがいいでしょ？」

カービィの質問を聞くとリボンはニッコリ笑いながら言った。

カービィ

「え…？いいいよ！（やっぱり…ダークカービィたちの事を話さなきゃ…）」

カービィは、出来るだけ分かりやすくリボンに説明をした。

リボン

「（カービィ…。また狙われてるんだ…。でも、私も協力しなくちゃ！）」

カービィ

「だから、リボンちゃんを危険な目にあわせたくないし…」

リボン

「大丈夫だよ！私、カービィに助けてもらったから今度は私が協力するの！」

リボンは、ニッコリと笑いながら言った。

カービィ

「アハハ…（笑えるような状況じゃないんだけどね…）」

カービィは、苦笑しながら思った。

すると、後ろから謎の声が聞こえてきた。

????

「あらあら。ずいぶん楽しそうですね」

カービィとリボンが振り向くと、魔女の格好をした人が立っていた。

リボン

「カービィ、知ってる人…？」

カービィ

「いや…知らないけど…。この感じはダークカービィたちの仲間…
！！」

ドロシア

「フフフッ！よく分かりましたね。私は【ドロシア】。カービィ、
あなたを捕まえさせてもらいますよ…！」

そう言うと、ドロシアはカービィたちにゆっくりと近づいてきた…。

リボン

「カ、カービィ…！どうするの…？」

カービィ

「ど、どうするって言われても…！戦うしかないよ…！」

ドロシア

「さて、どうやって捕まえましょうか…」

しばらくするとドロシアは、空間に絵を書き始めた…。

カービィ

「えっ…？」

ドロシア

「フフ…。私は絵の魔女なんですよ」

ドロシアは、爆弾を次々に描いて攻撃してきた！

カービィ

「うわわ…！」

カービィは、慌ててジャンプして攻撃をかわした。

ドロシア

「フフ…。もう終わりですね」

カービィ

「えっ…！？」

ドロシアは、カービィに向かって爆弾を投げた！

ドロシア

「空中では、身動きが上手く取れませんよ！」

リボン

「カービィ、あぶない…！」

リボンは、カービィに向かって飛込んだ！

カービィ

「リ、リボンちゃん！？」

リボンはカービィをキャッチすると、すぐに爆弾をかわした。

ドロシア

「…。おいしいですね…」

カービィは、リボンに支えられながらゆっくりと着地した…。

カービィ

「リボンちゃん…。ありがとう…！」

リボン

「助けるのは当たり前だよ！」

ドロシア

「友情ですか…。しかし、そんなものでは私は倒せませんよ…」

ドロシアは、空間に次々と絵を描いていく…。

すると、メタナイトが駆け付けた。

お伴のソードナイトとブレードナイトも一緒だ。

ドロシア

「あらあら。賑やかになりましたね！」

カービィ

「メタナイト！どうしてここへ…？」

メタナイト

「リップルスターの女王様を案内していたら、何かが爆発する音が聞こえてな…」

ソードナイト

「それで来てみたら、カービィ殿が戦っていた訳です」

カービィ

「なら、話は早いや！リボンちゃんをお城に連れてって！」

リボン

「えっ！？」

リボンはびっくりした。

カービィ

「やっぱりリボンちゃんには危険すぎるよ！女王様と待ってて！」

リボン

「カ、カービィ…。うん…。分かった…」

リボンは、ちよつとさみしそうに返事をした。
カービィの事がよほど心配なのだろう…。

メタナイト

「ソード。後は頼むぞ」

ソードナイトは、うなずくとリボンを連れて行った。

ドロシア

「さて、話し合いはつきましか？」

メタナイト

「もちろんだ」

ドロシア

「まあ、たばになってもムダですがね！」

ドロシアは、不気味に笑った。

カービィ

「そんなことやってみなきゃ分かんないよ!!」

メタナイト

「その通りだ。ブレード、カービィに力を貸してやれ」

カービィ

「ブレードが…僕に力を…？」

ブレードナイトは、カービィに近づくと手を握った。

ブレードナイト

「私は、カービィ殿のコピー精霊になる。後のメタナイト様のお伴は、ソードナイトにまかせる」

カービィ

「ブ、ブレード…。ありがとう…!!」

カービィは、光りに包まれるとソードカービィに変身していた。

メタナイト

「さあ、行くぞ！」

カービィ

「うん!!」

ドロシア

「フフ…。星の戦士コンビですか…」

ドロシアは、魔法の絵筆から電気の玉をだしてきた!

カービィとメタナイトは、左右にかわした!

カービィ

「やあああ!!」

カービィは、ジャンプするとドロシアに斬りかかった!

しかし、ドロシアは魔法の絵筆で剣を受け止めてカービィを突き飛ばした!

カービィ

「うわっ!!」

カービィは、飛ばされると地面に倒れた。

メタナイト

「ハアッ!!」

メタナイトも、ドロシアに斬りかかった!

ドロシア

「フフッ!!」

ドロシアは、メタナイトの剣をフワツとかわした。

メタナイト

「な、何ッ!？」

ドロシア

「あなたの剣は伝説の剣ですからね。魔法の絵筆では受け止めると壊れてしまう可能性がありますからね。仕方なくかわしてあげたんですよ」

メタナイト

「な、なめるなよ!！」

メタナイトは、もう一度攻撃しようとした。

しかし、ドロシアは絵筆から電気の玉を放った!

メタナイト

「くっ……!」

メタナイトはかわそうとしたが、かわしきれずにドロシアの攻撃に当たってしまった!

メタナイト

「ぐわあ!！」

メタナイトは、吹き飛ばされると勢いよく倒れ込んだ。

カービィ

「メ、メタナイト!！」

カービィはメタナイトにかけよった。

ドロシア

「二人でもそれだけの力なんですか？」

カービィ

「よくもメタナイトを!!」

カービィは、ドロシアに向かって飛び出した。

ドロシア

「そっちが勝手にやられたんじゃないですか」

カービィ

「たああ!!」

カービィは、ドロシアに連続で剣を振った。

カービィ

「ソード百列斬り!!」

メタナイトは、ゆっくりと起き上がってカービィを見ていた…。

メタナイト

「カ、カービィ…!!」

ドロシア

「フッフ。さっきよりはマシになったようですね！友情の力というヤツでしょうか？」

すると、ドロシアは筆で剣を描き、手に持った…。

そして、カービィに襲いかかって来た！

カービィ

「うわああっ！！」

カービィは、ドロシアの攻撃を受けながらもドロシアに剣を振った。
すると、ドロシアの顔に傷が付いた…。

ドロシア

「よくも私の顔に傷を…」

カービィは、一瞬スキを見せたドロシアに一気に攻撃し始めた！

カービィ

「ソード百列斬りいッ！！」

カービィは、高速で剣を振り始めた！

だが、ドロシアは物凄いスピードでかわすとカービィに近づいた！

カービィ

「…うつ…！！」

カービィは、ドロシアに捕まれ、岩に押しつけられた…！

カービィ

「うつ…！くくう…！！」

ドロシアは、さらに強くカービィを岩に押しつけた。

すると、岩が耐えきれなくなり、割れてカービィは宙に浮いた！

ドロシア

「フフツ」

ドロシアは、笑いながらカービィを地面に叩き付けた！

すると、カービィは地面に転がって動かなくなった…。

ドロシアは、倒れたカービィをつかみあげると自分のマントにくるんだ。

メタナイト

「カ、カービィ…！」

ドロシア

「フフフ…！あまり動けない体で無理をするのはよくないですよ。それでは、カービィは頂いていきます」

ドロシアは、飛び去ろうとした。

しかし、飛ぼうとした瞬間にマントが破けた。

カービィ

「ま、まだまだ…！」

なんとか出てきたカービィだが、フラフラになっていた…。

ドロシア

「しつこい子ですね。素直に捕まってくればいいものを…。もう少し弱らせてから捕まえましょうか…」

すると、ドロシアのマントは再生され、元に戻った。

カービィ

「く…」

カービィは、剣を構えた。

ドロシア

「そんなフラフラではどうすることもできませんよ！」

カービィ

「（あきらめちゃダメだ…！）」

ドロシアは、カービィに連続で電気の玉を飛ばしてきた。

カービィ

「く…くう…！」

カービィは、なんとかかわしたが爆風で転んでしまった…。

カービィ

「ハア…ハア…」

ドロシア

「ついに息が切れはじめたようですね。あきらめたらどうですか？」

フラフラのカービィに倒れていたメタナイトが近寄ってきた。

メタナイト

「カ、カービィ…。逃げる…！」

メタナイトは、カービィに言ったが聞こうとしなかった…。

カービィ

「ダ、ダメだよ…。ここで逃げたらみんなが…それに…」

カービィは、自分の剣を見た。

カービィ

「僕には、仲間がいるから…！み、みんなの分まで…戦わなくちゃ…！…！」

メタナイトは、カービィの言葉を聞いて黙り込んでしまった。

メタナイト

「フ…（大人になったな…）」

ドロシア

「フフフ…！さすがにもう限界みたいですね」

ドロシアは、不気味に笑いながら近づいてきた。

カービィ

「ソ…ソードビーム…！」

メタナイト

「ソードビーム―！」

カービィとメタナイトは、剣を勢いよく振った。

すると、剣から三日月の形をしたビームが放たれた！

ドロシア

「な、何！？」

ソードビームは、ドロシアのほおを切り、髪の毛を少し切った。

カービィ

「…！か、かわされちゃった…」

カービィとメタナイトは、力を使い切ったのかガクツとひざをついた…。

ドロシア

「よくも髪の毛を切ってくれましたね…！しかも私ね大事な顔まで傷つけて…！！」

ドロシアは、少し声を強めて言った。

メタナイト

「（ここまで…か）」

カービィ

「ハア…ハア…！く…」

カービィは、力がないにもかかわらずドロシアに立ち向かおうとしていた。

ドロシア

「捕まえるつもりでしたが、もう怒りましたよ。とっておきの技で消してあげましょう」

ドロシアは、不気味に笑った…。

カービィは一体どうなってしまっのか…？
それは次のお話で…。

第16話

【カービィを狙う魔女】

おわり

第17話 強い絆

こんにちは♪

またまた登場してきたリボンです！！

カービィのコピー精霊の力を狙って絵の魔女「ドロシア」を送り込んで来たの…。

私は、お城をこっそりぬけだして戦いを見ていたんだけど、カービィが大変な事になっちゃった！

ドロシア

「さて、覚悟はできましたか？」

カービィ

「そ、そう簡単にはやられないよ…！」

カービィは、フラフラしながら答えた。

もはやカービィに戦う力は残っていない…。

ドロシア

「フフ。今からあなたを絵の材料にしてあげますよ」

ドロシアは、カービィに近づくと、近くにいたメタナイトを放り投げた。

メタナイト

「…く…！カービィ…！」

ドロシア

「良いピンクの材料になりそうですね」

ドロシアは、そう言いながら魔法の絵筆を取り出してカービィに触れた。

すると、カービィは筆の中に吸い込まれてしまった！

その瞬間、リボンの声が聞こえてきた！

リボン

「カ、カービィ…！！」

なんと、お城に行ったハズのリボンが見ていたのだ。
そして、カービィが吸い込まれるのを見て思わず飛び出してしまった。

ドロシア

「あらあら。この子も良いピンクになりそうですね」

ドロシアは、今度はリボンに近づいてきた…。

リボン

「えっ！？」

ドロシア

「フッフ！逃がしませんよ」

ドロシアは、リボンに筆を当てた。
すると、リボンも筆に吸い込まれてしまった！

メタナイト

「く…！なんという事だ…！」

ドロシア

「フフフ…！吸い込まれた人は、そのうちに絵の具になるのですよ」

メタナイト

「な、何ッ！？」

ドロシア

「フフツ！あなたもすぐに筆に入れてあげますよ！」

カービィは、吸い込まれてしばらく気を失っていた…。

カービィ

「…ん…！こ…ここは…？」

カービィは、真っ暗な空間に浮かんでいた…。

カービィ

「そつか…。僕、ドロシアの筆に吸い込まれて…」

すると、その時だった。

カービィは、目の前をリックやクー、そしてピッチがスライムのようなものに包まれて、奥の空間に吸い込まれて行くのを見たのである。

カービィ

「リック！クー！ピッチ！」

カービィは、みんなを追いかけて行こうとした。

しかし、カービィもピンクで半透明のしたスライムのようなものに包まれてしまった！

カービィ

「う…うわああ…！」

不思議な物に包まれたカービィは、身動きが取れなくなり、奥の方に吸い込まれて行った。

そして、気を失ってしまった…。

しばらくすると、カービィの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

????

「カービィ？カービィ！起きてよ！」

カービィ

「そ、その声は…シャドウカービィ…？」

シャドウカービィ

「うん！そうだよ…！」

【シャドウカービィ】とは、カービィの中にいるもう一人のカービィの事である。

夢の中でしか生きられないのだが、カービィをサポートしてくれることも。

体が灰色なので、ダークカービィと間違われやすいが心はキレイなカービィだ。

（詳しくは、第1シリーズを読んでください）

シャドウカービィ

「気がついてよかった…！ここはカービィの夢の中だよ」

カービィ

「また会えたね…！でも、これが最後なのかもね…」

カービィは、さみしそうに言った…。

シャドウカービィ

「ダメだよ、あきらめちゃ…！」

シャドウカービィは、カービィを励ましはじめた。

シャドウカービィ

「大切な友達がたくさん絵の具にされちゃうんだよ！僕の最初の友達になってくれたのだってカービィじゃないか…！」

カービィは、シャドウカービィの一生懸命な説得に驚いた。

シャドウカービィ

「僕、カービィがいなくなったら嫌だよ…！一番大切な友達だもん…！」

カービィ

「シャドウカービィ…（そうだ…。絶対にあきらめちゃダメだ…！仲間たちを助けなくちゃ！）」

カービィは、立ち上がった。

シャドウカービィ

「そうこなくっちゃ！」

シャドウカービィは、ニツコリと笑った。

すると、目の前が白くなってきた…。

シャドウカービィ

「そろそろお別れだね…。絶対にまた会おうね！」

カービィ

「もちろん…！」

カービィとシャドウカービィは、しっかりと握手をした。

そして、目の前が真っ白になるとカービィは、夢から覚めていた…。

カービィ

「でも、どうすればいいんだろ…。身動きはとれないし…」

すると、カービィと同じようにスライムのような物に包まれているリボンを見つけた。

カービィ

「リ、リボンちゃん!!」

カービィは、リボンに必死に呼びかけた!

カービィ

「リボンちゃん!起きて!リボンちゃん!!」

すると、リボンはゆっくりと目を開けた…。

リボン

「う…う…ん…!カ、カービィ…?」

カービィ

「よかった…!気がついたんだね!」

リボン

「バカバカツ!!無理ばかりして…!私、ずっと見てたんだから…!」

リボンは、泣きながらカービィに言った。

カービィ

「リ、リボンちゃん…」

リボン

「前の戦いの時だって、私を助けようとして無茶ばかり…!私、カービィがいなくなったら嫌だよ!!」

すると、カービィとリボンの体を包んでいた物が合体して一つにな

った。

そして、その中で二人は手を握りあつた。

カービィ

「ゴメンね…。じゃあ、約束するから…」

リボン

「うん…！」

カービィ & amp ; リボン

「これからもずっと一緒だよ…！」

カービィとリボンは、眩い光に包まれた！

その光は、みるみる広がり、暗い空間を少しずつ明るくしていった。

それと同じころ、ドロシアの筆には異変が起きていた…。

筆先から激しい光が飛び出し、筆に少しずつヒビが入り始めたのだ！

ドロシア

「な、なんですか！？これは…！？」

すると、ついに筆が砕け散ってしまった！

そして、その中からカービィとリボンが手を握った状態で現れた。

ドロシア

「そんなバカな…！あなたたちは筆に吸い込まれて絵の具にしてあげたハズ…！！」

ドロシアは、驚きながら言った。

カービィ

「僕だって吸い込まれた時はもうダメだと思ったよ」

リボン

「でも、体は絵の具にされたって私たちの気持ちまでは変えられないよ――！」

すると、絵の具にされた人たちが次々に壊れた筆の中から出てきた。

リック

「そう、リボンちゃんの言う通りだぜ――！」

クー

「オレたちは、いつでもカービィを信じてるからな――！」

ドロシア

「しつこい人たちですね――！！もう手加減はしませんよ！覚悟しなさい――！」

さすがのドロシアも怒ったのか、声を荒くしながら言った。

リボン

「でも、カービィ……どうしよう？このままじゃさっきみたいにやられちゃうんじゃない――！」

リボンは、心配そうに言った……。

しかし、カービィはいつものようにニコツと笑いながら答えた。

カービィ

「大丈夫！あいつにはもう絵筆は無いんだよ。それに…僕にはみんながいるから！！」

ドロシア

「友情なんて小さな力でこの私が倒せるとでも思ってるんですか？」

ドロシアは、クスツと笑った。

カービィ

「もちろん！！」

ドロシア

「うるさいですね。さっさと消しますよ！」

ドロシアは、電気の玉を出してきた！

カービィは、素早くかわすとリックに近寄った。

カービィ

「リック！合体しよ！！」

リック

「よっしゃ！！いよいよ出番だな！！」

カービィは、リックの背中に乗った。

それを見たドロシアは、クスクスと笑い出した。

ドロシア

「フフフ…!!そのどこが合体なんですか?バカにするのもいい加減にしてほしいですね」

ドロシアは、また電気の玉を出してきた。

すると、リックはそれを吸い込み始めた!

ドロシア

「な、なんですか!?吸い込みは、カービィにしかできないハズ…!」

リックは、電気の玉を飲み込んだ!

リック&カービィ

「スパークコピー完了ッ!!」

すると、リックはドロシアに向かって飛び出した!

ドロシア

「な、生意気なマネを…!でもその程度の能力では、私に傷すらつけられませんよ…!」

リック

「そんなのやってみなきゃ分かんないさ!くらえーッ!!」

リックは、手からムチのようなビームを放った!

ドロシアは、かわさずに受け止めようとした。

しかし、触れた瞬間にドロシアは悲鳴をあげた！

ドロシア

「きゃあああ！ー！！」

ドロシアは、地面に倒れ込んだ。

カービィ

「（チャンスは今しかない！）リック、お願い！僕を投げてー！！」

リック

「了解だぜー！！」

リックは、ドロシアに向かってカービィを投げ飛ばした！

カービィ

「（ブレード……！お願い！力を貸してー！！）」

ブレードナイト

「（もちろんですー！！）」

カービィは、コピー精霊ブレードナイトの力でソードをコピーした！

カービィ

「てやあーッー！！」

カービィは、ドロシアに斬りかかろうとした。
しかし、ドロシアはいきなり立ち上がった！

ドロシア

「フフッ！かかりましたね！！」

ドロシアは、まっすぐ飛んで来るカービィに電気の玉を放った！

カービィ

「く、くっ…！！」

カービィは、なんとか剣で受け止め、体勢を立て直した。

ドロシア

「ほう…やりますねえ。しかし奇跡はもう起こりませんよ！！」

ドロシアは、パワーを溜めはじめた！

カービィ

「…！（あ、あんな攻撃されたら後ろにある村が…！！）」

慌てるカービィに、ファイアのコピー精霊バーニンレオが話しかけてきた。

バーニンレオ

「カービィ、オレの力を貸してやるよ！！受け取りな！！」

カービィ

「ええッ！？ダブルコピーなんてムリだよ！！」

しかし、バーニンレオの力はカービィではなく、持っていた剣に注がれた。

メタナイト

「あの能力は…！」

ドロシア

「な、なんですか！？あのコピー能力は！？」

カービィの剣は、なんと炎の剣になっていた。

カービィ

「（バーニンレオの力が剣に…！）」

カービィ自身も驚いていた。

すると、そんなカービィにバーニンレオの声が聞こえてきた。

バーニンレオ

「さ、早いとこあいつを倒しちまおうぜ…！」

カービィ

「…うん…！」

カービィは、再びドロシアに剣を構えた。

ドロシア

「そんなことしても無駄ですよ！消えなさい…！」

ドロシアは、溜めたパワーで巨大な電気の玉を放った！

カービィ

「やあああ…！」

カービィは、せまってくる電気の玉に向かって剣を振った。

すると、電気の玉は縦に半分に分れた！

ドロシア

「そ、そんなバカな…！！」

よく見ると、カービイがいないことに気がついた。

ドロシア

「一体どこに…！！？」

すると、上からカービイの声が聞こえてきた。

カービイ

「たああーッ…！！」

ドロシア

「い、いつの間に…！！」

カービイは、縦に回転してドロシアを斬りつけた！

カービイ

「スピニングソードッ…！！」

ドロシア

「きゃあああッ…！！」

ドロシアは、斬りつけられた部分から煙のようになくなっていった…。

ドロシア

「こ、この私がああ……!!」

カービィ

「ふう……」

カービィは、大きなため息をついた。

すると、同時にカービィからコピー精霊の能力が抜けた。

メタナイト

「（同時に二つの能力をあやつるとは……。成長したな……!）」

リボン

「カービィ……大丈夫!？」

リボンは、カービィに抱きついた。

カービィ

「大丈夫だよ!ありがとう!!」

カービィとリボンは、リックたちの所に行こうとした。すると、横から黒い三日月のビームが飛んできた!

カービィ

「リ、リボンちゃん!あぶない!!」

カービィは、リボンをかばう形でビームに当たった……。

カービィ

「うわああー!!……!!」

カービィは、地面に倒れた…。

リボン

「カ、カービィ…！しっかりして…！」

リボンは、必死に呼び掛けたがカービィはぐったりして動かない…。すると、ダークメタナイトが立っていた。

ダークメタナイト

「フフ…。この時を待っていたよ。カービィが戦いで疲れ果てた時をね…！」

ダークメタナイトは、カービィに近づいた。そして、近くにいたリボンをリックたちの方にはじき飛ばした。

リボン

「きゃあっ！」

リボンは、勢いよく地面をこすりながらリックの所まで転がった。

カービィ

「リ…リボン…ちゃん…！」

リックたちは、すぐにリボンにかけよった。

リック

「リ、リボンちゃん、大丈夫か？」

リボン

「う…うん…。いたた…！」

リボンは、立ち上がってカービィを見た。すると、カービィはぐったりしたままダークメタナイトにつかまれていた。

ダークメタナイト

「カービィは、もらって行くぞ…。次にカービィに会う時は、もう星の戦士では無くなっているだろうがな！フッフ！」

リボン

「カ、カービィ…ッ…！」

ダークメタナイトは、カービィをつかんだまま闇の空間に消えていった…。

そして、ププランドにはリボンの叫び声だけが響き渡っていた…。

はたしてカービィはどうなってしまうのか！？

第17話【強い絆】おわり

第18話 負けない心

フフフ…。

私はダークメタナイトだ。

遂に油断していたカービィを捕らえて、ダーク化の始まりだ…。

遂に私たちがカービィのコピー精霊の力を手に入れる事が出来るのだ！

だが、カービィはなかなかダーク化されない…。

大人しくダーク化されればいいものを…。

鏡の国…。

鏡の国は、以前来た時と様子がずいぶん変わっていた。

明るかった建物は黒くなり、日の差し込んでいた窓は薄暗くなっていた…。

ダークメタナイト

「フフフ…。カービィを捕らえて参りました」

ボス

「クク…。よくやったぞ。これでダークカービィもさらなる力を手にする事ができる…！」

鏡の国に連れていかれたカービィは、眠らされていた…。

ダークカービィは、カービィに近づいた。

ダークカービィ

「カービィの心に入り込んで、体ごともらえばいいんだよね？」

ボス

「フフフ…。その通りだ。さあ、やってみるがいい！」

ダークカービィ

「はい…！」

ダークカービィは、クスクス笑いながらカービィに触った…。

ダークカービィ

「じゃあね！君の体は僕がもらってあげるよ…！」

ダークカービィは、カービィの体に入り込もうとした。
しかし、ダークカービィはすぐに弾かれてしまった…。

ダークカービィ

「く…！は、弾き返された！？」

ボス

「ほう…。カービィが自らの意志で拒んでいるようだ…。よほど強い心を持っているようだ…。しかし、それもムダな事だ…！心をダーク化してしまえば簡単なのだから…！」

すると、暗闇の中からカービィの体と同じくらいの大きさの手が現

れた。

そして、その手から黒い邪悪なエネルギーがカービィに向かって出された。

ボス

「ククク…!!」

敵のボスは、不気味に笑いながら邪悪なエネルギーをカービィに流し続けた。

しばらくすると、カービィが急に苦しみはじめた！

カービィ

「う、うわああ!!」

ダークメタナイト

「カービィの心が少しずつダーク化されはじめた証拠だな…」

カービィは、さらに激しく苦しみはじめた…。

カービィ

「わああ!!!!うう…!!うわああ…!!!!」

ボス

「ククク…!!大人しくダーク化され、ダークカービィに体を渡すのだ!苦しみが無くなった時、お前は闇の戦士になっているだろう…!!」

カービィ

「く、くああ…！（ま、負けて…たまる…か…！）」

カービィは、フラフラしながら立ち上がると鏡の国の入り口に向かいはじめた。

ボス

「無駄なことを…。すぐに捕まえろ」

ダークメタナイト

「分かりました」

ダークメタナイトは、カービィを気絶させようと、剣で斬りつけようとした。

しかし、カービィは素早くかわすとダークメタナイトを蹴り飛ばした！

ダークメタナイト

「く…！！な、なんだあの力は！？」

よく見ると、カービィの瞳の色が赤色になっていた…。

カービィ

「ハア…ハア…！」

ボス

「ほう…。めずらしく完全に心をダーク化することが出来ないらしいな…。しかし、体はどうか？フッフ…！」

カービィは、苦しそうに胸を押さえながら逃げて行った…。

そのころ…

リボンはカービィの家のベッドで眠っていた…。

そして、コピー精霊たちが心配そうに見つめていた。

ワドルディ

「なかなか起きないっスね…」

バードン

「昨日かなり遅くまで泣いてたから仕方ないわよ…。リボンちゃん、カービィが連れて行かれたのは自分のせいだと思ってるらしくて…」

チリー

「なんだかわいそうだね…」

コピー精霊たちが話をしていると、リックがやってきた。

リック

「みんな、メタナイトが呼んでるから一緒に来てくれないか？リボンちゃんはオレがおぶって行くから…」

リボンは、本当に泣き疲れているのだろつ。リックがおぶってお城についても眠ったままだった…。

そして、ようやくリボンが目を覚ました…。

バードン

「リボンちゃん、大丈夫？」

リボン

「…うん…」

リボンは、うつむいたままさみしそうに返事をした…。

リック

「リボンちゃん…。元気だしなよ…」

リボン

「…う…うん…。でも…私のせいでカービィが…」

リボンの目から大粒の涙があふれはじめた…。

メタナイト

「いや…そんなことはない。元々敵はカービィだけを狙っていた…」

すると、疑問に思ったリックが話に入ってきた。

リック

「でも、どうしてカービィを連れ去ったんだ…？」

メタナイト

「それは、恐らくバードンたちが狙いだろっ」

バードン

「…や、やっぱり…」

メタナイト

「敵は、コピー精霊の力を欲しがっている。しかし、コピー精霊の力は絆の深い「カービィ」にしか使う事ができないのだ。恐らく、ダークカービィに新たな力を与えるためだろう…」

リボンは、またうつむいて泣き出してしまった…。

リボン

「カ…カービィ…!!」

そんなリボンを見たリックは、リボンの肩をポンツとたたした。

リック

「泣いてるだけじゃ何もはじまらないぜ？元氣だしな！」

リボン

「リ、リックウー…!!」

リボンは、リックの顔を見た…。

すると、リックの目から一粒の涙がこぼれた…。

リック

「おっと…。いけねえな…」

リックは、カービィの大親友だ。

リックもかなりのショックを受け、一晩中寝る事ができなかったのだ。

リック

「へへっ…！カービィが今そばにいてくれたら…どっいう風に励ましてくれんのかな…」

リックは、独り言のように言った…。

カービィ

「リボンちゃん！そんなに心配しなくても大丈夫だよ！頑張れ、リボンちゃん！！」

カービィの声がリボンの頭の中を流れていくような気がした。

すると、近くで何かが爆発するような音が聞こえた！

リック

「な、何の音だ…？」

メタナイト

「外からだな…。行くぞ！！」

リボンたちは、お城を飛び出して外に出た。すると、中庭にカービィが立っていた…。

リック

「カ、カービィ…！」

リックは、カービィに近づいていった。すると、カービィはリックを突き飛ばした！

リック

「わぁっ！！」

リックは、突き飛ばされると、お城の壁に勢いよく突っ込んだ！

リック

「いててて…！いきなり何すんだ！？」

カービィは、黙ったままりボンたちを見つめていた…。そして、カービィの体が少し黒く点滅した…。

メタナイト

「…！あ、あいつ…！ダーク化されている…！！」

リボン

「そ、そんな…！」

カービィは、メタナイトに向かって飛び出した！

メタナイト

「くっ…！」

メタナイトは、剣を構えた。

しかし、カービィはメタナイトの目の前で止まった…。

カービィ

「み…みんな…！逃げ…て…！もう体が言う事を…！」

すると、ダークカービィとダークメタナイトが現れた！

ダークカービィ

「やっと見つけたよ！」

ダークメタナイト

「もう逃がさんぞ…！」

ダークメタナイトは、剣を抜くとエネルギーを溜めはじめた。

ダークメタナイト

「一発のソードビームで動けなくなるような傷を負わせてやるぞ…！」

リボン

「カ、カービィ…！！」

リボンは、カービィに向かって飛び出した！

カービィ

「リ、リボンちゃん…！早く…逃げて！僕はもう…ダメなんだから…」

カービィは、苦しそうに言った…。

カービィは、リボンが大人しく逃げてくれると思った。

しかし、リボンはニッコリ笑うとカービィめがけてジャンプをした。

リボン

「カービィってホントに私がいないとダメなんだから…。カービィの心は全然ダメなんかじゃないよ…！」

リボンは、カービィに抱きついた。

リボン

「忘れちゃダメー!!カービィは、一人じゃないんだよ!ずっとずっとカービィのそばにいて...ずっと支えていつてあげる...!!」

カービィ

「リ、リボン...ちゃん...!」

すると、カービィの体がほんのり白く輝きはじめた...

カービィ

「(そうだ...!僕には...一緒に戦ってくれる仲間たちがたくさんいるんだ!)」

ダークメタナイト

「く...!ジャマをするな!!ソードビーム!!」

ダークメタナイトは、剣から三日月のビームを放った!

しかし、カービィの不思議な輝きで消え去ってしまった。

ダークメタナイト

「な、なんだと!?!一体どうなっているんだ!?!」

しばらくすると、光りの中からカービィがリボンを抱えて飛び出してきた!

そして、メタナイトたちのところに着地した。

リック

「カ、カービィ!もう大丈夫なのか?」

カービィ

「もちろん!!」

心配するリックに、カービィは元気よく返事をした。

ダークカービィ

「ど、どうして元に戻ってるの!? 完璧に闇の力はカービィにとりついたハズなのに…!」

ダークカービィは、少しパニック状態になってしまったのか、焦りはじめた。

ダークメタナイト

「フン…。慌てることはないさ…。カービィにもう一度闇に染まってもらえばよいのだから…」

ダークカービィ

「あ、そっか!」

カービィは、みんなより一歩前に飛び出した。

カービィ

「やれるもんならやってみなよ!!」

ダークメタナイトとダークカービィは、不気味な呪文のような物を唱えはじめた…。

そして、カービィに黒いけむりのような物を放った!

ダークメタナイト

「ククク…！もう一度悪に染まるがいい！」

しかし、黒いけむりはカービィを数秒間包むと消えてしまった…。

ダークメタナイト

「な、何っ！？」

ダークカービィ

「そ、そんな…！！」

カービィ

「もうその手はくらわないよ！それに僕は、闇の力よりももっと強い力を知ってるもん！！」

ダークカービィ

「闇の力よりも強い力なんて存在しないよ…！」

ダークメタナイト

「その通りだ」

すると、カービィはコピー精霊「ブレードナイト」の力を借りてソードをコピーした！

カービィ

「じゃあ今から教えてあげるよ…！」

メタナイト

「私からも教えてやろう」

メタナイトも剣を構えた。

カービィとメタナイトは、自分の闇の心と真剣に向き合った。
星の戦士と闇の戦士の戦いが今始まる…！

第18話

【負けない心】おわり

第19話 自分との戦い

やつほゝ

私、リボンだよ！

カービィは、なんとか自分の体に染みついた闇の力を追い払う事に成功したの！

あとは、目の前にいるダークカービィを倒すだけだね！

ダークカービィ

「じゃあそろそろ始めようか？」

ダークカービィは、壊れたお城の中にあつた剣を吸い込んでコピーした。

カービィ

「いつでもいいよ！！」

カービィもダークカービィも自信に満ちあふれた顔をしていた。

すると、ダークカービィは剣を構えるとカービィに向かって走ってきた。

ダークカービィは、カービィに向かって剣を振ってきたが、カービィはひらりとかわすとダークカービィを蹴り飛ばした！

蹴られたダークカービィは、着地するとカービィの方に振り返った。

ダークカービィ

「良いのかな？はさみうちになっちゃうよ？」

ダークカービィは、クスクスと笑った。

それもそうである。カービィの後ろには、ダークメタナイトがいるからだ。

しかし、メタナイトがカービィと背中をあわせる状態でダークメタナイトと向き合った。

カービィ

「僕は、ダークカービィの方を倒すよ！メタナイトはダークメタナイトをお願いね！！」

メタナイト

「ああ。任せておけ。気をつけるんだぞ！！」

カービィ

「うん！メタナイトもね！！」

カービィは、そう言つとメタナイトと剣をガチツと合わせた。

すると、少し火花が散った。

メタナイト

「フ…！行くぞ！！」

カービィとメタナイトは、一斉に飛び出した！

カービィは、ダークカービィに連続で剣を振った！

カービィ

「ソード百列斬り！！」

ダークカービィ

「おっと！」

ダークカービィは、後ろに宙返りをしてかわした。
そして、剣を前に突き出して突っ込んできた！

ダークカービィ

「ダッシュ斬り！！」

ダークカービィの剣がカービィに当たったかと思われた。
しかし、カービィの姿はなかった…。

ダークカービィ

「えっ！？」

すると、ダークカービィの後ろからカービィの声が聞こえてきた。

カービィ

「スピニングソードッ！！」

カービィは、空中で縦に回転しながらダークカービィに斬りかかった！

ダークカービィ

「くっ…！！」

ダークカービィは、自分の剣でカービィの攻撃を受け止めた！
すると、剣のぶつかりあう音が辺りに響き渡った。

ダークカービィ

「（今までのカービィじゃない…！！スピードもパワーも確実に上がってる…！）」

ダークカービィは、成長したカービィに少し驚いていた…。

メタナイトとダークメタナイトは、目にも止まらぬ速さで走りまわっていた。

ダークメタナイト

「ほう…。私のスピードについてこれれるとはな…」

メタナイト

「もちろんだ！ハアツ…！」

メタナイトは、走りながらダークメタナイトに剣を振った！

ダークメタナイトは、ジャンプをしてかわすとそのまま斬りかかった！

ダークメタナイト

「てやあっ…！」

メタナイトは、剣で攻撃を受け止めると、宙に浮かんだダークメタナイトをそのままはじき返した。

ダークメタナイト

「まさか受け止められるとはな……」

すると、メタナイトはダークメタナイトに向かって剣から三日月のビームを放った。

メタナイト

「ソードビーム……！」

ダークメタナイト

「ならばこちらもだ！ソードビーム……！」

ダークメタナイトも三日月のビームを放った！

二つのビームは、ぶつかりあうとダークメタナイトのビームが消えてしまった！

ダークメタナイト

「な、なにっ……！」

そして、かわしきれずに腕をかすっていった。

ダークメタナイト

「な、なぜだ……？」

メタナイト

「フ……。私もカービィに負けないように密かに特訓をしていたからな」

カービィたちの戦いは、とても激しくて中庭だけでなくお城全体が

危なくなっていた。

リボンたちは、離れた場所から戦いを見ていたが、あまりにも危険なので避難することになった。

リック

「リボンちゃん、急ぐぞ！！お城の人たちも避難させないと！」

リボン

「うん…。(カービィ…無事に帰ってきてね…！)」

リボンは、カービィを見つめるとリックとその場を離れていった。

カービィ

「やああーッ！」

ダークカービィ

「まだまだーッー！！」

カービィとダークカービィは、激しくぶつかりあった！

辺りには剣がぶつかりあう金属音が響き渡った！

そして、カービィとダークカービィはぶつかりあった反動で後ろへ飛ばされた。

カービィ

「く…！」

ダークカービィ

「はあ…はあ…！」

カービィとダークカービィは、激しい戦いで少しフラフラになって

いた。

ダークカービィ

「ダ、ダークスター!!」

ダークカービィは、空に向かって叫ぶと、黒いワープスターが飛んできた。

そして、ダークカービィは、ダークスターに乗ってお城の中に入って行った。

カービィ

「それならこっちだって！ワープスターッ!!」

カービィが叫ぶと、ワープスターが飛んできた。

カービィもワープスターに飛び乗ると、ダークカービィを追いかけて飛んで行った。

カービィ

「あ、あれ…？どこ行っただろ？見失っちゃった…」

カービィが、スピードを遅くして飛んでいるその時だった…。なんと後ろから強烈な炎の玉が飛んできた！

カービィ

「…!!」

カービィは、とっさに剣を振って炎の玉を弾きとばした！

弾きとばした玉はお城の壁を貫通して行った…。

カービィ

「あ、あちゃ…。またデデデに怒られるや…」

カービィは、苦笑しながら言った…。

ちなみに【デデデ】とは【一応】ププランドをおさめている大王である。

ダークカービィ

「よそ見はいけないよ…！」

そう言うときダークカービィは、炎を放った！

カービィ

「あわわ…！」

カービィは、ワープスターから降りた。

ワープスターは、そのまま外に出て行ったが、カービィは近くの部屋に飛込んだ。

ダークカービィ

「あらら。自分から狭い部屋に飛込んでくれるなんてね！」

ダークカービィは、クスツと笑うときダークスターから降りて部屋に入った…。

部屋の中は机やイス、棚などがあつたがカービィの姿は見えなかった。

ダークカービィ

「…もう逃げちゃったのかな…？」

ダークカービィは、部屋から出て行った…。

カービィ

「……はあゝ！助かったあ…。シャンドリアに上手く隠れられてよかったよ…」

カービィが一息ついていると、ドアが赤く膨み始めた…。

カービィ

「な、なんだろ…？（アハハ…ま、まさか…）」

カービィは、苦笑いをした…。

すると、ドアを突き破って炎が飛んできた！

カービィ

「わわわッ！…！」

カービィは、シャンドリアと一緒に下に落ちた。

ダークカービィ

「フフ…！僕が分からないとも思っただの？」

ダークカービィは、しりもちをついたカービィにゆっくり歩いてきた…。

カービィ

「あわわ…！ど、どうしょ…」（あの強力な炎に対抗できるものは…うーんと…！）」

カービィは、かなり焦っているのなかなか考えが出てこない…。

すると、コピー精霊のバーニンレオの声が頭に聞こえてきた。

バーニンレオ

「おいおい…。なに焦ってんだよ？お前にはオレたちがついてんだぜ？」

カービィ

「バ、バーニンレオ…！（…よし！いちかばちか！）」

カービィは、光りに包まれるとファイア的能力をコピーした状態になった。

ダークカービィ

「この前の時の力の差を忘れたの？」

ダークカービィは、口から勢いよく炎を放った！

カービィ

「ファイア…！！」

カービィも、口から勢いよく炎を放った！

互いに放たれた炎は、激しくぶつかりあった！

ダークカービィ

「さあ、終わりにしてあげるよ!!」

カービィ

「く、くう…!!」

カービィは、少しずつ押されていた…。

バーニンレオ

「カービィ、今はガマンだ!」

カービィ

「う…うん…!!」

すると、炎はカービィの目の前までせまってきた。

ダークカービィ

「バイバーイ♪」

ダークカービィは、一瞬スキを見せた。

そして、バーニンレオはそれを見逃さなかった。

バーニンレオ

「今だ、カービィ!!フルパワーで反撃だ!」

カービィ

「いつけえーッ!!」

カービィは、力を込めて、強烈な炎を放った!

ダークカービィ

「な、何！？う…うわああー！！！」

ダークカービィは、カービィの強烈な炎に包まれた！
そして、炎はお城の壁を突き抜けて行ってしまった…。

カービィ

「はあ…はあ…。はあ…」

カービィは、その場に倒れ込んでしまった…。そして、コピー能力も抜けてしまった…。

バーニンレオ

「お、おい！オレの力が抜けちゃったぜ！一体どうしたんだ！？」

カービィ

「だ、大丈夫…！ちょっと疲れただけだから…」

バーニンレオ

「（か、かなり無茶させちゃったからな…。それにしても大したヤツだぜ…）」

そのころ、メタナイトたちも決着がつこうとしていた。

ダークメタナイトは、腕をかすれたソードビームにより、押されていた。

メタナイト

「そろそろ終わりのようだな」

メタナイトは、ダークメタナイトに向かって剣を構えた。

ダークメタナイト

「フ…フフフ…!!」

ダークメタナイトは、不気味に笑い始めた。すると、急に高速で走り始めた!

ダークメタナイト

「フフフ…!一発でしとめてやろっ!お前にはこの私を見る事は出来まい!」

すると、メタナイトは目を閉じて動かなくなった…。

メタナイト

「(見えない…?見えないのであれば…感じ取る…!!)」

ダークメタナイト

「終わりだ!!」

物凄いスピードで走っていたダークメタナイトは、そのままメタナイトに向かって剣を振った!

激しい衝撃が辺りに走り、メタナイトはダークメタナイトにやられたと誰もが思った。

しかし、メタナイトはダークメタナイトの剣を片手で受け止めていた!

ダークメタナイト

「キ、キサマ!!」

メタナイト

「キサマの負けだ!!」

メタナイトは、ダークメタナイトに剣を振った!

そして、ダークメタナイトはその場に倒れた…。

ダークメタナイト

「な、なぜだ…? 私たち闇の戦士は、お前たち闇の心と戦う時の闘争心から生まれた…。それなのになぜ勝てない…?」

カービィ

「そ、それは…僕たちにはかけがえない仲間がいるからだよ…!」

ダークメタナイトの質問に答えたのは、なんとカービィだった。

しかし、カービィは実に苦しそうだ。

カービィは、助けにきたリボンに支えられながら宙に浮いていた。そして、その手にはダークカービィが抱えられていた。

カービィは、ダークカービィをゆっくりおろした。

ダークカービィ

「ど、どうして僕を助けるの…? もう消えちゃうのに…」

カービィ

「消えちゃうからだよ…。僕が強くなれたのだって…君がいたから…。だから、お別れくらいしたって…!」

ダークカービィ

「本当に…君って優しすぎるよ…」

ダークカービィは、そう一言だけ言つとダークメタナイトと一緒に消えてしまった…。

そして持っていたと思われる鏡の破片だけが残った…。

リボン

「あの二人は死んじゃったの…？」

メタナイト

「いや…。恐らく私たちの心の中に戻ったのだ。私たちは、自分の闇は完全に消す事はできないのだ」

カービィ

「そう…。クーが前に教えてくれたように、人は良い心も悪い心も持っているから…」

カービィは、リボンに支えられながら鏡を拾った。

カービィ

「（あと一つ…。でも、どこにあるんだろ…）」

カービィたちは、自分の闇の心を眠らせる事に成功した…。

そして、鏡の破片は残りあと一つ…。

鏡の国とポップスターに平和が戻る時は近い…かもしれない。

第19話

【自分との戦い】おわり

第20話 壊れた心を持つ天使

やっほー!!

僕、カービィ。

やっとダークカービィを倒して一件落着!!

でも、ダークカービィがいたから強くなれたんだよね…。

でも、そんなにゆっくりもしてられないよ!

ワドルディたちが居なくなつて伝説のコピー精霊が現れたんだ!

でもなんだかようすが変なんだよね…。

カービィは、疲れきつた体を休めるために二日間寝込んだ…。

そして、その間ポップスターには何も起きていない…。誰もがそう思っていた…。

しかし、デデデ城の地下で異変は少しずつ起こっていた…。

デデデ城の地下に謎の少女の声が響き渡るようになったのだ。

???

「暗いよ…。寂しいよ…。私の友達を…返して…!!」

すると、お城の真ん中辺りから地震のように激しく揺れはじめた!

メタナイト

「な、何事だ…!?!」

女王様

「す、凄い揺れです!」

リップルスターから来ている女王様も激しい揺れにびっくりしていた。

????

「私の大事な友達…。それを奪ったカービィを……許さない……!!」
しばらくすると、地震はおさまった…。

メタナイト

「強力な力を感じたが…一体…?」

そのころカービィは、リボンと朝ご飯を食べている途中だった。

リボン

「本当にもう大丈夫なの?」

カービィ

「うん!ゴメンね、心配かけちゃって…」

リボン

「カービィが謝らなくなっちゃっていいじゃん!カービィが元気になったならそれでいいよ!」

カービィとリボンは、朝ご飯を食べ終わると外に出た。

すると、クーとピッチが物凄いスピードで飛んで来た！

クー

「カ、カービィ！！」

見るからにクーとピッチの顔は必死だ。

カービィ

「どうしたの？そんなに慌てて…」

カービィとリボンは、キョトンとした顔で質問した…。

クーとピッチは、息をきらせている。

クー

「ハア…ハア…！お前…。今デデデ城で不思議な現象が起きてるの
を知らないのか！？」

リボン

「不思議な現象…？」

カービィ

「知らないよ……。ずっと寝込んでたから…」

ピッチ

「よく分からないけど、ここ二日間ずっと地震がデデデ城だけで起きてるらしいんだ」

カービィ & a m p …リボン

「え…ええゝ!？」

カービィとリボン、びっくりして聞き返した。

リボン

「何それ!? デデデ城って呪われてるとか、七不思議とかあるの？」

クー

「いや…。オレは聞いた事無いけどな…」

カービィ

「僕も…。でも、気になるから行ってみよっか? 女王様とかも心配だし…」

リボン

「そうだね…。でもちょっと怖いな…」

カービィたちは、とりあえずデデデ城に向かって歩き始めた。

そして、しばらく歩いているとカービィの頭に不思議な声が響き渡った。

???

【私の…私の友達を返して…!】

カービィ

「えっ…!？」

カービィは、立ち止まって辺りを見回した。しかし、周りにはリボンたち以外に人は居なかった…。

クー

「カービィ？どうかしたのか？」

クーは、急に止まったカービィが心配になって聞いた。

カービィ

「うん…。なんでもないよ！」

カービィは、笑って答えたが、自分にもよく分からなかった。

カービィたちはデデデ城に着いた。

デデデ城は、この前の戦いでボロボロになってしまったので、所々で修理をしていた。

カービィ

「…このせいで揺れるんじゃないの…？」

カービィは、壊れているお城を見ながら言った。

クー

「あ、ああ…。オレも今同じ事を考えてたところだ…」

ただ啞然とお城を見ると、青くて太ったペンギンのような姿をした人が現れた。

そう、お城は登場しているのに本人が出てくるのは今回が初めてという不運な【デデデ大王】である。

デデデ大王

「キサマが出さなかったんだろーが!!」

春風（作者）

「す、すいません…。出すタイミングがなかったから…」

デデデ大王

「まあ…それなら仕方がないか。物語に戻ろう」

カービィ

「で、急にどうしたの？」

デデデ大王

「この城で謎の地震が起きているのは知ってるだろ？壊したのが原因ならカービィが悪いという事になるんだがな…!」

デデデは、カービィにハンマーを構えた。

カービィ

「ア、ハハハ…。ってうわああーッ!!」

カービィは、走って逃げ始めた。

そして、それを追いかけてデデデも走り出した。

デデデ大王

「責任もってオレ様の城を直せーッ!!」

リボン

「大丈夫なの…?」

クー

「…え？いつもこんな感じだし、まあ大丈夫かな…」

リボン& amp・ピッチ

「ええ…」

リボンとピッチは苦笑いしながら追いかけてくを見ていた…。

そんなやりとりを見ていると、メタナイトがやってきた。

メタナイト

「地震の原因は、カービィが城を壊したからではありません」

デデデ大王

「な、なにッ！？」

メタナイトの言葉にみんなは驚いた。

クー

「じゃあ一体何が原因なんだよ…？」

メタナイト

「今はまだ分からんが、どうも城の地下に巨大な力を持つ何かがいるらしい…」

カービィ

「巨大な力…？」

カービィたちは、首を傾げた。

すると、メタナイトはみんなを連れて地下に向かった。
しかし、何故かデデデ大王の姿だけはなかった…。

クー

「で、なんでデデデだけは来ないんだよ？」

ピッチ

「どうも怖いらしいよ…！」

リボン

「へえ…。ちょっと意外だね…」

そんな話をしながら歩いていると、お城の地下に着いた。
電気がついていていつもと変わりはない…。

カービィ

「僕、地下にくるなんて初めてだよ…」

メタナイト

「最近はあまり来なかったが…変わった所は無さそうだな…」

クー

「メタナイトが言うんだから問題はないみたいだな。とりあえず不
気味だから早く出ようぜ！」

カービィたちは、地下から上に戻ろうとした。

すると、カービィの頭の中にまたあの声が聞こえてきた…。

????

「（私の…友達…！返して…！！返して…！！）」

カービィは、びっくりして振り返った！
しかし、誰の姿もなかった…。

リボン

「カービィ…？どうかしたの？」

リボンは、心配してカービィに近寄った。

カービィ

「ううん…。なんでも！さ、早く行こ…！」

カービィは、違和感を感じていたがひとまず地下から出て行った。

そのころ、カービィの家では、コピー精霊たちがいた。

ワドルディ

「お城がだけが地震なんて変っスね…！」

バーニンレオ

「まあ…カービィに任せとけば大丈夫じゃないか？」

すると、ブレードナイトは外に出て行こうとしていた。

バーニンレオ

「おい。どこ行くんだ？」

ブレードナイト

「メタナイト様が心配なので…。城の様子を見にいつてくる」

ブレードナイトがそう言うと、ワドルディとバーニンレオも手をあげた。

ワドルディ

「オイラも行くっス!!」

バーニンレオ

「じゃあオレも!!」

ブレードナイト

「では、バードン。先にカービィ殿が帰って来たらお伝えしてくれ」

そう言うと、ブレードナイトたちは家を出てお城に向かって歩き出した。

とはいっても精霊のため、少し宙に浮いている。

しかし、しばらく歩いていると急に体が吸い込まれるように宙に浮いた！

バーニンレオ

「な、なんだ!?!」

すると、体が勝手にフィギュアのような姿「コピーの素」になり、消えてしまった…。

すると、それと同時に謎の少女の声が響き渡った…。

???

「まずは三人…。あとは二人…」

そして、日はすっかり落ちて夜になった…。
しかし、ワドルディたちは帰って来ない…。

カービィ

「ワドルディたち遅いなあ…。どうしちゃったんだろ…」

カービィは、窓を開けて辺りを見回したがワドルディたちの姿は見えなかった。

リボン

「メタナイトの所に止まってくるんじゃないかな？」

バードン

「うーん…。謎だらけね…。ふわぁ…。じゃあ私たちは先に寝るよ。
カービィもリボンちゃんもなるべく早く寝なよ！」

カービィ

「う、うん…」

バードンとチリーは、コピーの素に戻って寝た…。

カービィ

「（確かに…もう遅いし…。明日になったらメタナイトの所に行こ
つと…）」

カービィは、窓を閉めるとバードンたちのコピーの素が目に入った

…。

カービィ

「…………あれ？」

リボン

「どうしたの、カービィ？」

リボンは、カービィに近寄ってコピーの素を見た。

カービィ

「ねぇ…。ワドルディたちのコピーの素は…？」

リボン

「そ、そういえば…」

なんと、大事に置いておいたコピーの素が、居なくなったワドルディたちの物だけキレイに無くなっていた！

リボン

「どういう事なのかな？出かけてもコピーの素は残るハズだよね…」

カービィ

「わ、分かんない…。でも、なんか…嫌な予感がする…」

カービィとリボンは、不安になりながらも、もうすっかり夜になってしまったのでその日は寝ることにした…。

そして、次の日になりカービィとリボンは、メタナイトの所に向か

った。

カービィ

「メタナイト〜！」

カービィとリボンは、慌しくメタナイトの部屋に飛込んだ。

メタナイト

「一体どうしたんだ？」

カービィ

「昨日、ここにワドルディたちが来なかった!？」

メタナイト

「いや…私の所には来ていないが…。何かあったのか？」

カービィは、メタナイトにコピーの素が無くなり、ワドルディたちが行方不明である事を話した。

メタナイト

「そ、それは本当か!？」

カービィ

「うん…。だから今日は、バードンとチリーのコピーの素は持って来たんだ…」

リボン

「みんな心配だね…。大丈夫かな…？」

すると、またデデデ城が激しく揺れ始めた！

カービィ

「う、うわわ…！」

リボン

「じ、地震！？」

揺れは少しずつ弱くなったが、中庭で何かが爆発するような音が聞こえてきた！

そして、カービィたちはすぐに中庭に向かった。すると、中庭には大きな穴が開いていた…。

リボン

「何…？この穴…」

カービィ

「わ、分かんない…」

しばらくすると、穴の中から体がリボンと同じくらいの子が現れた…。

背中には、天使の羽がついていて、服は真っ白で髪は黄色、頭の上には輪がついていた…。

現れた謎の少女は、冷たく凍り付いたような目をしていた…。

???

「……」

謎の少女は、カービィを指差した…。

カービィ

「えっ…？」

「??？」

「返して…。私の友達…」

カービィ

「と、友達…？何の事…？訳が分からないよ…！」

メタナイト

「お前は何者だ？」

エンジェル

「私はエンジェル…。このお城に封印されていたコピー精霊よ…」

リボン

「コ、コピー精霊…？」

コピー精霊だと聞いてカービィたちは、驚いた。

カービィ

「じゃあ友達って…他のコピー精霊達の事…？」

リボン

「でも、ワドルディたちは元々カービィと村で暮してた親友だよ！封印されて知らないハズなのに絶対おかしいよ…！」

エンジェル

「私は一人で封印されたの！コピー能力を使う戦士がいなくなった

と言う理由で…。私、ずっと一人で寂しかった…。だから…。コピー能力を使うカービィが憎いのよ…。！」

エンジェルは、カービィに向かって弓矢を飛ばしてきた！

カービィ

「は、速い…。！」

メタナイト

「ちっ…。！」

すると、メタナイトがカービィの前にまわりこみ、矢はメタナイトの腕に命中した。

エンジェル

「あら…。まさか、カービィをかばうなんて…。でもこの矢に当たると当分思うように動けなくなるわ。もうジャマする事は出来ないわよ…。！」

エンジェルは、カービィに向かって弓を構えた。

メタナイト

「に、逃げろ…。！カービィ…。！」

カービィ

「う、うん…。！（あの子…。なんかおかしい…。！上手くは言えないけど…。）」

カービィとリボンは、走ってお城を出て逃げに行った…。

エンジェル

「逃がさない…！」

エンジェルもカービィたちを追いかけて行っただ。

カービィ

「でも、逃げてばっかじゃワドルディたちを助けられないよ…！」

リボン

「じゃあやつぱりエンジェルちゃんに捕まってるのかな？」

カービィ

「た、多分…」

カービィたちは、いつの間にか川に出た。

エンジェルは、カービィたちに気づかれないように空に浮いていた。

エンジェル

「フフフ…。鬼ごっこもこのくらいにしようかな」

エンジェルがそう言うと、川の水がカービィたちに向かって飛んできた！

カービィ

「うわあ！？」

リボン

「なんで急に…！？」

すると、カービィはとっさにコピー精霊のチリーの力でアイスをコピーした。

カービィ

「ブリザード!!」

カービィは、水に向かって冷たい冷気を出した。
すると、水は固まり動きが止まった。

すると、カービィの体からコピーが抜けると、チリーはエンジェルの方に吸い寄せられて行った!

チリー

「うわああ!?!カービィーッ!」

カービィ

「チ、チリー!!」

チリーは、コピーの素の姿になってエンジェルに奪われてしまった。
すると、エンジェルはまた弓を構えると、カービィ目掛けて放ってきた!

カービィ

「あわわ...!」

カービィは、後ろに下がりながら矢をかわしていたが、後ろに足場

がない事に気がついた。

カービィ

「えッ…！？が、崖ーッ！？」

矢は、次々とカービィの体のまわりに刺さった！
すると、刺さった地面からヒビが入り始めた！

カービィ

「く…！」

そして、崖はついに音をたてながら崩れはじめた！

カービィ

「う、うわっ！うわああー！！」

カービィは、崖から転落した！

リボン

「カービィーッ…！」

リボンは、落ちて行くカービィを助けようとして飛んで行った。
しかし、エンジェルはリボンがカービィに近づかないように矢を放
ってきた！

リボン

「きゃっ…！！こ、このままじゃカービィが…！」

カービィ

「（この高さじゃワープスターを呼んでも間に合わない…！！でも、

バードンの力を借りる訳にもいかない…！）」

バードン

「駄目だよ、カービィーッ！！」

バードンは、無理矢理カービィにコピーをさせ、ウイングの能力をコピーした。

カービィは、地面につく直前に止まり、着地した…。

バードン

「良かった…。カービィが無事で…」

カービィ

「バ、バードン…！どうして！？バードンの能力使ったらあの子に…！」

すると、バードンは、ニコツと笑った…。

バードン

「お願い…。あの子に【本当の友達の意味】を教えてあげて…」

そう言うと、バードンはエンジェルの方に吸い寄せられるように行ってしまった…。

エンジェル

「これでそろったわ…。でもこれ以上、ジャマされたくないからカービィにトドメをさそうかしら…！」

エンジェルは、弓を構えてカービィの前に立った。

リボン

「カ、カービィッ!!」

リボンは、カービィの前に立った。

エンジェル

「退きなさい。あなたも死んじゃうわよ?」

リボン

「退かないよ!絶対に!!」

エンジェル

「仕方ないわね…」

エンジェルは、ギュッと弓を引いた。

すると、カービィはリボンの前に立った。

リボン

「カ、カービィ!?!」

カービィ

「エンジェルちゃん…。君は…君は、友達を何だと思ってるの…?」

カービィは、うつむいたままエンジェルに言った。

エンジェル

「え…？」

カービィ

「ねえ…なんだと思ってるか聞いているの…！」

必死に何かに耐えているかのように、カービィの体は小刻みに震えていた…。

エンジェル

「な、何を急に…？」

エンジェルは、弓をおろした…。

カービィ

「いいから…答えてよ…。答えてみてよ！さあ、早く…！！」

カービィは、エンジェルに怒鳴り散らした！

リボン

「カ、カービィ…？」

リボンは、珍しく怒鳴るカービィを見て少し戸惑った。

カービィ

「君なんかには分かんないよね…。友達を無理矢理捕まえたり、奪い合ったり…！！そんなの…そんなの友達じゃないよ…！！」

カービィは、エンジェルに向かって叫びながら訴えるように言った。

エンジェル

「…！わ、私はただ…！」

カービィ

「友達は、あやつり人形じゃないんだよ！！それなのに無理に奪い合ったりするなんて、まるで道具扱いだよ…！！」

ついに、カービィの目からは涙があふれていた…。

カービィの言葉で胸をうたれたエンジェルは、弓を地面に落とした…。

そして、泣き出してしまった。

エンジェル

「う…ううっ…！」

カービィ

「エンジェルちゃん…。長い間一人で閉じ込められてて心が痛んでるのは分かるよ。でも、友達にこんなことしちゃダメだよ…。」

すると、エンジェルの体からワドルディたちが出てきた。

ワドルディ

「エンジェルちゃん…」

エンジェル

「み、みんな…」

すると、カービィはエンジェルに手を出した…。

エンジェル

「え…?」

カービィ

「僕の所においでよ。そうすれば君はもう一人じゃないよ!!」

カービィは、ニコツと笑った。

エンジェル

「私なんかが…いいの…?」

バードン

「当たり前じゃない!!大歓迎よ!」

エンジェル

「ありがとう…みんな…!」

エンジェルが光りに包まれると、コピーの素がカービィの手に渡された。

そして、何故か鏡の破片も現れた。

カービィ

「でも、エンジェルちゃん的能力って何なの?」

エンジェル

「それは、まだ秘密よ!」

カービィ

「で、何で鏡の破片が…？」

エンジェル

「さ、さあ…？（私が偶然拾って使ってたなんて言えないわ…）」

カービィたちは、お城に眠っていた伝説のコピー精霊仲間にする
ことができた。

そして、いよいよ最後の戦いへ！

第20話

「壊れた心を持つ天使」

おわり

第21話 涙のラストバトル

こんにちはっ！

リボンです♪

長い間一人で封印されていた伝説のコピー精霊「エンジェル」ちゃん
の心を理解して仲間になってくれたの！

でも、ポップスターのようすがなんだかおかしくなってきたの…。

カービィたちは、思わぬ事件により伝説のコピー精霊と最後の鏡の
破片を手に入れる事が出来た。

バードン

「やったね、カービィ！これで鏡の国に行けるね！」

カービィ

「うん！とりあえずみんなが心配してるから、お城に戻らなくちゃ
！」

カービィは、走ってお城に向かいはじめた。

カービィの後ろからリボンが飛んで後をついてきている。

すると、リボンは空を見上げた。

そして、黒い雲が空を覆い始めている事に気がついた。

リボン

「ちよつとカービィ！アレ見て！！」

カービィ

「えっ！？」

カービィは、立ち止まって空を見た。

カービィ

「黒い雲……？それにあの辺は鏡の国の入り口がある所だ……」

カービィは、悪い事が起きると直感した。

すると、カービィはすぐにワープスターを呼んだ！

カービィ

「ワープスターッ！！」

カービィは、飛んできたワープスターに飛び乗るとリボンの手を握った。

カービィ

「さ、早く！リボンちゃん！！」

リボン

「うん！！」

カービィ

「（なんだろ……。なんだかあそこに行ったら……大変な事になる……。そんな感じが……）」

不吉な予感がある中、カービィは急いで雲の下へ向かった。
すると、そこにはすでにリックとクーが立っていた…。

リック

「やっぱカービィも来たか！」

カービィ

「リックとクー！！この黒い雲は何なの？」

クー

「分かんないんだ…。気がついたらもうこうなってたんだ…」

すると、何処からか不気味な声が聞こえてきた…。

???

「やっと来たか…。待っていたぞ、カービィ」

カービィ

「だ…誰！？」

カービィたちは、辺りを見回したが誰も居なかった…。

???

「フフ…！それでは今から私の姿を見せてやろう…」

そう言うと、黒い雲から何かが降りてきた…。

リボン

「カービィ、何か降りてきたよ…！」

カービィ

「う、うん…！」

カービィたちは、緊張しながら降りて来るのを見ていた。

カービィたちよりもはるかに体は大きく、邪悪なエネルギーを放っていた…。

リボン

「…なんだかナイトメアに似てるね…」

クー

「あ、ああ…」

ナイトメアとはカービィが前に倒した敵の事である。

（詳しくは前作で…）

????

「私はダークマインド。鏡の国はすでに支配した。そして、今からこの星をいただく所だ」

ダークマインドは、不気味に笑った。

カービィ

「そんなことさせないよ！」

クー

「カービィの言う通りだぜ…！」

ダークマインド

「クク…！いくらあがいてもムダだ。カービイもバカなヤツだ…。
大人しくダーク化されていれば私に消されずに済んだものを…」

カービイ

「僕にはたくさんの仲間たちがついてる！だから闇の力なんて必要
ないよ…！」

ダークマインド

「フフツ。口先だけは大したものだな…！」

リック

「なんだとー！？カービイ合体だ…！」

カービイ

「うん…！」

カービイは、リックの背中に乗った。

カービイ

「クー、リボンちゃんと一緒に下がってて！」

クー

「分かった！」

クーは、リボンを連れて少し場所を離れた。

ダークマインド

「私もなめられたものだな…」

カービィは、コピー精霊のバーニンレオの力でファイアをコピーした。

リック

「よっしゃ！コピー完了だな！！行くぜ！」

リックは、ダークマインドに向かって走り、ジャンプをした。

リック

「ファイアッー！！」

リックは、ダークマインドに炎を放った！

ダークマインドは、炎に包まれたが攻撃が当たっていないかのよう
にその場に立っていた…。

リック

「き、きいてない…！？」

ダークマインド

「ククク…！！何かしたのか？」

ダークマインドは、そう言ってマントを広げた。

すると、中から無数の星が飛び出てきた！

リック

「…！くっ！うわあっ…！」

ジャンプ中に狙われたリックは、体勢を崩しながら地面に着地した
…。

カービィ

「リ、リック！！大丈夫！？」

ダークマインド

「フ…。空中では攻撃をかわすことができんかな…。そんなことも知らなかったのか？」

ダークマインドは、余裕を見せて笑った。

リック

「カービィ、どうすんだ…？」

カービィ

「う…う…ん…」

ダークマインド

「攻撃してこないのならこっちから行くぞ…！」

ダークマインドは、マントを広げ、次々と星形の弾を飛ばしてくる。

リック

「うわわわ…！」

リックは、炎で壊したりしながら攻撃をかわした。

すると、ダークマインドはリックの後ろにまわり込むとリックたちを手で弾き飛ばした！

リック

「うわあぁっ…！」

リックは、地面にこすれながら倒れた。

ダークマインド

「クク…！よそ見をしていると危ないぞ…！」

カービィ

「リ、リック…！」

リック

「カービィ…。だ、大丈夫か？」

ダークマインド

「フフフ…。二人で戦ってもこの程度とはな…。それに、ダメージはカービィにも伝わっているらしい…。息があがってきているぞ」

ダークマインドは、ニヤリと笑った…。

すると、カービィはリックから離れた…。

カービィ

「あとは、僕が何とかする…！リックは、下がってて！」

リック

「カ、カービィ…！」

リックは、かけつけたクーによって安全な場所に避難させられた。

カービィ

「ファイア…！！」

カービィは、ダークマインドに炎を放った！

しかし、炎はダークマインドの体をすり抜けて行ってしまった…。

ダークマインド

「何度やつてもムダだ。では、そろそろ終わりにしてやろう…！」

ダークマインドは、マントを広げて星形の弾を出そうとした。

すると、カービィはダークマインドのお腹あたりに大きな目のような物が付いているのに気がついた…。

カービィ

「（まさかアレって…目！？悩んでる時間も無い！！いちかばちかだぁ…！！）」

カービィは、ダークマインドの体めがけて突っ込んで行った！

カービィ

「バーニングアタック…！」

カービィは、火の玉になってダークマインドのお腹にぶつかった！

カービィ

「あ…当たった…？」

カービィは、ダークマインドから離れた…。

すると、ダークマインドは苦しそつにお腹をおさえていた。

ダークマインド

「く…！まさかこうも簡単に弱点を見破られるとは…。仕方がない…私の本当の姿を見せてやろう！」

ダークマインドは、黒い雲に包まれた…。

カービィ

「（今の姿のままでも十分強いのに…！まだ変身出来るなんて…）」

すると、雲の中からカービィの体の何倍もある大きな球体が姿を現した。

リボン

「な、何…？アレ…」

クー

「まさかあれがさっきのヤツか…？」

離れて見ているリボンたちもびっくりしていた。

ダークマインド

「フフ…。出来ればこんな醜い姿にはなりたくなかったが…仕方がない。お前だけは、キレイに消し去ってやろう…！」

ダークマインドは、声を荒くしながらカービィに言った。

カービィ

「く…！（さっきのアタックのダメージも無くなってる…！）」

ダークマインド

「まずは、軽く様子を見てやろう！」

ダークマインドは、二枚の鏡を出した…。

すると、鏡は急に4枚に割れてカービィに向かって飛んできた！

カービィ

「うわっ！」

4枚に割れたうちの一つがカービィの左足をかすった！

カービィ

「いたた…！」

カービィは、左足をおさえ込んだ。

ダークマインド

「ククク…！もうその足は使えないぞ！片足で戦う気か？」

カービィ

「か、片足あれば大丈夫だもんツ…！」

カービィは、起き上がって言った。

しかし、左足には激痛が走り、まともに立てる状態ではなかった…。

ダークマインド

「その強がりもすぐに無くしてやるぞ…！」

ダークマインドは、目にエネルギーを溜め始めた…。

カービィ

「マ、マズいかも…。ワ、ワープスターツ…！」

カービィは、ワープスターを呼んだ。
しかし、なかなかワープスターは飛んで来ない…。

ダークマインド

「フハハ！ついにワープスターにまで見捨てられたか！さあ、消してやる！！」

ダークマインドは、目からビームを放った！

カービィは、なんとか片足でジャンプをしてかわした。

ダークマインド

「あまいぞ！私は一度エネルギーを溜めると連続でビームを放てるのだよ！」

ダークマインドは、空中にジャンプしたカービィに向かってビームを放った！

すると、ビームが当たる瞬間にワープスターがカービィを乗せてかわした！

カービィ

「ふう〜…。失敗したらどうしようかと思ったよ〜…」

ダークマインド

「ほう…。わざわざワープスターのタイミングを遅らせていたのか…。だがこうすればどうかな？」

ダークマインドは、いきなりリボンたちの方を向くとビームを放った！

カービィ

「リ、リボンちゃん…！！」

カービィは、すぐにリボンたちの前に移動した。

カービィ

「ファイアーツ…！！」

カービィは、なんとかビームを止めようと炎を放った！

リボン

「カ、カービィ…！！」

カービィ

「（みんなは絶対守らなくちゃ…！何があっても！）」

しかし、カービィは次第に押され始めた…。

ダークマインド

「フフ…！もう終わりだな」

ダークマインドは、さらにビームを強めた。

カービィ

「く…！みんな…！僕から早く離れて…！そして、この星から逃げて…！」

カービィがそう言うとワープスターにヒビが入り、少しずつ割れてきた…。

ワープスターは、カービィの【エネルギー源】。ワープスターが壊れれば一心同体に近いカービィは死んでしまう…。

（詳しくは前作でね）

リック

「な、何言ってんだよ！？オレは逃げねえぞ！！」

強がるリックの肩をクーはポンツとたたいた。

クー

「今は…カービィの言う通りにしよう…」

クーは、無理矢理リックを連れてお城に向かって走って行った…。

カービィ

「（もうダメ…。今度こそお別れかもね…リボンちゃん…）」

カービィは、ついにダークマインドの強力なビームに包まれた…。

カービィ

「うわあああ…！！」

ダークマインド

「ククク…！フハハ…！ついにカービィを倒したぞ！」

カービィは、岩にたたきつけられたのかうつぶせになって倒れ、ワープスターは割れていた…。

そして、体は少しずつ温もりを失っていった…。

ダークマインド

「ついに体まで冷たくなったか…。安心しろカービィ。この星を頂き全宇宙は私が支配してやるぞ」

そう言うと、ダークマインドはデデデ城に向かって飛んで行った。

カービィ

「（こんな所で死ぬわけにはいかないのに…！でも…もう力が出ない…）」

すると、冷たくなったカービィにコピー精霊たちが近寄ってきた。

バードン

「カービィ…！死なないでよ…！！」

ワドルディ

「カービィ！！起きるっスーッ！！」

しかし、カービィは目を閉じたまま、全く動かなかった…。

エンジェルは急いでカービィの体に触った…。

すると、エンジェルは、カービィの心の中に入っていた…。

カービィの心の中には、カービィが立っていた…。

カービィ

「エンジェルちゃん…？僕はもうダメだよ…」

エンジェル

「カービィ…。私の力を貸してあげる！だから頑張つて…！！」

カービィ

「エンジェルちゃんの力…？」

エンジェル

「うん…。でも、この能力は強力すぎて使ったカービィの命までも無駄にしちゃうかもしれないわ…。それでも使ってみる…？」

エンジェルは、真剣な顔をして言った。

カービィ

「…うん！そうすればみんなを救えるなら…宇宙を守れるなら！！」

エンジェル

「うん…。分かったわ。受け取って…！」

するとカービィは、激しい光りに包まれた…。

そのころ、クーたちはお城へ向かって行く途中だった…。

リック

「離せ！！オレはカービィを放つてなんか行けない！！」

リックは、無理に連れて行こうとするクーに抵抗していた…。

クー

「いい加減にしろ！オレだってカービィを置いて行きたくななんてな

い！！でも…こうするしかないんだ…！！」

リック

「そんなの分かんねえよ！リボンちゃんもコイツに言ってやってくれよ！！」

リックは、リボンの方を向いた。

すると、リボンは大粒の涙を出していた…。

リボン

「リックの気持ちは分かるけど…！！でも…カービィの戦いをムダにしたくないから…。ゴメン…上手く言えないよ…」

リボンは、必死に涙を堪えながら言った。

リック

「リ、リボンちゃん…」

自分よりも辛い思いをしているリボンを知ったリックは、ついに抵抗するのをやめた…。

クー

「とにかく、デデデ城に行こう！！」

クーたちは、再びお城に向おうとした時だった…。

後ろからダークマインドの不気味な声が聞こえてきた。

ダークマインド

「ククク…！逃がしはしないぞ！」

すると、ポップスター全体が黒い雲に覆われ始めた…。

リック

「もう追いついて来たのか…!!」

ダークマインド

「フフフ…！安心するがいい。すぐにカービィと同じ所に連れて行ってやるっ…」

そう言うときダークマインドは、ゆっくりと近づいてきた…。

リボン

「（カービィ…！助けて、カービィ…!!）」

リボンは、心の中で必死に祈った…。

カービィ

「待てーッ!!」

すると、やられたハズのカービィが割れたワープスターに乗ってやってきた！

ダークマインド

「何ッ！？キ、キサマ…!!生きていたのか!？」

さすがのダークマインドも驚きを隠せない様子だ。

カービィが現れて嬉しいリボンたちだったが、クーはカービィの異変に気がついた…。

クー

「（ワープスターが割れているのに…どうしてカービィは戦っていられるんだ！？致命傷になってしまっハズなのに…。それに、あの能力は何なんだ…？）」

カービィは、先端にハートの付いたステッキを持っていた。

ダークマインド

「キサマ…！その能力を一体どこで！？」

カービィ

「これは、伝説のコピー精霊のエンジェルちゃん的能力【ラブラブステッキ】だよ！」

カービィは、ラブラブステッキを空に向かってつきあげた。すると、ポップスターを覆っていた黒い雲が少しずつ消え始め、地面に生えている草やポップスターに住んでいる人たちからピンク色の光が飛び出してきた！

ダークマインド

「な、なんだ！？一体これは何なんだ！？」

カービィ

「これは、みんなの心にある【愛情】や【人をおもいやる気持ち】だよ…！そう、お前たちが一番嫌いな言葉だよ！」

光りは、カービィの持つラブラブステッキに集まり、カービィの体からも光りを放っていた。

リボン

「キ、キレイ…！本当に天使みたい…！」

ラブラブステッキは、さらに激しい光りを放ちはじめた。

ダークマインド

「く、苦しい…！や、やめろーッ…！」

ダークマインドは、苦しみながらビームを放った！

ビームは、カービィに当たり、煙に包まれたが無傷のまま出てきた。カービィの体を包んでいる光りがカービィを守ったのである。

ダークマインド

「な、なぜだ！？なぜ私の攻撃が通じないのだ！？」

すると、カービィは、つきあげていたステッキを構えた。

カービィ

「くらええーッ…！」

カービィは、勢いよくステッキを振った！

すると、ハート形のビームが飛んでいき、ダークマインドの体を包み込んだ。

ダークマインド

「く…苦しい…！や、やめろ…！ぐ、ぐわああーッ…！」

ダークマインドは、激しい光りに包まれると爆発してしまった…。

クー

「た、倒したのか…？」

リック

「よっしゃーッ！！さすがカービィだぜ！！」

カービィは、フラフラしながら地面に着地した。
すると、リボンはすぐにかげよった。

リボン

「カービィーッ！！だ、大丈夫！？」

カービィ

「う…うん…！なんとかね…」

カービィはついに悪の親玉【ダークマインド】をみんなの力を借りて倒す事が出来た。

そして、今回の戦いもそろそろ幕を閉じようとしている…。

第21話

【涙のラストバトル】

おわり

第22話 はるかぜといっしょに…

やっほー♪

カービィだよ！

どうやらこの日が来ちゃったみたい。

みんなにお別れ言ってから旅立ちたいな！

でも、リボンちゃんと別れちゃうのは辛いな…。

カービィは、しばらく座って休むと立ち上がった。

リボン

「カービィ…？どうかしたの？」

リボンは、心配してカービィの顔を覗き込んだ…。

そして、悲しそうな顔を見ると、コピー精霊たちが現れた…。

バードン

「カービィ…。そろそろ時間だよ…」

カービィ

「…やっぱりもう行かなきゃダメなの？」

カービィは、少しうつむいた…。

エンジェル

「やっぱりカービィにあの力は大き過ぎたみたいなの…。早く行かないと…。それに、他にも行きたい所があるんでしょ？」

カービィ

「うん…。そうだね！」

カービィたちの話を聞いてもリボンたちには訳が分からなかった…。

リボン

「ちよつと…。どこかに行くの…？話がよく分からないよ…」

すると、カービィはニコツと笑った。

カービィ

「うん。ちよつとね…！」

そう言うと、カービィはワープスターに乗った。
ワープスターの壊れた部分は何故か直っていた…。

クー

「ちよ、ちよつと待てよ！何も今すぐ行かなくても…」

クーは、カービィにかけよった。

すると、カービィの体が一瞬だけ透けて見えた…。

クー

「（え…！？す、透けた…？）」

驚きながら見ているクーを見てカービィは、笑った。

カービィ

「じゃあ、またね!!」

そう言うと、カービィとコピー精霊たちは空に浮かび上がった。

そして、手を振りながらお城に向かって飛んで行った…。

リック

「なんだかよく分かんなかったな…。クー、オレたちも一回森に帰ろうぜ!」

しかし、クーは下を向いて立ったまましばらく黙ったままだった…。

クー

「悪い…。リボンちゃんを連れて先に行っててくれないか…?」

リック

「えっ…?よく分かんないけど、分かったぜ!先に行こうぜ、リボンちゃん」

リボン

「う、うん…」

リックは、リボンちゃんをカービィの家に連れて行った…。

クーは、誰も居なくなつたのを確認すると地面に落ちていた何かを拾った。

なんと、それは壊れた【ワープスター】だった…。

クー

「（カービィ…。お前まさか…！）」

クーは、カービィが飛んで行った方向をずっと見つめていた。

そのころ、カービィはお城に着いていた。

カービィ

「メタナイト…！居る…？」

カービィが中庭に向かうとメタナイトが剣を振っていた。

メタナイト

「カービィか。急にどうしたんだ？」

カービィ

「メタナイト、傷が大した事がないなら一緒に戦ってくれてもよかったのに…」

カービィは、ブスつとした顔をした。

メタナイト

「フ…！悪い悪い…。私は戦うために女王様のクリスタルの力で傷を治してもらったんだが、その前にお前が倒してしまったという訳さ」

カービィ

「まあ…いつか！ねえねえ！それよりさ、剣のお稽古してよ…！」

カービィは、いきなり剣の稽古をメタナイトにお願いしはじめた。

メタナイト

「フ…。何を言っている…。もはや私などお前になう訳がないだろ？」

カービィ

「いいからいいから！」

カービィは、近くにあつたメタナイトの予備の剣をコピーした！

メタナイト

「仕方ない…。では、行くぞ…！」

メタナイトとカービィは、激しくぶつかりあつた！

そして、辺りには剣のぶつかりあう音が響き渡つた…。

メタナイト

「ハアツ！」

メタナイトは、剣を振つた！

カービィは、剣で受け止めたがメタナイトに足で蹴り飛ばされた！
蹴り飛ばされたカービィは、地面に叩き付けられると倒れ込んだ。

メタナイト

「…！？（いつものカービィならよけられるハズだが…）」

すると、カービィは起き上がった。

カービィ

「いたたあ…。やっぱりメタナイトは強いや！」

カービイの言葉にメタナイトは目を閉じた。

メタナイト

「何を言っているのだ。お前がよけられるものをよけなかったただけだろう…」

そう言っでメタナイトは目を開けた。

すると、カービイの姿が次第に透明になり、消えてしまった…。

メタナイト

「ど、どういう事だ…？」

メタナイトは、辺りを見回したがカービイの姿は無かった…。

そして、カービイの使った剣と緑色の帽子だけがさみしそうに地面に突き刺さっていた…。

リック

「ふう…。これでやっとゆっくり出来るな！」

リックは、切り株の上に座って一息ついていた…。

すると、後ろからカービイがやってきた。

カービイ

「リック〜！」

リック

「おっ！？カービィじゃねえか！もういいのか？」

リックがそう言うのとカービィは悲しそうにつつむいた…。

リック

「ど、どうしたんだよ？」

リックは、心配そうにカービィに近寄った…。

カービィ

「実は僕…リックにお別れしにきたの…」

カービィから出た言葉にリックは、驚いた。

リック

「ハハハ…！何言ってるんだよ？」

カービィ

「あのね…僕…」

カービィは、ラブラブステッキの事を話した…。

カービィ

「だから、だからね…」

カービィが話し終わるとリックはブルブルと震え始めた…。

カービィ

「リック…？」

リック

「勝手な事…そんな勝手な事を言っ…！」

リックは、カービィを殴り飛ばした！

カービィ

「つつ…！」

カービィは、殴り飛ばされると地面に転がった…。

リック

「何で…何でそんなに平気な顔してんだよ…。お前は、平気だって言うのかよ…！」

リックが怒鳴り散らすとカービィもリックを殴り飛ばした！

カービィ

「平気な訳ないよ…！僕だって、僕だって…！」

カービィは、ボロボロと泣き始めた…。

リック

「カ、カービィ…！そうだよな…。お前が悲しまない訳ないよな…」

すると、カービィの体が透けてきた…。

カービィ

「リック…！」

リック

「カービィ…！行くなっ…！」

リックは、カービィを掴もうとした。

だが、カービィの体はリックをすり抜けてしまった…。

リック

「…！」

カービィ

「バイバイ…！ありがとう…」

【リック…絶対忘れないから…！】

リック

「ああ…！オレも忘れねえぜ！」

リックは、涙を流しながら呟いた…。

そして、その姿を木の影からクーが見ていた…。

クー

「リック…」

クーは、リックの側からそっと離れて行った…。

そして、夜になった…。

リボンは、カービィの家でカービィの帰りを待っていた…。

リボン

「カービィ遅いな…。それとも今日は帰って来ないのかなあ…」

リボンは、窓を開けて空を見上げた。

すると、流れ星が流れた…。

リボン

「あ！流れ星だ！…えっと…カービィといつまでも一緒に居られま
すように…」

リボンは、流れ星に祈った。

すると、リボンは何かを思い出し、急に家を飛び出した。

リボン

「（もしかしたら…。カービィはあそこにいるかも！）」

リボンが向かったのは、何もない草原だった…。

だが、この草原はカービィと初めて出会った思い出の場所…。

そして、星が好きなカービィがよく来る所だった…。

辺りを見回すと、カービィが星を見ていた…。

リボン

「あッ！カービィ！！」

カービィ

「リ、リボンちゃん…」

カービィは、びっくりして立ち上がった。

リボン

「やっぱりここにいたんだね！帰って来ないから心配してたんだよ！…」

すると、カービィは少し困ったような顔をした…。

カービィ

「リボンちゃん…。僕、もう一緒に居られなくなっちゃったんだ…」

リボン

「えっ…！？ど、どういう事…？」

カービィ

「ゴ、ゴメン…！！」

カービィは、目に涙を浮かべながらワープスターで飛んで行ってしまった…。

リボン

「カ、カービィ…？」

リボンは、飛んで行くカービィをただただ見つめていた…。

すると、コピー精霊のエンジェルが現れた。

エンジェル

「あなたにお願いがあるの…」

リボン

「わ、私に…？」

エンジェル

「うん…。コピー精霊になってくれないかな？」

エンジェルの言葉にリボンはびっくりした。

リボン

「わ、私がコピー精霊に！？」

エンジェル

「そう…。カービィは、私の能力を使ったせいでこの世界には居られなくなったの…。でも、そしたらカービィの心を支える人が居なくなっちゃうの…」

リボン

「でも、ワドルディたちが居るんじゃ…？」

エンジェル

「あなたはカービィにとって一番大切な人なんだよ。だから…いつまでも一緒にいてあげて欲しいの！」

リボン

「うん…！分かった！！でも…本当に私でいいのかな…？」

リボンが悩んでいると、後ろから声が聞こえてきた…。

女王様

「リボン、行ってあげなさい」

リボン

「じよ、女王様…」

リボンは、びつくりして振り返った。
すると、そこにはクーも立っていた。

クー

「リボンちゃん…。カービィの事、頼んだぜ!!」

リボン

「…うん!!」

リボンは、エンジェルと手をつないだ。

すると、エンジェルと2人で一つのコピーの素が出来上がった。

エンジェル

「行動する時は別々になれるけど、私たちもずっと一緒だよ!!」

リボン

「うん!!」

すると、2人はカービィを追いかけて飛んで行った。

そのころ、カービィはワープスターに乗ってエンジェルを待っていた…。

カービィ

「エンジェルちゃんどこに行ったんだろ…？エンジェルちゃんが居ないと行けないよ…」

カービィは、辺りを見回した。

すると、二つの光りが飛んで来るのに気がついた。

カービィ

「あ、あれは…。リボンちゃん…」

リボンとエンジェルは、カービィの近くで止まった。

エンジェル

「おまたせ！」

カービィ

「リ、リボンちゃん…。どうしてコピー精霊に…？僕、もう居なくなっちゃうのに…」

すると、リボンはニコツと笑った。

リボン

「何言ってるの？私たちは、ずっと一緒だって約束したじゃない！」

バードン

「まあ…そういう事ね！カービィもダメじゃない！女の子との約束やぶっちゃー！」

カービィ

「バ、バードンまでヒドいや…」

カービィは、ガックリしながら言った。

すると、カービィたちの体が少しずつ消え始めた…。

カービィ

「もう、ププランドともお別れだなんて寂しいな…」

リボン

「うん…」

カービィとコピー精霊たちは手をつないで消えていった…。

キレイに輝く星のしたで…

そして、あれから数百年もの月日が流れた…。

ププランドは、前と変わりはなく平和でのどかな楽園のままだ。

しかし、あの頃のみんなはもう居ない。
コピー精霊のリボンたちを除いては…。

バードン

「まさかまたこうしてププランドに居られるようになるとは思わなかったわね!!」

ワドルディ

「オイラも驚きっス!!」

バーニンレオ

「この村も前と少しも変わらないしな!」

バードンたちは、カービィが住んでいた家で話をしていた。

エンジェル

「フウ…。そろそろ村に行く時間じゃない?」

リボン

「うん!そうね!」

リボンは、家の外でエンジェルと何やらしたくをしていたが、ドアを開けて聞き覚えのある名前を呼んだ。

リボン

「カービィ!行くよーッ!!」

すると、名前も見た目も全く同じの「カービィ」が家から出て来た。

カービィ

「はぁ〜い!!」

カービィは、元気よく家から出てきた。

すると、カービィはもう一人名前を呼んだ…。

カービィ

「カービィ〜!早く〜ッ!!」

カービィが名前を呼ぶと、中から体が黄色のカービィが出てきた。

キービィ

「お兄ちゃ〜ん!待ってよ〜…」

カービィ

「さ、早く行こっ!!」

キービィ

「うんっ!!」

カービィとキービィを見て、リボンはニッコリと笑った…。

リボン

「(まさか、「カービィ」の生まれ変わりがまた【カービィ】だなんてね…。しかも双子で現れるなんて…。今、この子たちに色々な事を教えてあげるのが私たちの役目…。カービィ、ずっと見守ってね!!〜)」

エンジェル

「さ、リボンちゃん！早く追いかけてくちや！！」

リボン

「そうだね！！」

リボンたちは、カービィたちを追いかけて行った…。

カービィは居なくなっただが、新生【カービィ】【キービィ】が誕生した…。

こうして生まれた新しい命の兄【カービィ】と妹【キービィ】はまだまだ子供だけど、立派に成長して行くことでしょう。

そう、物語は続いていくのです…。

お
し
ま
い

第22話 はるかぜといっしょに…（後書き）

どーも！はるかぜ（春風）です。

今回の物語はどうだったでしょうか？

今回第2シリーズには、あんまり手を加えていないのと、書いた時期が違うので、第1シリーズに比べると少々グダグダしているかもしれません（＾－＾；）

最後に、小説とは言えないような作品を最後まで読んで下さり、ありがとうございます。

なお、第3シリーズを掲載する事にしました！

これも駄文ですが、よろしくお願いしますm（＿）＿m

別サイト掲載

2007年12月31日

本サイト掲載

2009年3月11日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3444g/>

星のカービィ～はるかぜ物語～

2010年10月13日21時42分発行